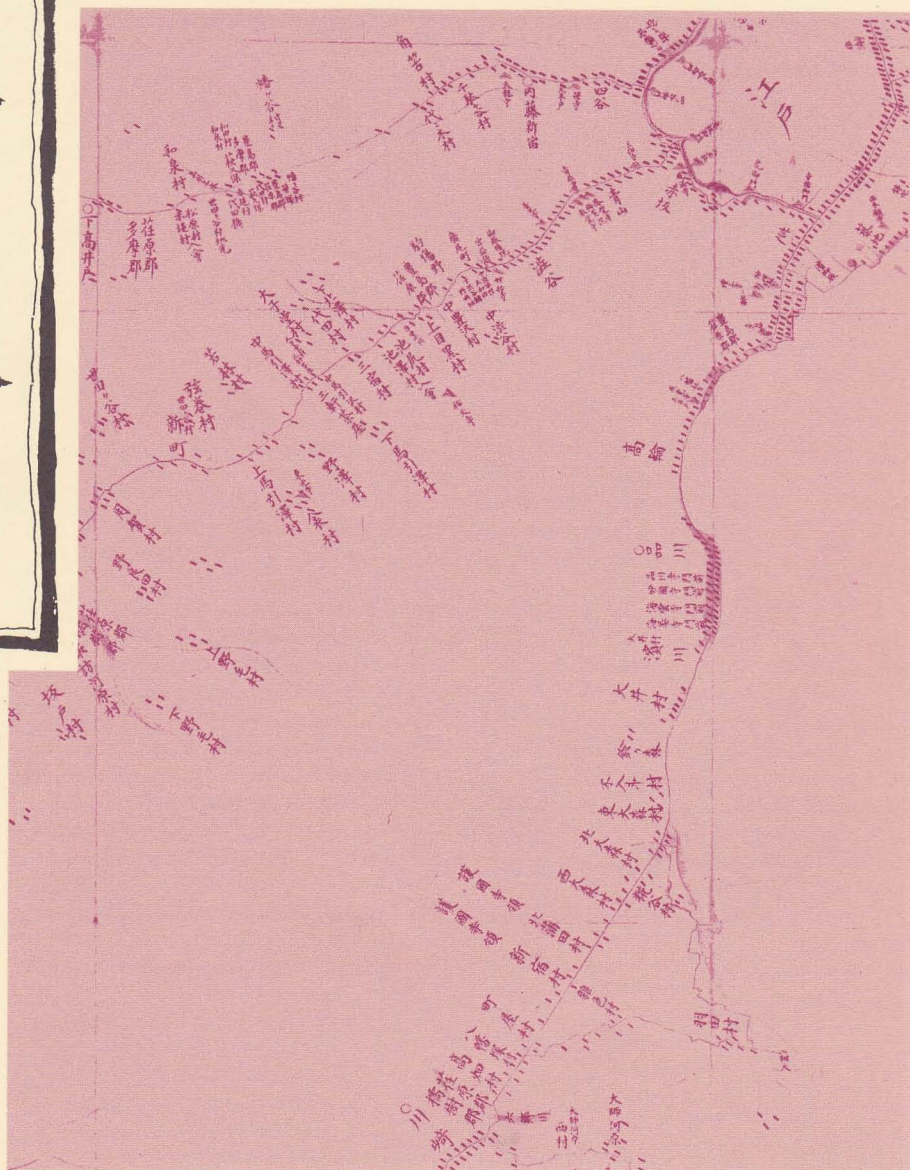


史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇八年 第五一号



伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館所蔵

伊能大図90号 江戸(部分)

この図を目にしてまず印象に残るのは、江戸城外堀をめぐるくつきりとした測線のリングではないだろうか。掲出の図では北部が少しトリミングされている。

この部分は第九次の伊豆七島測量(文化二年四月二十七日出立)に先立つ文化二年(一八一五)二月に測量された。二次にわたった第十次江戸府内測量のうち、第一次の測量部分である。この測量は府内繫測の測量で、江戸から各街道に出る大木戸の位置確定を目的としていた。それまでの測量行では繁華な江戸市中は測らず、各街道が府外に向かう大木戸から測り始められていたため、奥地全図編成のためには、それらの起点の位置確定が必須だったためである。その結果として提出した江戸の図が好評で、あらためて江戸府内測量の命令となり、翌三年の府内第二次測量を経て、南北二枚の江戸府内実測図が作成された。第九次測量をはさむ前後二回の市中測量が第十次とされている。忠敬(当時七歳)は伊豆七島測量には加わらず、また、府内第二次の測量も時折立ち会っただけなので、この府内第一次測量が自身が指揮した最後の測量となる。短期間ではあるが、奥地全図編成の鍵となる重要な測量である。

表紙図の範囲は測量の手始めの部分にあたる。まず高輪の大木戸から北に向かい、東海道と海岸を測り日本橋まで、風雪の翌日を休んで、大山街道渋谷から赤坂、虎ノ門、幸橋門を過ぎて芝口まで、次は半蔵門から麹町、四谷門、大木戸へ、四谷に戻って外堀沿いに市ヶ谷門までの、都合三日分にあたる。半蔵門(内堀)から四谷門に至る麹町の部分はこの地図には描かれていない。増上寺付近にこの図の写し手か利用者による方眼の交点らしきものが見え、左上から右下にかけて磁北方向の斜線が加えられている。

鈴木純子 (題字は伊能忠敬の筆跡)

目次

51号

巻頭

史跡探訪1「伊能忠敬測地遺功表」

話題I

「第二次伊能ウオーク」計画進行中

「唐津街道を行く」

「忠敬の二男、周蔵さんが作った問題」

子年にちなんだ地名

芳名録

塚原政次 佐藤卓蔵

話題II

伊能忠敬旧宅発掘調査報告書

伊能大図総覧の地名と景観(五)

伊能家のおひなさま

研究ノート

シーボルト事件の背景と間宮林蔵(二)

忠敬の目に届かなかった江川書簡

伊能忠敬を訪ねて(二) 佐原—芝公園

伊能隊が閲覧した寺社の縁起や宝物

もう一つの伊能図はすぐ役立っていた

伊能図における経線のズレについて

新潟支部だより

歩測教頭先生と小伊能隊

忠敬談話室だより

お便りから日々の話題 お知らせ

表紙図解説 鈴木純子

新沢 義博

渡辺 一郎

日本経済新聞

新潟日報

齋藤 仁

伊能 陽子

香取 市

星埜 由尚

編集部

大谷 恒彦

藤岡 健夫

石谷 春香

佐久間達夫

荻原 哲夫

吉田 正人

垣見 壮一

編集部

七二



二枚の花崗岩で末広がりの扇型を表す。忠敬（ちゅうけい：中啓＝扇の一種・末広）をもじったもの。本体は日本地図と測天儀をデザインしたが、測地されなかった北海道北端は点線で表わされている。副本には北斗七星と波との間に伊能忠敬の偉業を称える碑文がはめこまれている。（「測地遺功表」を紹介する新沢義博会員）

史跡探訪 1

伊能忠敬測地遺功表

（東京都指定史跡）

- ◇所在地 東京都港区芝公園内 ◇製作者 圓鐔勝三（文化勲章受章者）
- ◇設立年 昭和四十年（再建） ◇設立者 社団法人 日本地学協会
- ◇設立経緯 明治二十二年に設立されたブロンズ製の旧遺功表が戦時中の金属回収策により取り壊されたため、戦後に石材で再建した。

案内人

東京都江東区在 新沢義博

我が人生を変えた忠敬先生の「お告げ」

思い返せば伊能忠敬との出会いは大学時代、夏休みを利用して二カ月間にわたる旅だった。オートバイで日本を一周し、幼少の頃に教わった伊能忠敬の偉大さを身をもって味わった。専攻した地理学の恩師のご縁で研究会の前身である伊能図探求会に入会したことにより、『佐原市における地域振興と伊能忠敬』と題する卒論で大学生活を締めくくることができた。卒業後は学芸員として全国の市町村史を調査し、どれだけの伊能関係史資料が存在しているかの調査に集中した。

二十代半ばとなり、就職して新たな社会へ一歩踏み出した時期に我が人生を変える大きなプロジェクトと遭遇した。一九九九年から二年間にわたって展開された「伊能ウオーク」への参加である。渡辺一郎名誉代表からお声を掛けていただいた時は正直申して、入社したての会社を辞めなければならないことで自分との葛藤や父親との衝突もあった。それにも関わらずあのプロジェクトに参加できたのは、恐れ多くも天「伊能忠敬がお下しになった」「お告げ」があったのではないかと痛感している。あの「夢運んだ新ちゃんトラック」と共に各地で行った「小中学生を対象とした伊能教室」は伊能測量・地図製作の偉業を全国津々浦々で啓発することとなった。研究会の目的である忠敬先生の顕彰ができたのではと、僭越ではあるがひそかに自負している。

三十代半ばとなり働き盛りとなった今の自分は、伊能家のため村のため、心血注いで勤労に励んだ忠敬先生の佐原時代とかさなる。忠敬先生の旧居跡のある深川黒江町近くに住み、はや六年目を迎えた。今後も、働き者だった忠敬さんを意識しながら暮らしていきたい。

（しんざわ よしひろ 元伊能ウオーク本部隊員）

「第二次伊能ウオーク」検討進行中

渡辺 一郎

一九九九年一月から二〇〇一年一月一日にかけて、全都道府県を踏破した、日本ウオーキング協会、伊能忠敬研究会と朝日新聞社共催の「伊能ウオーク」は、我らのスーパーマン伊能忠敬の名前を、全国に再認識させた超大型イベントでした。

「二〇年後にまたやろう」といつて散会しましたが、早いもので、もう八年になります。よって二年くらい前から、次期伊能ウオークの研究を準備委員の間で始めていました。

同じ事をやるのは芸がないので、さらに発展させることができないかと案をねり、朝日と共同通信十全地方紙の連携という案まで出しましたが、決定には至りませんでした。そこで、共同通信十全地方紙と提携することになり、具体化を進めています。

名称は「伊能忠敬のみちウオーク」とか、もっと大きく「全国を歩こう」という意味の名前がいいとか、論議されていますが、まだ決まっています。

計画がまとまれば、日本ウオーキング協会（JWA）、伊能忠敬研究会、全国地方新聞連合会、共同通信社、NHK（予定）などを中心に、全国的な組織委員会を結成し、各都道府県にはJWAの県協会と地方紙、後援団体、官庁の出先機関を中心に、実行委員会を設置して催行することになるでしょう。

目下はコースの検討などを進めており、今後変更はあるでしょうが、基本は次のような考え方です。

まず、各県で、「ウオーク」に二・三週間先行して、伊能大図総覧のデータをもとに制作した「完全復元伊能大・中・小図フロア展」を開催して、盛り上げたいと思っています。

そして、ウオークは八ステージに分け、夫々季節を選び、一県一週間以上を三年かけて歩きます。遠い場所バスを利用します。ステージ順は今後の課題ですが、こんな組み合わせが基本になります。

ステージ1 二〇〇九年九月 佐原に集合、香取神宮から開始―東京

（富岡八幡）―埼玉―山梨―長野―群馬

ステージ2 北海道 伊能測量最北端ニシベツに集合―（バス）―

釧路―（バス）―襟裳岬―（バス）―札幌―道南―函館―松前

ステージ3 米沢集合―山形―秋田―青森―岩手―宮城―福島―

栃木―茨城―千葉―東京（富岡八幡）

ステージ4 佐渡（渡津神社）に集合―新潟―富山―石川―福井―

滋賀―三重―和歌山―大阪

ステージ5 奈良に集合―京都―兵庫―徳島（四国八十八箇所巡り

開始）―高知―愛媛―香川―高野山―奈良

ステージ6 沖縄集合―鹿児島―宮崎―大分―熊本―長崎―佐賀

―福岡

ステージ7 下関集合―山口―島根―広島―岡山―鳥取

ステージ8 関が原集合―岐阜―愛知―静岡―神奈川―東京（二〇

一二年二月 日比谷公園）―富岡八幡―香取市

空前の大プロジェクトです。こういう作戦が堂々と進行するならば、NHK大河ドラマ「伊能忠敬」の実現も期待できるのでは、と考えています。（二月二二日記）（わたなべ いちろう・名誉代表）

大陸との接点

唐津街道を行く

⑧



佐賀県唐津市のホテルに宿泊中の深夜、カメラマンの半田裕久記者に東京から電話が入った。大正生まれの母親の訃報だった。唐津城から、朝鮮出兵の拠点となった名護屋城跡まで、最後の行程十六キロを目前にしていた。急ぎよ、帰京し、代わりに嵐田啓明記者が駆けつけた。シニア世代の宿命とはいえ、老親を抱えた身には、いつ何時、何があるかわからない。ふと、施設にいる母のことを思った。

名護屋城跡は東松浦半島の北西端にある。朝鮮出兵を企図した豊臣秀吉は一九九一年秋に築城を開始。半年もかけずに完成させる突貫工事で、桃山時代の

名護屋城への「太閤道」

編集委員 須貝 道雄(58)

家を訪ね、太閤道の所在を一つ一つ確かめた。道幅一尺ほどの狭い区間や、武将も悲鳴をあげたという急坂もある。雑草で埋め尽くされ、倒木で道がふさがれた箇所も数多い。

友好と平和への道筋

日曜の午前十時、馬場さんとJR唐津駅前待ち合わせ、名護屋城跡までの道案内をお願いした。歴史街道を歩く会代表の河島悦子さんも参加。にぎやかな太閤道行脚になった。

馬場さんは説明する。「古老に聞いた伝承は面白いものばかりです。例えば「この田んぼは大岡様を通った道跡。だから踏み固められて作物が良く育たない」と、嫁にきたばかりのころ、よく聞かされた。これは高齡女性の回顧談だ。

技術の粋を集めた城郭を出現させた。諸大名の軍勢は城の周囲百数十カ所に分かれて陣屋を設けた。朝鮮半島への遠征軍は約十五万人、留守部隊は約十万人規模。商人らも合わせると二十万―三十万人の町がいきなり、静かな農漁村に生まれ変わった。唐津市中心部から名護屋城跡まで、朝鮮出兵の大军が進んだ道が今もその跡を残している。地元で「太閤道」と呼ばれ、沿道には数々の言い伝えがある。



名護屋城跡に到着、玄界灘を背に太閤道を語る河島さん(左)と馬場さん(中) (佐賀県唐津市)＝写真 嵐田啓明

道の途中で、ある農家に馬場さんは近づいた「見て下さい。この母屋と小屋が離れて建っている。両者の間に太閤道が走っているんです。以前に『道をふさがらないよう作った』とお年寄りは説明しました」

かと思えば、血のついた刀を洗ったため、水を飲んだらいけないと、不飲池という名前がついた池があるといった生臭い話も。四百十数年前の出来事が東松浦半島の人々の心の中に今も刻まれている。

午後四時、名護屋城跡に到着。雑草をかき分け倒木をまたいできた。この地が眼前に広がる玄界灘の美しい景色だった。

この地に佐賀県立名護屋城博物館がある。「侵略の拠点」になった不幸な歴史から学び、日本と朝鮮半島との「交流・友好の拠点」となることをめざし、一九九三年に開館。現在は韓国の国立晋州博物館と学術交流を重ねている。

大陸との接点・唐津街道には思えば、海を隔てた戦に絡む史跡が多かった。これらを真摯にとらえ、友好と平和にどう結びつけるか。冷静で、謙虚さ、そして何より懐の深さのようものが問われると感じた。

(おわり)

唐津の名護屋城跡で玄界灘を背に太閤道を語る本会会員・河島悦子さん(左)と馬場良平さん(中)

(平成19年12月27日 日本経済新聞 夕刊)

「忠敬先生の二男周蔵(秀蔵)さんが作った美しい問題」

◎伊能忠敬の二男、周蔵さんが作った問題がありました。

山口和さんは、文政四・五年(1821・1822年)12月9日～1月24日の2ヶ月間、敦賀に滞在しました。そこでも、和算家を指導したり算額などの問題を書き写したりしています。

その滞在中に、周蔵さんの問題も話題にのぼり、書き留めたものと思われます。

(宿泊先は、敦賀公文名村の中西源右衛門方に1ヶ月、敦賀三日市町のかがや吉兵衛方に1ヶ月、長期滞在しています。)

伊能忠敬・周蔵親子は敦賀に二度来ています。それは、山口和さんが訪れる20年前の

第四・五次測量(1803年・1805年)の折りで、その時の問題です。「道中日記」の中では、

伊能忠敬という名でなく、伊能勘解由(かげゆ)・・・と書かれていて見落としがちです。

昔の人には、幾つもの名がありますから。

新潟日報のホームページ『山口和さんの道中日記』というコーナーで紹介されています。山口和は越後水原(阿賀野市)出身の江戸時代の和算家で算額の研究家です。秀蔵さんの問題は次号以下で解説します。

伊能勘解由(かげゆ)の二男周蔵(しゅうざう)さんが作った問題がありました。

今有知方(しるはた)受内(うけうち)外(そと)内(うち)但(たゞ)外(そと)内(うち)只(ただ)子(こ)若(わか)子(こ)問(と)

幾何(きこ) 含(こ)日(にち)式(しき)撰(せん)々(々々)

術(じゆつ)曰(いふ)列(れつ)る(る)八(はち)千(せん)得(とく)矢(や)合(あ)同(どう)

山口和さん「道中日記」より

伊能忠敬の二男、周蔵さんが作った問題を見つけました!!

題への進歩を画(えが)きましよう。

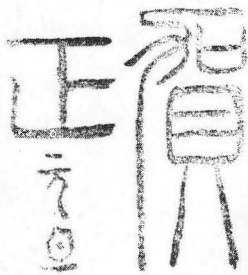
直角三角形
 鈎(こう)：股(こ) = 1 : 2
 子(こ) = 10
 矢(や) = ?

ヒント図あれこれ・・・

新潟日報 HP→暮らし・話題→ニュース一覧→【開設】江戸の数学知って”和算”を楽しむ HP 開設
 または <http://www.itsquare.co.jp/koukisin/wasan/> で検索してください。

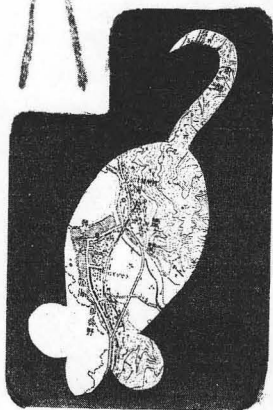
2008(平成20)年
子(鼠)に因んだ地名

十二支地名の中では羊よりは多いが
虎・兎とともに少ない部類に属する。
地方別に見ると東北が最も多い。
山の名では千五百米級が二つある。熊島と
いう島が九州と山口県で五つ、近い距離に並ぶ。
子（ね）の地名では多く甲子（きのえね）と
なり、読み方では、こうね・かっし・かっち・
かしと、四通りが見られる。



齋藤 仁
(さいと)

ひとし・学習院名誉教授)



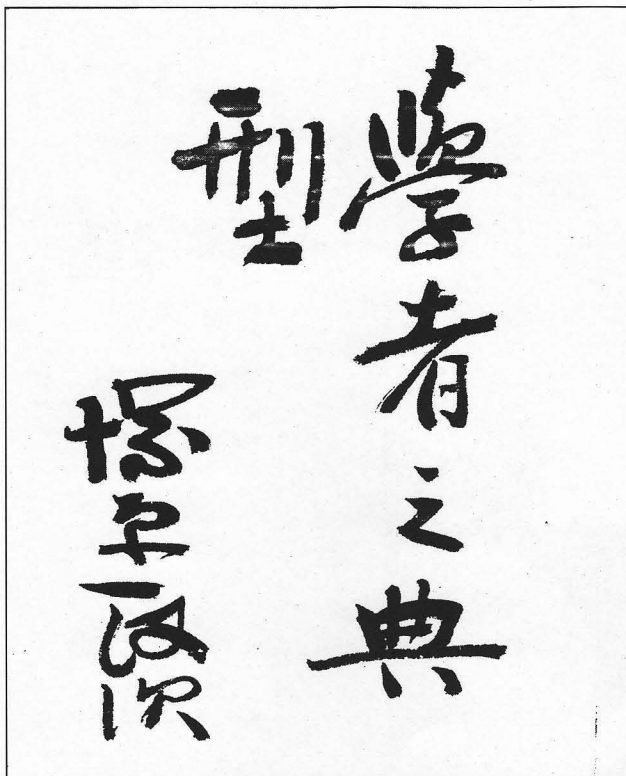
鼠ヶ関(山形県)



芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

伊能陽子



塚原 政次

つかはら せいじ? (?)

広島文理科大学第三代学長（一九三四～一九四五）
専門は児童心理学。

百世之師 佐藤皐藏

佐藤 皐藏

さとう こうぞう (一八七一―一九四八)

大正期の海軍軍人。海軍中将。

岩手県花巻市出身。

呉鎮守府参謀(明治三九) 呉工廠艤装員(明治四三)などの経歴から、我が家の祖父との関わりを考えたが、祖父は大正四年に呉鎮守府長官、大正十一年には退役しているので、直接の関連はわからない。この揮毫は大正十三年頃と思われる。

このお二人が連れ立ってのお出でかどうか不明だが、同じ頁のご署名である。

(フリー百科事典 ウィキペディア)

(いのう ようこ 伊能忠敬研究会顧問)

『伊能忠敬旧宅跡発掘調査概報』（要約）

編集 香取市教育委員会

◇忠敬旧宅の発掘調査及び図面調査で邸内の隠居遺構や忠誨の天文台跡が確認されました。調査概報を要約して紹介します。（編集部）◇

I. 経過と概要

本書は、香取市による「街なみ環境整備事業」小公園整備に伴う伊能忠敬旧宅跡の事前発掘調査の概報である。小公園整備計画の事業予定地は、旧宅敷地内の国指定史跡伊能忠敬旧宅店舗及び母屋と土蔵以外のほぼ全面に及ぶものであった。史跡範囲外の部分については遺跡として周知されてはなかったが、この事業は明らかに国指定史跡に隣接する地域の開発行為に当たするため、国県の指導を受けて確認調査を実施することとなった。調査は建設部から依頼を受けて、教育委員会生涯学習課文化財班が担当した。調査は、平成十八年十月十七日から平成十九年二月二日まで行い、一七〇㎡を調査した。調査の結果、伊能家図面（江戸時代年代不詳）や伊能家実測図（文政七年実測）に記されている建物跡や国指定となった昭和五年当時に建っていた建物跡を確認した。

II. 遺跡の概要

一、国史跡指定（昭和五年） 当時の旧宅敷地内の様子は、伊能忠敬翁旧宅跡地実測平面図（図版8）に詳細に記されている。用水堀の北側には店舗とそれに繋がる母屋、母屋の東側に居宅と倉庫二棟が記されている。用水堀の南側には土蔵と倉庫二棟が記されている。指定を受けたのは入口の店舗とそれに繋がる母屋、そして土蔵だけであった。

当時、聴き取り調査等で、他の建物は明らかに後世のものと判断できたのだろうか。その後、倉庫や居宅は解体され、現在敷地内には、指定の建物のほか旧伊能忠敬記念館と便所が建っている。

二、遺構の概要

調査の結果、建物跡3、柱跡14、瓦敷き3、溝状遺構1、井戸跡1、用水堀堀形1、土管埋設遺構1、土杭86を確認した。

土蔵南側からⅡ区（土蔵の西側）にかけて検出した東西棟の建物跡。身舎の桁行総長一〇・八m、梁間総長三・六m。

この建物は伊能家図面で史跡土蔵南側に記されている隠居跡と見て間違いないであろう。



調査区（Ⅰ～Ⅲ区）全景（西から） 土蔵の右側が隠居跡

III. 史料から見た伊能忠敬旧宅跡

1. 伊能家と忠敬

伊能家は当家に残る系譜によると、戦国期の景久が中興の祖として初代に数えられる。その頃の伊能家は国分氏の家臣として現成田市伊能の地に居を構えていたが、景久の代に帰農して佐原に移り住み、天正の初め頃に嫡子景常に家督を譲ったとされる。三代目から通称三郎右衛門を称するようになり、隠居名は勘解由を名乗った。二代景常以降、新宿の市立てや新田開墾に寄与し、また代々名主役を務めるなど村政の中心的役割を果たしていた。五代景知の時、寛文年間（一六六一〜一七二二）に酒屋名代を買いうけて酒造業を家業とした。享保九年（一七二四）には、伊能家は酒造高七〇石のうち三〇石を、佐原本宿の永沢仁右衛門に譲り、享保十一年には、伊能家、永沢家を中心に酒造仲間が結成される。元文三年（一七三八）から寛政五年（一七九三）にかけては、伊能家の酒造高は一、〇〇〇石を超える高であり、最盛期を迎えた。天保一〇年（一八三九）には伊能家は株仲間から名前を消してしまっている。ちなみに十四代景徳の祖父の時に酒造業を廃し、油商になったとも伝えられる。忠敬は景久から数えて十代目となる。

2. 史跡指定

伊能忠敬旧宅は、昭和五年（一九三〇）国史跡指定を受けた。その指定の説明はつぎのとおりである。

「舊宅ハ、母屋ト店舗トヨリナリ平屋造瓦葺ニシテ母屋ハ玄関・内玄関・書斎・納戸等五室建坪二十四坪、店舗ハ店及居間等ニシテ建坪三十二坪アリ、此ノ店舗ハ忠敬以前ノ建築ナリ、母屋ハ寛政五年忠敬ノ設計ニ係リ、其ノ測地學研究ニ使用セシトコロナリ、保存宜シキヲ得、能ク舊規ヲ保テリ、土蔵ハ舊宅ノ南方約六間ノ地点ニアリ、忠敬存生ノ頃ヨリ存スルモノニシテ今其ノ遺著竝ニ遺品を収蔵ス。」

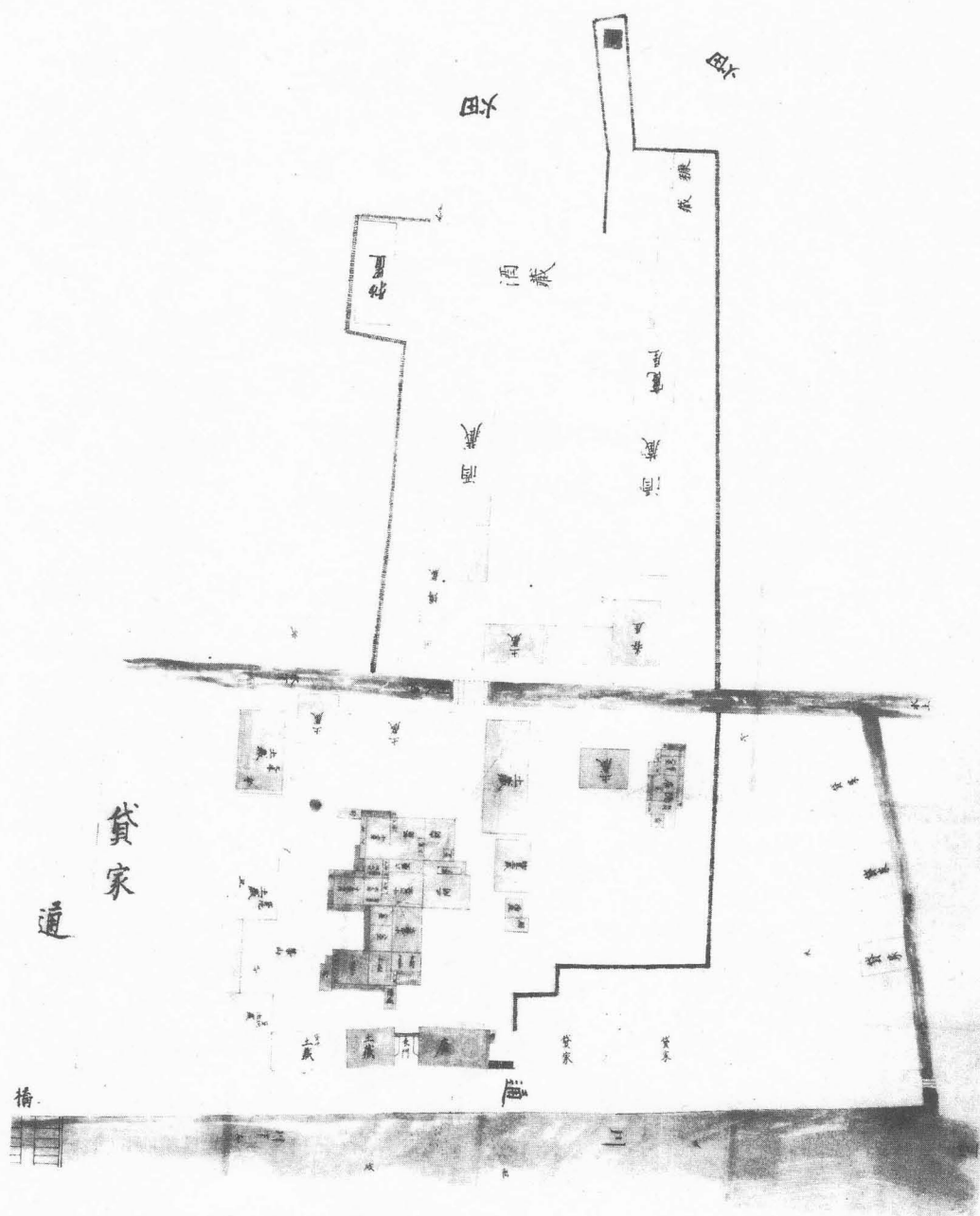
なお、店舗については、解体時に確認された痕跡から初めは土蔵として建てられたことが判明した。正門も同時期と推定されている。

3. 近世期の屋敷図

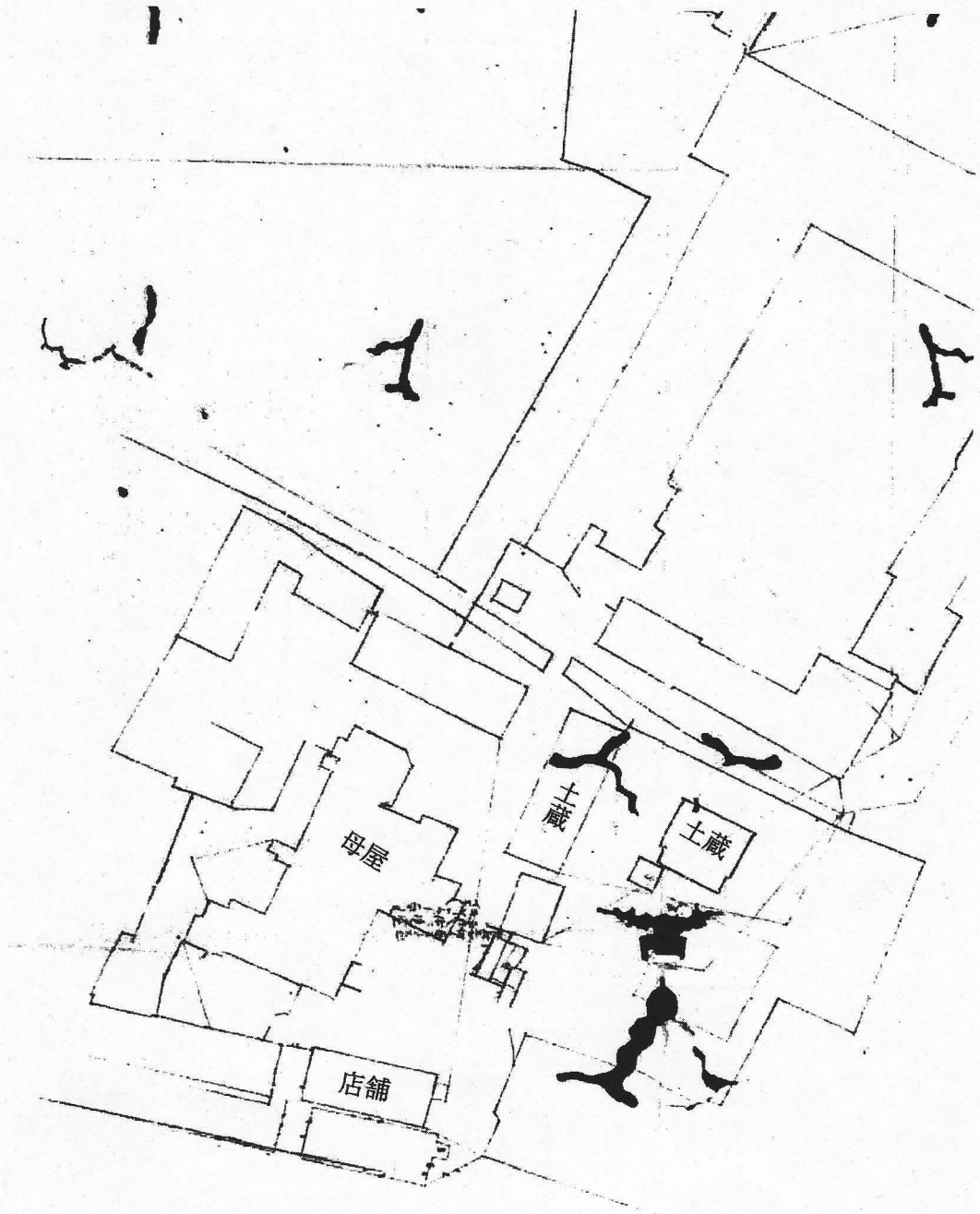
（一）二枚の屋敷図面 伊能忠敬記念館には伊能家の敷地、建物配置を窺い知ることのできる図が二点残されている。一点は「伊能家図面」、もう一点は「伊能家実測図」である。いずれも当家の屋敷地内を描いたものであるが、前者は家相図に近い絵図であり、後者は測量によつてもとめられた実測図であるため、両者の図としての性格や表現方法は若干異なっている。

●「伊能家図面」（図版10）は約一二八×一三七cmの大きさの和紙に彩色で作成された絵図である。作成年代は不明である。先の保存修理工事の報告書では、書院が建てられたとされる寛政五年以前で忠敬が家業を営んでいた頃、との理由で一七八〇年代（天明年間）と推定されている。現在よりもはるかに広範囲な敷地を有していたことが判る。「貸地土蔵」「貸家」といった建物が数棟描かれているが、おそらくこれも伊能家で所有するものであり、当家の最盛期の建物配置であることが判る。表門から入って正面に当たる建物が、当時の母屋である。

●「伊能家実測図」（図版9）は昨年度伊能家から佐原市（現香取市）に寄贈された史料の一つで、三十八・八×四七・二cmと絵図としては比較的小さなものである。敷地囲い及び建物配置の他、複数地点から目標物に伸びる朱線が描かれており、測量による作図であることがわかる。この実測図は、伊能忠敬の孫の忠誨によつて文政七年（一八二四）に作成されたと推定される。その根拠の一つに、忠誨が記した「忠誨日記」がある。「忠誨日記」文政七年二月一日から八日の項に、次のように居屋敷の測量を行った記述がある。「朔日 晴天、七左衛門来る、庭測量／二日 晴天、七左衛門来る、庭測量／三日 晴天、裏畑測量／



伊能家図面（年代不詳）



伊能家実測図 施設の名称は原図になし

編集部注：建物部分のみ掲載した

六日 晴天、居屋敷、庭地図なる／八日 晴天（中略）予、七左衛門へ行き、居屋敷測量」おそらく、この際の測量で作成されたものが実測図であると考えられる。

そしてもう一つの根拠となる史料として「居屋敷実測野帳」がある。

これは表紙に文政七年二月朔日とあり、忠誨日記の記述と符合するものである。今回の調査では、この野帳と実測図の描き方を照合したところ、完全に一致することが判明した。野帳の記載にはいくつかの地点で同じ目標物の名称と方位が記されている。交合法に則ったものであると思われるが、この目標物の一つに「天文台心」あるいは「台心」といった表記が野帳の中に数箇所確認

できる。実測図上では、現在史跡指定となつてゐる土蔵の、やや斜め前、薄い線で正方形に描かれてゐる建物になる。これが天文台と称する建物で、その中心部の「台心」に朱線が交わつてゐることが確認できる。「忠誨日記」で文政七年十一月に十八日と翌八年十一月七日の項にも「天文台」という記述が見えることから、忠誨が佐原の地で天体観測を行うために建てられたものであると考えられる。ただし、建物そのものは実測されておらず、図面上は他の建物と違い朱筆で描かれてゐることから、簡易な建物、あるいは今後建築予定の建物、として

朱で記したのだろうか。ただし、方位をとるための目標物となるものがその位置に存在していたことは間違いない。



文政7年2月朔日「居屋敷実測野帳」

さて、両者を比較してみると、建物の形状に多少の差異はあるものの、描かれてゐる建物の主要な部分については、多くが一致するものであることがわかる。双方に共通する建物を列記すると、敷地正面にあたる「店（史跡）」「表門」「土蔵」、表門を入つて正面の「母屋」、母屋北側の「文庫土蔵」「土蔵」、同南側の「廁・湯殿」「物置土蔵」「土蔵」、さらに南側の「土蔵（史跡）」となり、ここまですぐ用水堀西側となる。東側は「橋」を渡り「土蔵」「春屋」「酒蔵」「竈屋」「樽蔵」「酒蔵」「酒蔵」となる。次に、図面にのみ描かれてゐる建物は、用水堀西側の「隠居」、同東側の竈屋に隣接する土蔵様の建物、「物置」「糠蔵」の四棟である。一方、実測図のみに描かれてゐる建物は、天文台を除いては、用水堀の東側傍に位置する正方形に近い小さな建物（野帳では「馬屋」と史跡土蔵の斜め前の小さな正方形の建物（井戸と推定）の二棟のみである。敷地内の建物は、伊能家図面作成から文政七年実測図作成の間に、四棟が取り壊されたものと考えられる。なお、隠居については、「伊能忠敬書簡」によると、妙薫御坊の隠宅あるいは隠居が文化九年に建てられていることが分る。他にも、忠敬の別な書簡の中に「隠宅」「隠居」といった表記がいくつか確認されていることから、少なくともこの頃に伊能家内に隠居家が建てられていたようである。図面にある「隠居」が妙薫隠居かどうかは不明であるが、一つの可能性として文化九年以後の図面であることも考えられる。ただし、伊能家は寛文期から天保期までの長い期間酒造業を営んでいたとされ、特に元文期から寛政期にかけて、最盛期を迎えていたことから、忠敬代に限らず、むしろそれ以前の代の可能性もありうる。

（2）二つの問題

伊能家図面及び伊能家実測図と、昭和五年以後の旧宅の敷地を比較

してみると、二つの大きな問題が浮上してくる。一点は、敷地内を東西に流れる用水堀であり、もう一点は史跡指定となっている母屋の存在である。

①用水堀について 敷地内には東西に用水堀が流れ、またその先には樋橋が架けられ、対岸までその流れが続いている。この用水は近世前期に設けられた佐原用水の一部であり、敷地内の用水堀と樋橋は当時から現在の場所にあったものと認識されてきた。しかしながら、伊能家実測図では南北に流れる用水は描かれているものの、敷地内を東西に走る用水堀はどこにも見当たらない。さらには伊能家図面では、東西に流れる用水は敷地外の南側に描かれている。両図面をそのまま素直に受け止めれば、用水堀のルートが今と異なるものであり、後世に付け替えられたと考える方が自然であろう。

②母屋について 史跡指定の母屋については、前掲指定時の説明では「母屋ハ寛政五年忠敬ノ設計ニ係リ、其ノ測地學研究ニ使用セントコロナリ、保存宜シキヲ得、能ク舊規ヲ保テリ」となっている。しかしながら、両図面では、史跡指定の母屋に相当する建物は確認できない。別な場所に当時の伊能家にふさわしい規模の母屋が両図面に描かれている。これも素直に史料を読み取れば、この指定説明の母屋は当時存在しないことになる。また、現状では寛政五年（一七九三）忠敬設計の建物であることを裏付ける史料の存在は確認できていない。母屋は忠敬書斎あるいは書院などとも称されるが、これに関連する記事が「伊能忠敬書簡」に次のように残されている。

《文化十四年（一八一七）八月十一日妙薫宛書簡》意訳「以前から隠居を立てた後は、それを書院としたいとの話でしたが、それは昔のこととて、今はそのようには中々出来ない。年齢も七十三歳になり寿命もあと三、四年と考えている。本家（佐原の伊能家）も書院を建てると

ころではない」といった内容になる。つまり忠敬の希望であった隠居書院の建築は、本家の状況や年齢から最早諦めつつあったのではないだろうか。さらに忠誨の死去後十年ほどして、伊能家屋敷が取壊されたことを示唆する日記が、親類家に残されていたことが確認された。

その内容は次の通りである。「本家三郎右衛門家破壊致され事 天保八年丁酉三月廿日、（中略）三郎右衛門殿居宅沽払に付、大半取ほごし候様承候、如何成故にや尋に付七郎右衛門我等大に驚ぬれ共、夫は誠に世間背語漸にてや有べしと、四方や左程の事告知らせぬ事は有間敷と落着、外の漸に移り夕方に及兩人も宿元に帰りぬ、跡にて心掛りに付、孫直吉を見届に遣しぬれば、是も大に驚かえり、大変大変破壊の段家跡原の如く相成候と云（中略）翌廿一日我等見分に参り、斯破し崩したるを心中涙を催し立居たる處に、折能（オリヨク）藤六隠居より出来に遊て曰、さてさて情なき次第なり、本家既に断絶に及り、此上ハお国対談致し、子細を聞べし（後略）概要「当主七郎右衛門と隠居忠闇が所用で土浦に宿泊した折、親戚の藤六から三郎右衛門家の居宅が売却され、大半が取り壊されているとの噂を聞き、孫直吉を三郎右衛門家へ遣わして確認させたところ、家跡が原っぱのようになっているとの報告を受けた。翌日見分に行ったところ、破れ崩れた状態になっていた」というものである。具体的にどの建物がどの程度破壊されたのかは分らないが、「大半取ほごし」や「家跡原の如く」とあることから、家（母屋力）跡が原のように見えるほどの大きな取り壊しであったと推察される。日記にはその後の顛末なども詳しいが、この天保八年（一八三七）三月二〇日の時点で、伊能三郎右衛門家の大半が取り壊されたという事実があったことは重大なことといえる。これは伊能忠敬が亡くなってから、わずか二〇年後の出来事であった。

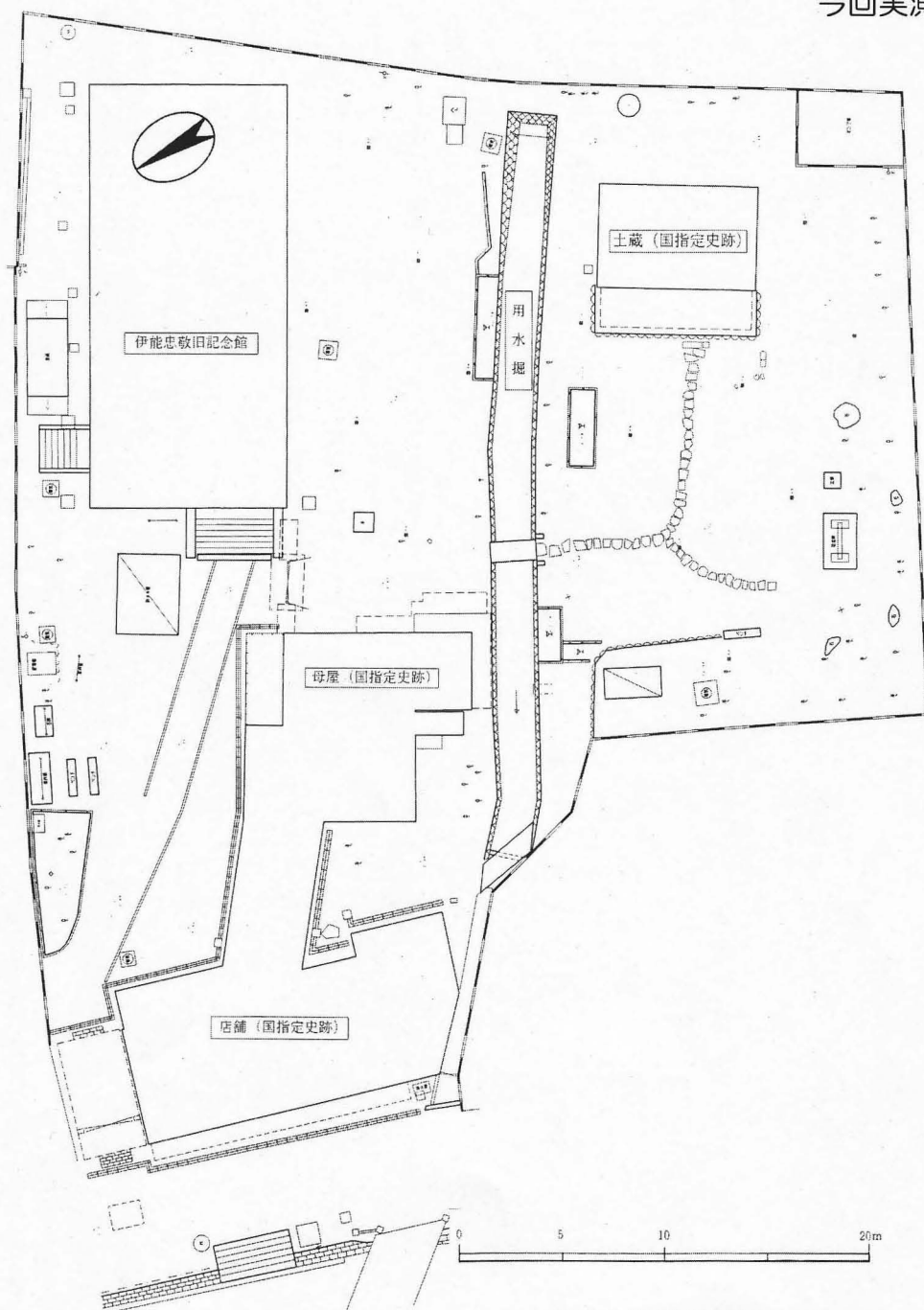
（発行 香取市建設部都市計画課 平成十九年三月三〇日）



伊能忠敬翁旧宅実測平面図（昭和4年実測）
施設の名称は原図になし

斜線部 国指定史跡範囲

今回実測図



伊能忠敬旧宅跡測量図 (平成18年10月実測)

伊能忠敬旧宅跡測量図 (平成18年10月実測)

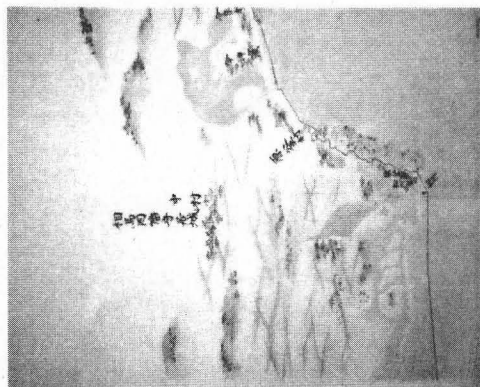
伊能大図総覧の地名と景觀(五)

星 埜 由 尚

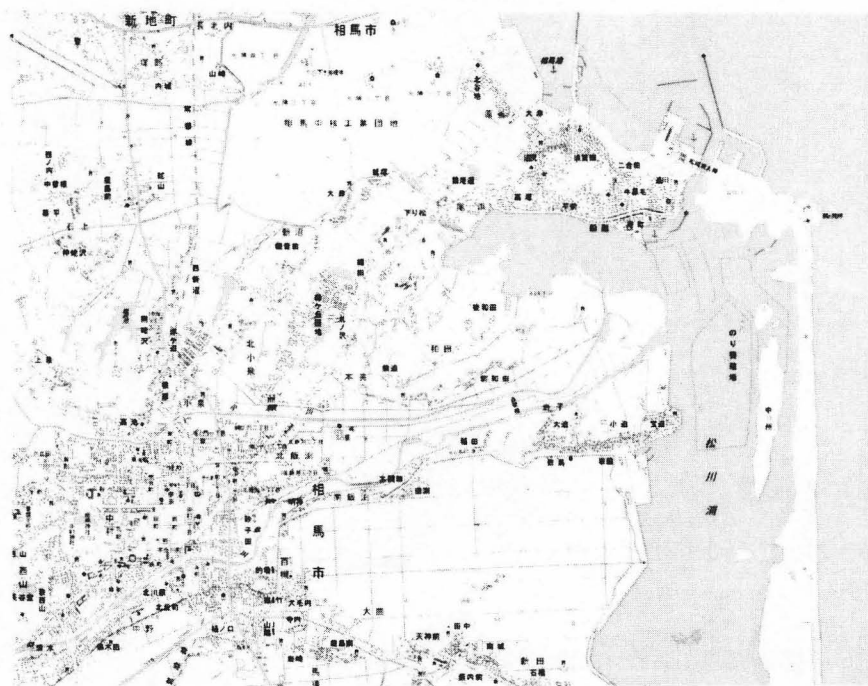
松川浦

福島県浜通りの松川浦である。第一図を見ると松川浦は、砂嘴で閉ざされた大きな潟湖である。測線は、砂嘴の海岸線を忠実に測っていることが分かる。松川浦の開口部を渡り、海岸線を離れ丘陵の内陸側を測線は通過する。再び海岸線を測量しているが、現在はすべて埋め立てられている大きな潟湖の開口部を渡り、松川浦と同じように砂嘴の海岸線を測量している。松川浦には島が多数描かれており、松川浦の湖岸線を測量していないので、地形の精度は劣るが、かつては多数の砂州が島となっていたのであろう。現在の地形図と比較すると、現在も砂州の島は見られるが、恐らく伊能測量当時はより多くの砂州が見られたのであろう。また、松川浦の開口部の位置も現在とは異なっている。伊能測量当時は、

開口部は砂嘴の先端とその先の丘陵の間にあったが、その後明治四一〜四三年に丘陵を掘削して水路が作られ、かつての開口部は閉じられた。新しい開口部の先には、港が作られている。もう一つの潟湖は完全に埋め立てられ、現在は工業団地



第1図 大図53号 松川浦



第2図 2万5千分の1「相馬中村」

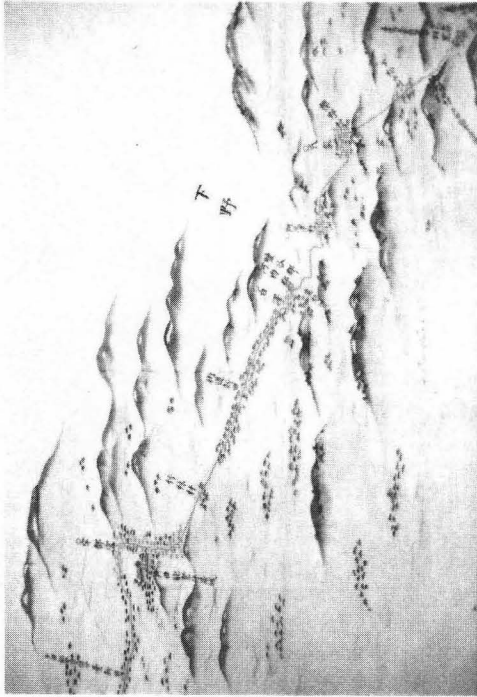
となっている。かつては、この辺りは、海岸と潟湖のある風光明媚な所であったとその姿を思い描くことができるのである。伊能測量隊は、中村の城下には立ち寄っていないが、城郭と相馬因幡守居城の注記が記されている。

宇都宮から喜連川

*ただなか

宇都宮は城主がめまぐるしく変わった藩であったが、伊能測量当時は、戸田能登守居城と記されているように、戸田能登守忠翰*である。伊能測量隊は奥州街道を測量してきたわけだが、奥州街道は、宇都宮城下にはいると日光街道と分かれ東西方向に屈曲する。幕府が道中奉行に命じて作成させた五街道其外分間延絵図並見取絵図によると伊能大図の表現の通りの城下の奥州街道が表現されている。宇都宮は、城下町であると同時に奥州街道の宿駅としての機能を備えていた。

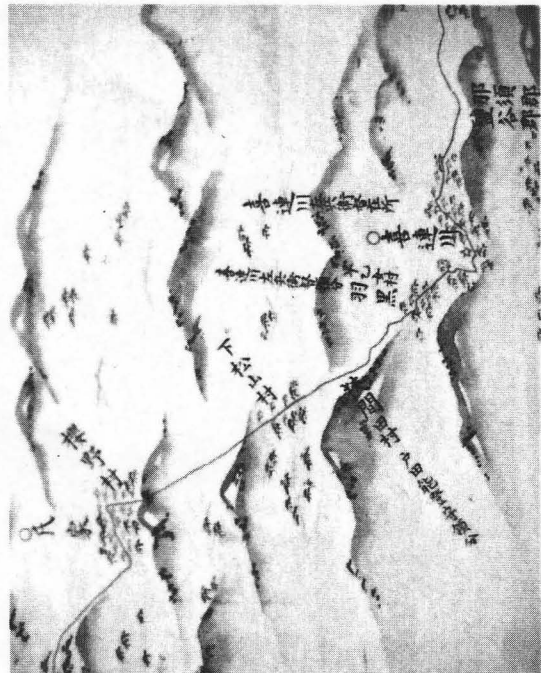
宇都宮の城下を出ると奥州街道は再び北に向かう。竹林村、街道新田、白澤、阿久津村と通過し氏家に達する。大図には街道新田からまっすぐな街道に沿って松並木が描かれており、白澤の宿まで連続している。二万五千分一地形図を見ると海道新田となっており、白沢に至る間には住宅団地もできていて当時の面影は余り感じられない。白澤から阿久津村を通り、氏家の宿に達し、喜連川へと測線が延びている。



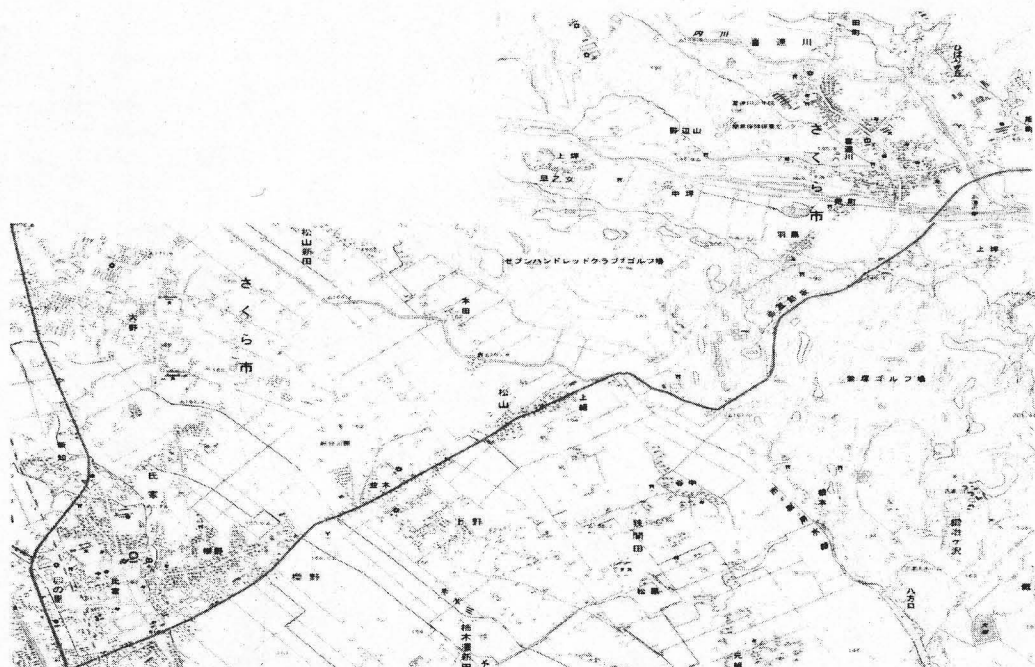
第3図 大図69号 宇都宮～氏家



第4図 2万5千分の1地形図「宝積寺」



第5図 大図69号 氏家～喜連川

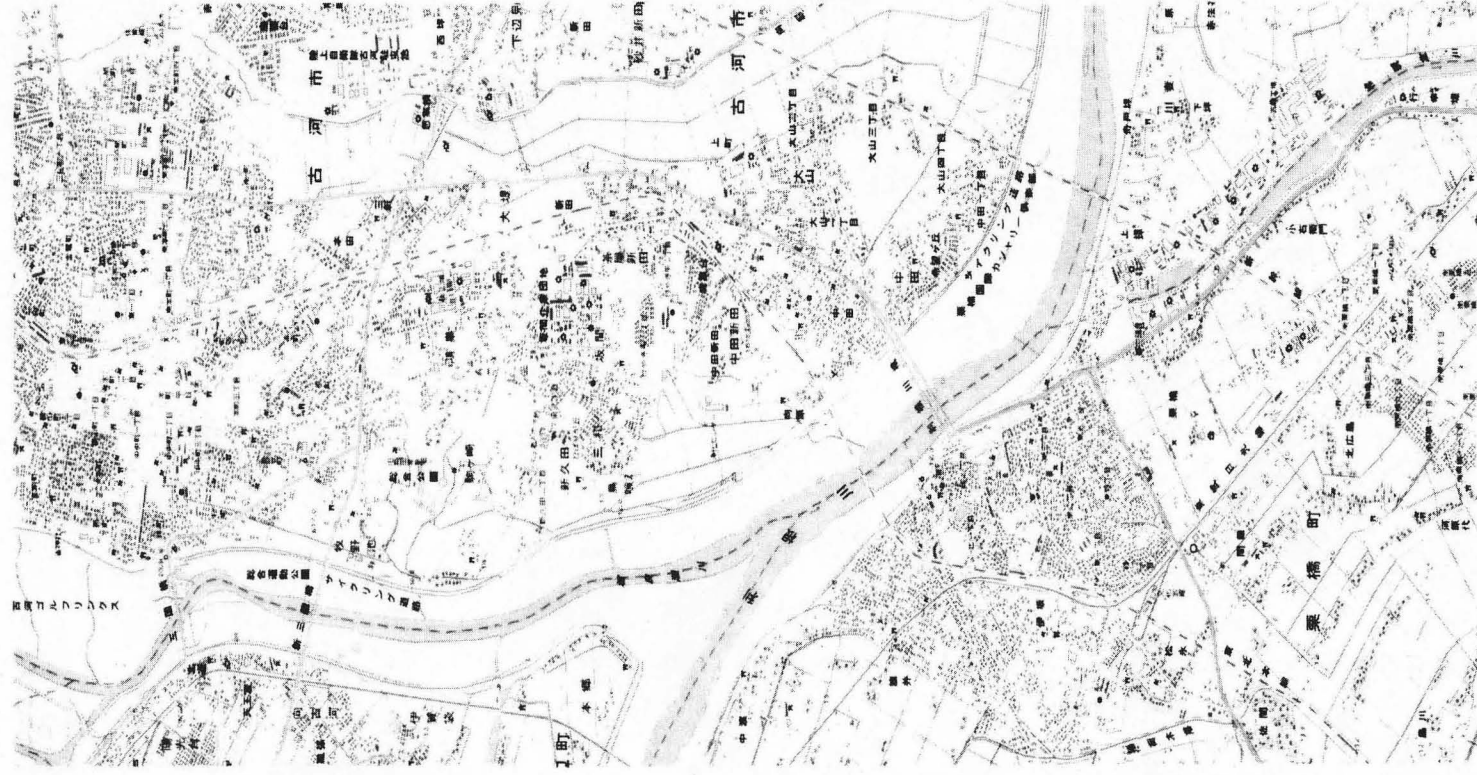


第6図 2万5千分の1地形図「氏家」、「喜連川」

氏家から喜連川まで測線は直線的であるが、狭間田村、早乙女村羽黒、喜連川と多少の屈曲が見られ、二万五千分一地形図を見るとこの部分では丘陵をまたぎ、現在の国道の西北に位置する松山と羽黒を結ぶ道路が伊能測量当時の旧道に相当するものと思われる。大図にはこの間に山景が描かれているが、氏家の周辺は衣川の平らな氾濫原であり装飾的な表現である。狭間田村には家形は全く描かれていないが、現代の地形図を見ると狭間田は氾濫原の中の地名となっており、この測線沿いに狭間田村の集落があったのではなく狭間田村の領域であったと言うことであろう。氏家、下松山村、早乙女村羽黒には家形が描かれており、この測線に沿って集落があったことが分かる。喜連川には喜連川佐兵衛督在所との注記があり、足利家の末裔である喜連川家の在所である。喜連川家は、五千石だが一〇万石の格式を持っており、大名の待遇を受けていた。

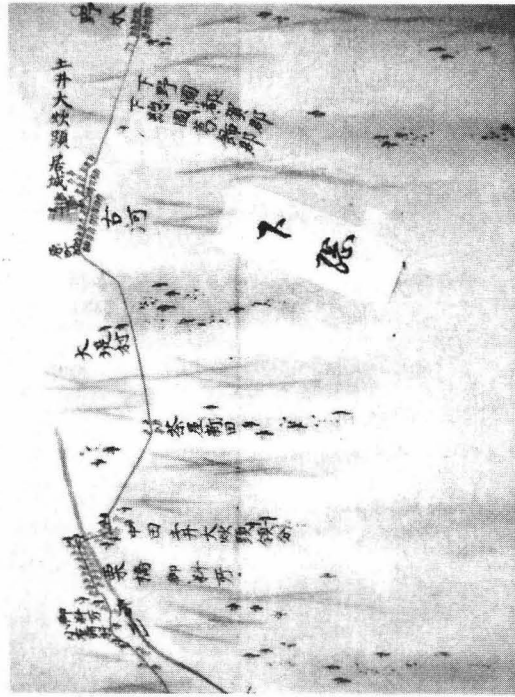
古河・川越・忍

江戸を囲む譜代大名の城下町である。古河には土井大炊頭居城、川越には松平大和守居城、忍には、阿部鉄丸居城と書いてある。土井家は、代々大炊頭が多く、土井大炊頭とは、土井利厚である。土井利厚は、名君であったそうで、伊能測量の頃に老中に任ぜられている(享和二年)土井利厚を継いだのが土井利位で雪の殿様として有名である。大図に記載されている野木、原町、大堤村、茶屋新田、中田、栗橋、小右衛門村は、現代の国土地理院の地形図を見てもそれらの地名が明記されており、測線を地形図に跡づけることができる。緑色に塗り松林が点在し、その間を茶色の田畑が埋めているが、平地林と田畑が混在する景観であったのであろう。古河城は、城下の中程に描かれているが、地形図の上では、大手町の地名の辺りがかつての古河城であった。中田から栗橋で房川という川を渡っているが



第8図 2万5千分の1地形図「古河」、「栗橋」

房川は現在の利根川の位置に当たると、地形図を見ると旧河道化した権現堂川という川が利根川から派生しており、房川はこの川であると思われる、第七図の枠外になるが、房川は、下總国葛飾郡と武蔵国葛飾郡の境界とされており、地形図を見ると現在も茨城県と埼玉県との境界となっている。測線が房川を渡る位置は、現在の利根川橋にほぼ一致する。



第7図 大図87号 古河

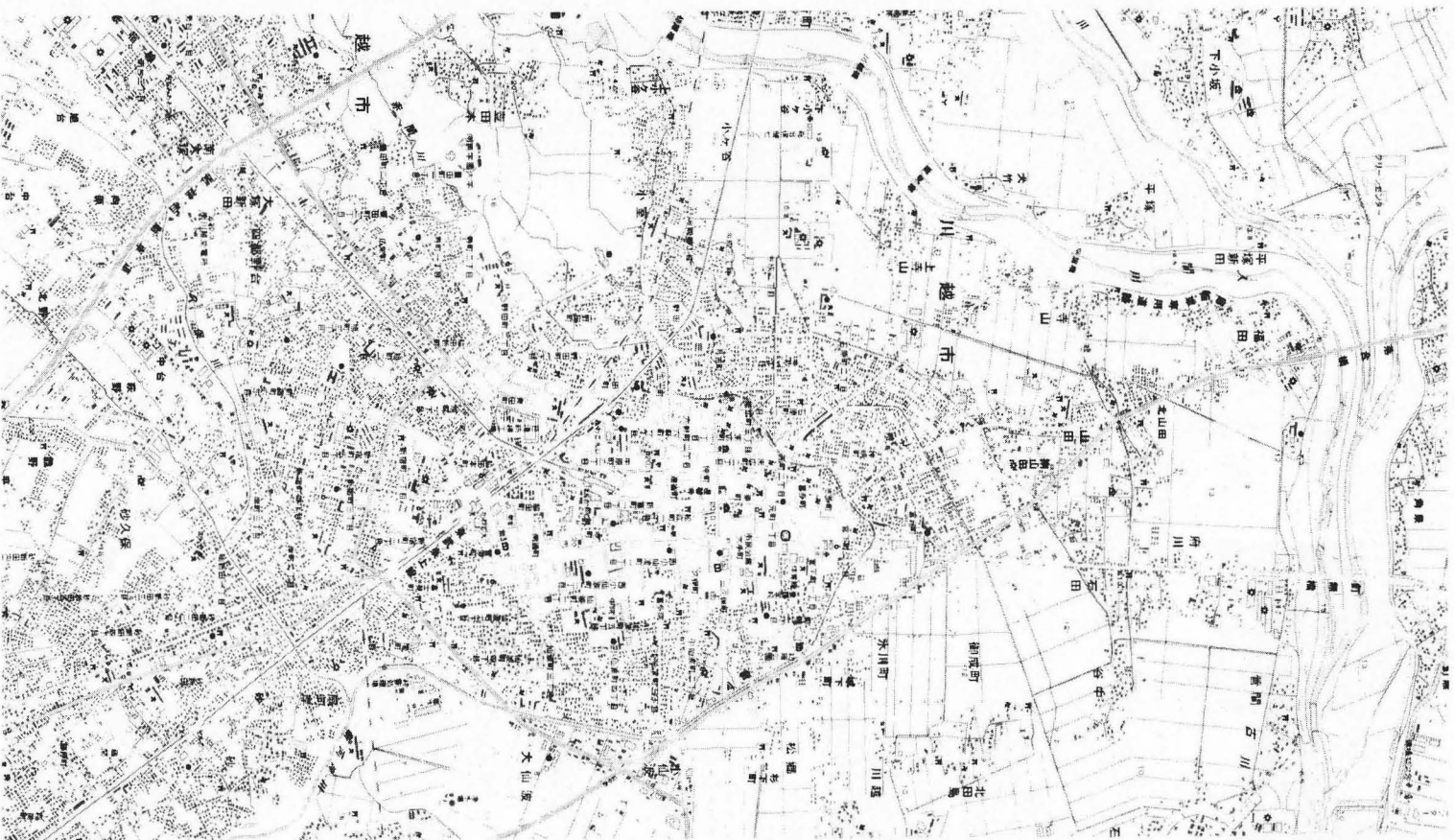
川越の松平大和守とは、越前松平家の分家で松平直恒のことである。藩領は、川越と上州前橋にあった。前橋の城郭崩壊の危険が迫ったため、川越に移ったと言われている。川越城は大きく壮大に描かれている。川越には四本の測線が集中している。川越周辺の測量は、第八次と第九次の測量により行われた。図の北西から川越を通り、南へと抜ける測線が第八次の時の測線で、来たから川越を通り南西に抜ける測線が第九次の時の測線で

ある。測量日記^{*}を読むと川越城下では、多数の寺院についての記載があり、それらの門前まで測ったのではないかと思われる。大図に記載されているのは、蓮馨寺のみである。有名な喜多院については、「此より喜多院裏門道打上、松郷枝久保町、神領小仙波村本村、神領人家、浦和道追分、制札に繋……」とあり、大図には小仙波村に大きな覺の家屋が描かれその間を測線が繋いでいるが、測量日記のこの記事は、この測線に対応するのであろうか。という訳か、この測線は孤立している。現在喜多院の付近は小仙波町である。小仙波、大仙波、砂、砂久保、野田、松郷、今成など多数の地名が現在も残っている。



第9図 大図88号 川越

*佐久間 達夫「伊能忠敬測量日記」九州第二次測量篇の五、伊豆七島測量篇



第10図 2万5千分の1地形図 「川越北部」、 「川越南部」

蓮馨寺のほか、川越城下では、妙養寺、法善寺、行伝寺、長喜院、養寿院など引込と記述され、門前を測量したようである。しかし、これらの寺院の名称は、大図には記載されていない。

第一三図は、忍（現在の行田市）である。忍は、現在では行田市の町名に残っているが、忍と言われてもどこか分からない人の方が多いだろう。しかし、伊能測量当時は、関東の一角を占める重要な藩で、老中を輩出した阿部家が治めていた。

大図を見ると、城が大きく書かれ、城の当たりには忍の地名が書かれ、分岐して行き止まりの測線の先には行田と書かれている。測量日記によれば、第七次の九州第一次測量において、江戸王子を出立し、岩槻、菖蒲、騎西を通り行田まで測量し、大図に出ている佐間村で熊谷に向かう印を残したとあり、行田の本陣まで測量している。行田に止宿し、翌日佐間村から熊谷に向かって測量を続けている。測量日記では、忍行田町と記されており、城を中心とした武家地を忍と言い、町屋の広がる町人町を行田と言っていたようである。持田村、佐間村も現在行田市の町名として残っている。

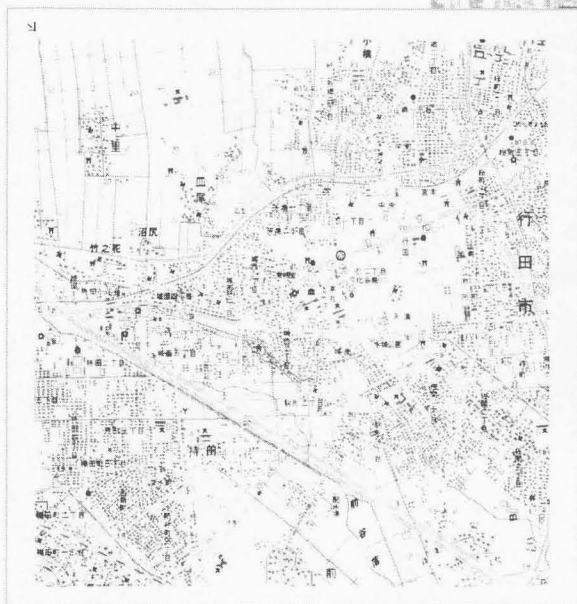


第12図 蓮馨寺



第13図 大図88号 忍

第14図 2万5千分の1地形図 熊谷



第11図 川越市文化財地図

高崎

群馬県の高崎を中心として倉賀野宿から板鼻宿までの中山道を通る測線と高崎で分岐する三国街道の測線が描かれている。当時高崎藩主は譜代の松平（大河内）右京亮輝延であった。大図には松平右京亮居城と記され、薨の大きな建物の絵が描かれているが、天守や櫓などは描かれず城郭の姿は描かれていない。高崎城には天守閣はなかった。

測量日記³⁾には、「烏川は則城の際を回流」とあり、大図には描かれていないが、二万五千分一地形図には、城の堀が残っている。かつては、高崎城の堀に烏川の水が引かれていたのであろう。赤坂村の村名が見えるが、中世には赤坂庄と呼ばれていたそうである。

倉賀野は、中山道と日光例幣使街道が分かれる宿場であった。



第15図 大図第94号 高崎

測量日記³⁾によると高崎領家四百六十軒とあり、かなりの賑わいであつたのであろう。測量日記には「此宿二丁程右を烏川流る」とある

が、大図には倉賀野の辺りには烏川は描かれていない。二万五千分一地形図で見ると倉賀野の南に烏川は流れており、その距離も二百m程度で日記の記載とも合う。伊能測量隊は、享和二年の羽越測量の際に高崎から倉賀野まで「城下外に新田町あり。左右田地 右小山へ一里余 それより田中と云あり 左右人家 それより杉並木 松も稀に混じる 左右田地二三丁にて左右共村々あり 同倉ヶ野持の上正六と云

所あり」と記しており、大図には、和田村、新後閑村、和田多中村、

上佐野村、下ノ城村、倉賀野宿正六の村名が見える。高崎の旧名は和田であり、関東に徳川氏が封ぜられて後、井伊直政により和田が高崎

に改められた。新後閑村は第四次測量の測量日記³⁾には、「村居人家な

し 真言宗莊嚴寺一ヶ寺あり」と記載されている。

高崎から板鼻宿の近くに八幡村という村があり、八幡宮と記載された神社がある。その山道であろうか、中山道から八幡宮に向かつて並木が描かれている。測線は描かれていないのでこの八幡宮には参詣していないのであろう。測量日記にもその記載はない。(財)群馬県教育文化事業団ホームページの「ぐんま地域文化マップ」によると八幡八

*3 同上

*4 同上

*5 二木謙一監修「国別藩と城下町の事典」東京堂出版による

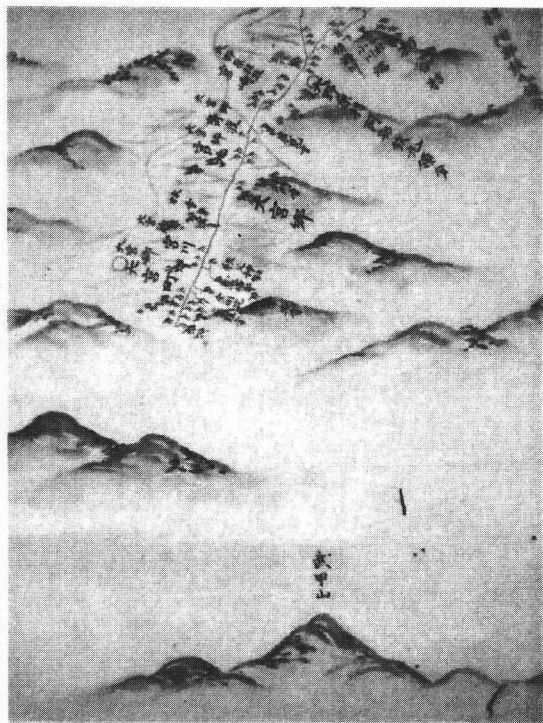
*6 佐久間達夫「伊能忠敬測量日記羽越測量篇」

*6 佐久間達夫「伊能忠敬測量日記尾張及越前以東測量篇」



第 16 図 2 万 5 千分の 1 地形図 「高崎」

※佐久間達夫「伊能忠敬測量日記羽越測量篇」及び「伊能忠敬測量日記九州第一次測量篇の一」



第17図 大図94号 秩父

幡宮の現社殿は、延享五（一七四八）年に造営が開始されその翌々年に落成している。そのときにそれまで途絶えていた太々神樂が復興されたと言うことである。八幡宮は森に囲まれたように描かれており、測量日記³によれば八幡宮の神領百石が八幡村に課せられていた。

秩父

伊能測量隊は、文化一二年（一八一四年）五月半ばに秩父に着いた。

九州第二次測量の最後である。伊能忠敬にとって蝦夷測量開始以来一五年目の測量行の最後であり、あとは川越へ出て川越街道を江戸である。熊谷から皆野を通過して大野原村まで達し秩父に突き出した測線が描かれている。突き出した測線であるから、測量の精度向上には役立たないのであるが、秩父には寄りたかつたのであろう。秩父三三観音の札所をいくつか巡り、秩父神社にも詣でている。秩父という地名は、当時は郡名であり、大宮号と出ており、現在の秩父市街地は大宮町といていた。武甲山が南に描かれているが、現在では石灰岩の採掘で山容が変わってしまったている。

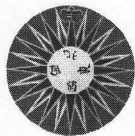
大図はすべて国会図書館所蔵のものである。「伊能大図総覧」から転載した。

地形図はすべて国土地理院の二万五千分一地形図である。

第11図は、「川越市文化財案内マップ」（川越市教育委員会発行 平成一六年三月）から転載した。

つづく

（ほしの よしひさ・（社）日本測量協会副会長、代表理事）



シーボルト事件の背景と間宮林蔵(二)

―林蔵は密告していない―

大谷 恒彦

(4) 事件発覚の端緒になった「小包」の中身

「更紗一反」の持つ重み

まず、更紗とは、十九世紀前半、当時の日本人にとって、どのような物品だったのか、どれくらいの経済価値があったものなのか、を概観しておこう。

「紅毛船の地渡り布」と呼ばれた更紗(サラサ)は、木綿に(手描きの)色模様を染め上げた布地で、十六世紀後半の安土桃山時代、インドをルーツに、インドネシア、ペルシヤ、ヨーロッパ、そして日本へと海を渡ってやってきた。

当時、更紗はインドの重要な輸出品で、本来は非常に高価な極上織物。したがって、茶人や大名に愛好され、茶道具などに使われているうちに、日本でもブームとなり、生活の中にも入り込むようになった。

十七世紀に入り、鎖国政策の中の対西欧貿易の唯一の窓口・長崎出島にオランダ商館ができてからは輸入も増え、十八世紀以降は和更紗とともに、一般庶民向けのものも量産され、広く市場に出回るようになった。つれて用途も次第に広がり、飾り用壁掛け、仕覆(しふく)、布団地、風呂敷、煙草入れなど、生活用品として愛用される一方、高級贈答品としても、盛んに利用されるようになった。

では、シーボルトから高橋景保を介して間宮林蔵に贈られた「小包」

の中に入っていた「更紗一反」を具体的に検討してみよう。

当時、日本へは、インド・オランダ・日本間の三角貿易の形で、インド更紗、ジャワ更紗が入ってきていたが、オランダ商館の高官が贈答に用いたものは八〇%〜九〇%までがインド更紗。一反というのは、幅九〇cm〜一一〇cm、長さ四五〇cm〜五五〇cmの布地で、値段は今の通貨で、百万円から数百万円の間とみてよい。今でも、大名家(前田、井伊家など)や豪商(岩崎家など)に現物が残されており、金泥を使った金更紗なら小物でも百万円くらいはしたという。

たまたま、縞柄の「間道」と呼ばれる高級品が五〇cm正方形で三十両(二百万円近く)もした、との記事が昭和六十一年七月のある茶道の雑誌に掲載された。この布地は仕覆(茶道具入れの袋)用で、図案も日本人好みのものだが、この一例からも、良いものはいかに高価であったかがわかる。

ところが、シーボルト事件について記している「蚕燕子」(内閣文庫所蔵)の中に、(小包を開いて見たら)「老番ザラサ并書状有之故……」と書かれている個所のあることがわかったので、さらに突っ込んで調べてみた。

驚いたことに、明治初年のオランダ貿易の納品書の中に「金更紗二十反、金入更紗二十反、老番更紗二十反、小幡更紗六百反……」と記されたもののあることが最近、判明した。したがって、式番更紗なるものも存在し、小幡更紗同様、取引数量が多く、一般向けに量産されていることもわかった。これらはインドの西ベンガル州から仕入れられたもので、老番更紗は金更紗と同様、高価なためか、輸入量も少なかったことがわかる。(以上、ユーラシア・アートの奥田実氏の説明、提供資料による)

さて、シーボルトから贈られた「更紗一反」が林蔵の手もとに届いたのは、シーボルトの帰国の便船ハウトマン号が出港する予定日（一八二八年九月二十日）の約五カ月前。ちょうど二年前の同じ日、林蔵は最上徳内と一度だけシーボルトを訪ねている。その後二年間、二人の間に交流はない。しかもこの更紗、今でいう「何千円かぐらゐの盆暮れの贈り物」とは全くケタが違う。林蔵に、帰国までに格別な頼みごとがなされた形跡はない。当時の贈答品などの往復日数を考えれば、これからの交流に必要な時間はほとんどない。

では、何か特別な意味をもつ「謝礼」なのだろうか。シーボルトは「カラフト地図」と「蝦夷図」の入った「日本地図」の入手にことのほか腐心し、種々工作した結果、高橋景保を介して、満足のいく成果を上げることができた。聞くところによれば、入手した北方図の中には、林蔵自ら制作に当たったものもあるとか。高橋景保とは数々の地図、物品のやり取りをしたし、最上徳内とも、欧州学界での徳内図の発表について堅い約束を取り交したが、林蔵とは江戸で一度会ったきり。そのとき、徳内を交えて話はしたもの、直接の要求はせず、陰で世話になった（？）ままで、その後、何の表敬もしていない。帰国する日も近い。北辺の植物（乾燥標本）もできればほしい。この際、借りは返しておこう。景保も気分をよくし、未入手のものの提供を急いでくれるだろう。シーボルトはこう考えて、あえて高価な更紗を一反、林蔵に贈ったに違いない。いわゆる「成功報酬」的な性格のものとして。

だが、シーボルトの意に反して、更紗反は村垣勘定奉行から高橋長崎奉行、商館長の手を経て、六月ごろ、贈り主に突き返されてきた。しかも、「警告文」付きで……。善意のシーボルトも多分、「後悔」と「先行き不安」にかられたに違いない。そして数カ月後、「事件を誘致

したのは林蔵」と確信するにいたる。

もし、林蔵が定められた通り、お上に届け出なかったとしたら、隠密とはいえ、林蔵の立場も景保と同じことになる可能性があった。林蔵の生真面目さと臨機応変の措置に敬意こそ払え、これを「密告視」することは、事件の本質を理解するうえで見当違いといわざるを得ない。

(5) シーボルトに手渡された「警告文」のねらい

問題の警告文は、シーボルトが林蔵に贈った「手紙と更紗一反」を贈り主に返すとき、一緒に手渡されたものであることは既述した。

そこで、まず、オランダ・ハーグ国立公文書館で発見され、「シーボルトと日本」誌上で近年、発表された「警告文（写真）」と秦新二氏の日本語訳を掲げておく。

「長崎奉行本多佐渡守正収、大草能登守高好から申し渡された通達文（オランダ語の翻訳文）。

（商館長メイランに対して）

フォン・シーボルトは先日、固く禁じられているにもかかわらず、江戸の間宮林蔵氏の許に手紙及び布一反を送付した。恐らく禁じられていることもしらずに、そうしたものと思われる。当の手紙と布切れは返却されることになろう。それゆえ、今後はこのようなことは一切しないと、彼に明確にさせるように。

署名 S・G・DENNOSIN (茂傳之進)

NISI GIZURO (西義十郎)

K・SINNENMON (加福新右衛門)

Na・SAKFSABRO (中山作三郎)

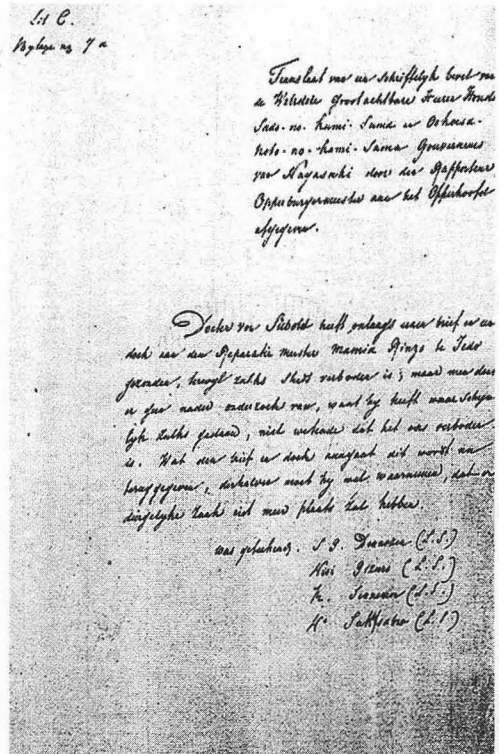
シーボルトが林蔵に送った書状と布一反は返された、と文中にある。ゴ丁寧に、幕府は警告文まで付けて、シーボルトに返却していたのだ。シーボルトはそれを大切にオランダに持ち帰り、保管していたのである。

秦氏はさらに、この警告文が次のような意味合いをもつものと解し、林蔵とのかかわりについても推理している。

シーボルトが林蔵に手紙を送ったことに驚いた幕府が、このようなことはしないようにと、商館長メイランを通じて、シーボルトに警告を発したものだ。幕府の中枢にいる高官に出した手紙ならいざしらず、たかが一普請役への手紙に対するものにしてはあまりに物々しく、かえって、林蔵が「シーボルト事件」そのものに、深くかかわっていたことを推測させる。

長崎奉行よりオランダ商館長への達書(警告文)

縦32.5 cm 横20.4 cm ハーグ国立公文書館蔵



この写真の説明文によると、外国人と日本人の私信の交換は国禁行為にあたる、というのだ。その指摘が正しいとして「知らずにしたのであるから……」というは建前の常套語に過ぎない。五年近くも滞在しているシーボルトが知らぬはずがないからだ。また幕府の方も、シーボルトが弟子たちと文通していることは百も承知しながら、これまで問題にしたことは一度もないのだ。

この手紙と花柄模様の布地(更紗)は四月十七日から十八日、勘定奉行のもとに届けられた。直ちに評定が行われ、警告文が作成され、蘭文に訳され、署名の後、奉行便で長崎へ送付され、長崎奉行からオランダ商館長の手を経てシーボルト本人の渡つたのだらうから、特別に急がなければ、届いたのは多分、六月に入ってからのことだろうと推定される。シーボルトからの「手紙」に書かれて、林蔵の手もとに届くのには二カ月近くもかかったことからしても、逆送の場合、いろいろな手続きに時間がかかったので、やむを得ないかと思われる。

さらに説明文は「いまだ、緊迫感の薄い達書(警告文)だが、江戸表では、隠密裏に探索が始められていたのである」と結び、事件への予感をもたせるような表現をとっている。

だが果たして、事件になるとの「収集情報に基づく確信」があつての捜査開始であつたのか。それとも、建前の警告だけですませる心づもりだったのか。シーボルトの帰国まで、あと三カ月余しかない。国際事件にするには、余りにも時間がなさすぎる。シーボルトはなお、禁制品収集に余念がない。江戸表で協力体制をとっている景保は、林蔵の手紙を仲介したことだけでも、十分嫌疑をかけられる立場にある。しかも、配下の図工あたりから公私にわたる違法行為が「上司告発」という形をとって、お上に密訴する中で情報提供されていた。こう考えてくると、結論は見えてくる。

幕府上層部は、シーボルトが「派手な行動」を慎み、できれば、無事に帰国してくれた方が無難——との考え方が強かったように思う。でなければ、警告する意味がない。そしてさらに、シーボルトの側から景保の方へ、「ことは幕府に知られている。十分警戒するように」か、あるいは「私信、物品のやり取りは打ち切ろう」との情報（警戒警報）が一刻も早く流れ、むしろ事が鎮静化し、表沙汰にならないですむことを望んでいたのでは、と思われてくる。

景保が「シーボルトとの交流は学問の進歩と国益の増進上必要なので、何の問題もない。もし、表沙汰になれば、いつでも申し開きし、身の潔白を証明してみせる」と常々公言していたことに照しても、事件にすることに慎重であったと思う。

すでに、事は探索中の域を超え、核心にふれているというのであれば、林蔵の届け出が即警告文の手交——という形をとらないのが常道。一方、警告だけはしておき、様子をみて立件というのが捜査方針であれば、帰国直前の台風による事の露頭以前に、景保逮捕——シーボルト訊問という手はずが整っていて、帰国前の臨検の日取りがすでに決まっていたというのでなければ、事件の必然性はなかった、と考えざるを得ない。

いずれにせよ、警告文付きの手紙・贈りものの返送は、シーボルトにとつて大きなショックだったろうし、それゆえに、後日の厳しい取り調べの原因が「林蔵の仕業」と映ることにもなったのだと思う。

(6) 帰国寸前の「神風」と事件の関連性

シーボルト事件は、積荷をほぼ終えた帰国寸前のオランダ船・ハウトマン号の中から、シーボルトが収集した数多くの禁制品が発見されたことから表面化する。

「入り鉄砲、出女」の取り締まりでわかるように、幕府は日本にとつては危険なものの密輸入と国益を損ずる秘密情報（地図など）の流出を極度に警戒した。したがって、日常的な物品の持ち出しについては、何か特別な情報が寄せられない限り、長崎奉行所は知らぬ顔を通してきたし、多少のことは、大目に見てきた。しかし、今回大事件に発展したのは、国際的な国家機密漏洩という性格が余りにも強く、かつ大規模で計画的とみたらだつた。たつた一人の外国人医師に、好きなように「鎖国の掟」を踏みにじられたことへのけじめ付けと幕府の面子保持への焦りからだつたのかもしれない。それほど、幕府の權威は日に日に落ちていった。

では話を戻し、一八二八（文政十一）年九月十七日の夜半の台風来襲の模様から検証を始めてみよう。

台風は真夜中から翌朝六時頃まで吹き荒れ、長崎港内は大被害をこうむった。出島沖に碇泊中のハウトマン号も、大波に翻弄された中国船に錨綱を切られ、港内の奥まったところにある稲佐の浜の割石へ吹き上げられ、舳を一軒の民家の二階に突っ込んだ状態で破損してしまった。この船を長崎奉行所の役人たちが臨検し、シーボルトの積荷の八十九個の中から、国外持ち出しのできない極秘の禁制品を次々に発見したのである。

ではなぜ、ハウトマン号は臨検されたのか——については諸説がある。

武器などの密輸を防ぐため、出港する外国船の積荷検査はしないが、入港の際の積荷は厳重検査するのが通例で、オランダ貿易の取り決めにも、その条項があった。このため、同船の漂流・難破を、出港——入港とみなしたという説。

幕府からの密命を受けていた長崎奉行所はかねて、シーボルトの荷

物をマークしており、難破を奇貨として同船を臨検したという説。

台風で難破、浸水した同船の被害状況調査と積荷を水害から守るための一部荷ほどきから偶然、禁制品を発見、大騒ぎとなり、江戸表に急使を立て、幕府の指示を仰いだという説。

入港みなし説は、事件になつてから、後で考え出した理屈のように思える。

同船は修理の後、翌年二月二十四日、予定より五カ月も送れて長崎を出港している。大修理を要したところから考えて、被害調査による発覚説が妥当のように思う。もちろん、シーボルトの荷物はマークされていたので、「この際」ということになったとも考えられるが、いずれにせよ、台風がもたらした「偶然性」を無視することはできない。

当時の人々はこの台風を「神風」と呼び、景保らの行為に同情を示さなかった。そして、

ころんだの おらんだのとてむつかしや せまじきものは芸者天
文ペンペンの 音がやんだらこんてん木（渾天儀）

それはころんだこれは阿蘭陀

などの狂歌を作つて、ころび芸者と並べて、この事件を諷刺したのである。

しかも、この「神風」はシーボルトの帰国（出港）予定日・九月二十日の三日前に来襲したのである。幕府は「手入れ」の機会を虎視眈々とねらっていた、との見方をしている研究者もいるが、具体的にいうと、その機会は十八日と十九日の二日間しかない計算。果たして、江戸表から「この二日間に臨検せよとの指示」が届いていたかどうか。あるいは長崎奉行所の権限により、ぎりぎりのところでの日取りが

決められていたかどうか。どのような事件経過説明書の中にも、この重要なポイントについて何一つ明記されていないし、伝えられてもいない。

要は、すべて成り行き任せの調査中、だったことにはしなないか。いったん出港してしまえば、それまでである。さらにいえば、今に残されているお庭番の御用資料の中にも、それらしい動きを示す形跡は見付からないし、林蔵の動静の中でも、長崎へ隠密御用をしてはいるが、時期が事件発覚の翌年の三月二十日、景保が獄死した後のことと解されているので、事件の跡始末をしに行つたともみられており、事件の核心にふれるような行動だったとは確認できていない。

事件は起こるべくして起こつたのではあるが、発覚の端緒をつくつたのはまさにこの「神風」であつて、林蔵の意思ではない。

台風で事件が表沙汰になり、シーボルトも連日のように調べを受けた。その間の一八二九（文政十二）年二月十五日、修理を終えて九日後に出港する予定のハウトマン号に、シーボルトは蘭印政庁総督あての文書を託している。その中で、事件発覚の発端について次の通り書き綴っている。

今回の事件は、発端は作左衛門（高橋景保）と彼に仕える図工の一人がいさかいを起こして、日本地図のことを外部に洩らしたからです。たちまち幕府に知られることになり、現在、作左衛門、私、問題の地図を私に渡す仲介を務めた人が責任を問われ、今なお最悪の状態が続いています。（秦氏の著書引用）

シーボルト自身、「自分のことを直接、お上に通じたのは林蔵だが、事件そのものの最大の発覚原因は、景保の仕事ぶりがもたらした、その部下からの不平・不満の域を超えた密訴」によるものであったことを認めていたのである。

いずれにせよ、この事件は自然発生したものではなく、学問上の資料交換の必要性から、人為的に作り出されたものである。シーボルト側には、加うるに国家的・政治的・軍事目的があったし、景保の方には職権乱用・公私混同による汚職的な側面があった。シーボルトの大家義名文に、景保がうまく乗せられた、としかいいようがない。徳内は学問上のやり取りの中で、最後まで慎重であつたし、林蔵も合法的に、職務を遂行する中で、隠密の立場と地図製作者の立場を二人の上司のものでうまく使いわけ、生真面目さを貫いた。偏忠・愚忠の人とはいわれたが、危なげはなかった。(注)

一八五四(安政元)年、シーボルトの名著「日本」の出版が完結し、その四年後、国外追放令が解かれると、シーボルトは翌一八五九(安政六)年、再び来日した。しかし、その時は、徳内も景保も、そして林蔵も、かつて国際舞台でかわり合った人々はすべて世を去つていた。

(注) 長田偶得著「間宮林蔵」(明治38年8月発行)の中に「シーボルト和蘭貢使に従つて江戸に觀しけると、林蔵が日本地圖の精良なる者を蔵すと聞き、如何にもして之を手に入れんものと、窃かに人を介して曰はしむるよう、御身もし此地圖を与えなば、報ゆるに重資を以てして、生涯富裕ならしむべしと。林蔵固く拒みて許さざりき。(以下略)」の一節があり、利をもつて誘つたが、林蔵に断られたとの見解もあることがわかる。

(主な参考文献・資料)

- ・シーボルト先生(1)(2)(3)その生涯及び功業 呉秀三
- ・平凡社・東洋文庫 昭和42・43年
- ・江戸参府紀行 シーボルト 平凡社・東洋文庫 昭和42年

・シーボルト 板沢武雄 吉川弘文館 昭和35年

・シーボルト(江戸博物学者の足跡)ヴォルフガング・ゲンシヨレク 講談社 平成5年

・シーボルト事件(大型台風とオランダ船ハウトマン号) 吉岡達夫 東洋薬事報 昭和63年

・シーボルト父子伝 ハンスケルナー 創造社 昭和49年

・文政十一年のスパイ合戦 秦新二 文芸春秋 平成4年

・毎日グラフ・アミューズ「更紗の風合いを楽しむ」 毎日新聞社 平成6年

・シーボルトと日本(展覧会用カタログ) 朝日新聞社 昭和63年

・ヨーロッパに眠る日本の宝(展覧会用カタログ) 文芸春秋 平成2年

・西洋人の描いた日本地図(展覧会用カタログ) 東洋文化研究協会 平成5年

・江戸城御庭番 深井雅海 中公新書 平成4年

・最上徳内 島谷良吉 吉川弘文館 昭和52年

・高橋景保の研究 上原久 講談社 昭和52年

・北辺の先覚者最上徳内 皆川新作 電通出版部 昭和18年(平成5年復刻)

・伊能忠敬 今野武雄 新日本新書 昭和52年

・東韃紀行 間宮林蔵原著 大谷恒彦訳 教育社 昭和56年

・間宮林蔵の再発見 大谷恒彦 筑波書林 昭和57年

・間宮林蔵 赤羽栄一 清水書院 昭和49年

・間宮林蔵 洞富雄 吉川弘文館 昭和35年

・間宮林蔵(シーボルトの知人) 吉岡達夫 薬事報あさひ 平成4年

・間宮林蔵の「樺太地図」 朝日新聞 昭和63年3月28日付

・私残記 森莊己池 中公文庫 昭和52年

・ひとり旅（もう一人の密告者・ぺんぺんの音がやんだら）

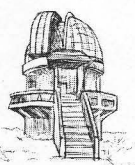
網淵謙錠 中公文庫 昭和62年

・刑 網淵謙錠 文芸春秋 8月号 昭和49年

・公文書が語る歴史秘話 小玉正任 毎日新聞社 平成4年

（おおたに つねひこ・毎日新聞社終身名誉職員、間宮林蔵顕彰会顧問）

展示案内



「測量機器と天文」 国立天文台三鷹キャンパス・天文台歴史館

国立天文台は江戸幕府天文方の蔵書を中心に三〇〇〇冊ほどの和漢書、暦本を所蔵している。これらの貴重書は一九九一年から各回様々なテーマの下に常設展示として公開されており、三十七回目となる今回は「測量機器と天文」というテーマで『測量集成』（福田理軒著）『測量用具図（仮）』（写本）『図解量地指南』（村井昌弘著）『廻船用心記』（吉村海洲著）『量地圖説』（甲斐駒藏著）が展示されている。

案内パンフレットには「西欧では遠洋航海が盛んになると、船の位置を知るための天文観測技術が発達し、十八世紀頃に八分儀、六分儀などの機器が開発された。やがてその技術や器物は日本に伝わり、測量の解説書にも取り入れられた。日本では検地や築城、治水などの測量は、昔から中国伝来の技術を用いてきたが、伊能忠敬の高精度な日本地図が描かれるには、それに加えて天体観測を用いた測量が必要であった。」とあり、伊能忠敬の測量との関連性について言及している。

武蔵野の面影残る三鷹の森には、国有形文化財に指定された「第一

赤道儀室（天文台歴史館）」や「アインシュタイン塔」などの歴史的な

洋風建築が点在しており、年一度の特別公開のほか、常時公開コースも設けられている。東京の異次元空間ともいえる場所に、高橋至時や景保も手にしたであろう天文書や暦本を訪ねてみてはいかがだろうか。

（貴重書は複製展示の場合があります、詳細はお問合わせ下さい。）

国立天文台・三鷹キャンパス 見学 ☎ 0422・34・3600

（三鷹市大沢二二二） 図書 ☎ 0422・34・3951

【過去の展示】

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 『星学手簡』 | 21 『日食』 |
| 2 『観測（江戸後期）』 | 22 『江戸時代の望遠鏡』 |
| 3 『長暦』 | 23 『宣明暦』 |
| 4 『江戸時代の宇宙論』 | 24 『江戸時代の漂流記』 |
| 5 『渋川春海の業績』 | 25 『太陽』 |
| 6 『江戸時代の天文学』 | 26 『谷泰山と渋川春海』 |
| 7 『すばる』 | 27 『西洋天文学の導入』 |
| 8 『江戸時代の星図』 | 28 『関孝和と暦算』 |
| 9・10 『彗星』 | 29 『江戸後期の天文暦』 |
| 11 『江戸時代の天文機器』 | 30 『改暦の年の頒暦』 |
| 12・13・14 『暦』 | 31 『高橋至時』 |
| 15 『貞享暦と授時暦』 | 32 『中国の星座―天歩歌を中心に』 |
| 16 『江戸時代後期書物にみる「宇宙のはて」』 | 33 『幕末の西洋―一般書に見える天文』 |
| 17 『天保暦法とラランデ暦書』 | 34 『内田五観の世界―算學から天文まで』 |
| 18 『測地』 | 35 『江戸時代の書物に見る銀河』 |
| 19 『測量と天文』 | 36 『天文奇現象錦絵集』 |
| 20 『江戸時代の星図』 | |

第22回までの分は図録としてまとめられています。詳細は天文台のHPで。

伊能忠敬の目に届かなかった

江川英毅からの書簡

藤岡健夫

今回伊能忠敬に宛てた江川太郎左衛門英毅ひでたけからの書簡について紹介する。

はじめに英毅について述べよう。伊豆の江川太郎左衛門と言え、一般に幕末の洋学者、砲術家で葦山に反射炉を構築して製鉄を行い、また品川沖に台場を築いたことなどで歴史教科書にも出てくる有名な英毅は、これは江川太郎左衛門英竜ひでたか（号を坦庵と称する）の方で、英毅はその父親に当たる。江川家は古くからの代官で、代々、太郎左衛門を名乗っている。

江川英毅については、江川坦庵全集 戸羽山瀚編著に詳しいが、要点を絞れば以下のようなことが述べられている。

明和七年（一七七〇年）英征の次子として生まれ、幼名を金次郎と云った。寛政元年部屋住から初めて將軍家斉に拝謁を賜った。父英征の死去に遭い、同四年父職を襲ぎ、以来代官の職に在ること四十三ヶ年、諸国代官衆の筆頭に挙げられた。殊に理財家としての名が高かったのは、父英征の放漫経済策から破局に瀕した江川家の窮乏財政の中に身を挺して健全財政の確立に一生を傾倒し、新田の開墾、河川の改修、殖産興業に深く意を用いたためで、幕府の表彰を受けること十数度に及んだ。高も百五十俵から晩年には五百俵の待遇を与えられ、天

保五年（一八三四年）に没した。享年六十五歳。

なにやら若くして家運の傾きかけた伊能家に婿入りし、家業に精を出して財産を築き、飢饉には罹災者を救い、人徳を集めて苗字、帯刀を許され、名主にもなった伊能忠敬の前半生によく似ているように思われる。

また同じ坦庵全集の江戸における英毅の知友および趣味人については、画家の谷文晁、蘭医の杉田玄白、探検家の近藤重蔵その他十名程の書家、画家、儒家の名前が挙がっているが、伊能忠敬の名前はない。

その書簡は写真に示すようなもので、大きさは、縦一五ミリメートル、長さ約六〇〇ミリメートルである。筆跡はご覧のように達筆で、大変きれいにきちんと書かれている。

前文は暑中見舞いと合わせて「自宅の庭で採れた椎茸を少々ですが呈上いたします」と云う内容の忠敬宛の送り状である。伊能勘解由は、忠敬の通称である。現在椎茸はクヌギなどの櫛木に菌を打ち込んで大量生産ができ、スーパードなどで安く手に入るが、当時このような人工生産方式が採られていたかどうか、天然物であれば今の松茸のように珍しいものであったろう。

後半はこれが主文で、再び時候の挨拶に続いて「考成下編推歩の書物を昨年中拝借し、日食月食の理論が追々分かってきました。内容は大変精密で大悦至極であり、感心しております。ついてはこの後編は難しいと思うが、その解釈を記した書籍を勝手ながらなにとぞ拝借させて頂きたいと思っております」と云うような内容である。

ここで述べている考成下編とは、当時西洋の天文学書が中国を通して日本に入ってきたもので、詳しくは曆象考成上編、下編と後編の三部から成っている。推歩とは天体の動きを推測することである。当時第一級の天文学書で、忠敬の師高橋至時は、これをテキストとして教

えた。五十歳を過ぎた忠毅は、これを書き写し大変苦心して勉強したと言う。英毅は当時この天文学書を読んで、代官の業務に直接は関係のない天体の動きの理論が分かり大悦至極と喜んでゐるあたり、英毅の知識人としての奥深さが伺える。次に借用を請うている暦象考成後編は、保柳睦美編著の「伊能忠敬の科学的業績」によれば、「太陽と月の運動にケプラーの楕円軌道論を適用したもので、実に難解な書物である。中略 天才的な高橋至時にして、はじめて解けたものである」と述べている。英毅が更にこの難しい天体の運行の理論を理解しようと挑戦するその気持こそ、敬服に値する。

さて、ここで意外なことに気がついたのである。この英毅の書簡の發送日付は、六月二十二日になっているが、年号が何時かということである。世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書目録と題する書籍があるが、これによると文化十四年に、英毅から忠敬宛に三通の書簡が送られている。期日は三月四日と、七月二十六日と、もう一通は期日不詳である。三月發送の書簡の内容は、先に述べた「暦象考成下編」の借用願いと「弧三角法」についてなどの質問である。その他の二通も天体の観測法や、計算法などに関する質問である。この辺の事情を右記の伊能忠敬関係年譜によると、「文化十四年忠毅が江川英毅に通信教育をする」と面白い表現がされている。

話を戻し、英毅の先の書簡によると、「昨年中拝借した暦象考成下編云々」とあるから、この書簡は、文化十四年の翌年、即ち文政元年の六月二十二日付けということになる。ところが忠毅は、この年（一八一八年）の四月十三日、七十四歳で江戸の自宅で病没している。しかし、「大日本沿海輿地全図」の完成と、後継者忠誨の元服までの三年間、忠敬の喪は秘された。つまり英毅のこの書簡は、残念ながら忠敬の目には届かなかったのである。英毅は、後になって師を失ったことを知

り、さぞ嘆いたことであろう。この時、即ち英毅がこの書簡を書いた時の年齢は、四十九歳であった。

日本の科学の黎明期に、こんなに知識欲旺盛で、頭脳明晰な老人がいたことは、老齢化が進む現在の我々にとって、大変心強いことではなからうか。

最後にこのレポートを纏めるについて、お世話になった伊能陽子氏、伊豆の国市葦山郷土資料館の工藤雄一郎氏にお礼を申し上げます。

（ふじおか たけお 技術士）



葦山の代官屋敷・江川邸（国重要文化財）
英毅の代に玄関や書院部分を改築、威容を整えた

[illegible]

六月辛酉

江川書院藏

英韻

伊破島解西柳

高糧山

書簡の前文部分は暑中見舞と合わせて自宅で採れた椎茸の送り状である

一考或下編排年之誤
 因雖同部亦各之解
 而疑至極而下之
 其上有誤藏心也
 排年之誤列
 年用由之
 解之相偶
 而疑至極而下之

書簡の後半部分が主文で「曆象考成後編」借用を依頼する内容となっている

研究レポート『伊能忠敬』

伊能忠敬を訪ねて―佐原く芝公園―

石谷 春香

はじめに

私には四人の祖父と祖母がいます。大田区に住んでいる祖父と祖母と取手市に住んでいる祖父と祖母です。私はときどき遊びに行きます。ある日、私は取手市戸頭の家に行きました。その時、祖父が近所に間宮林蔵記念館があるから行こうかと言いました。間宮林蔵ってだれ？・

聞いたことはありません。祖父は北海道の地図を作ったんだよと言いました。

結局、記念館には行かなかったのですが、祖父は本棚から一冊の本を出してきました。

それが伊能忠敬の本だったのです。

それなら知っている！日本地図を作った人！

祖父は調べてみるとおもしろいよと言いました。私は家へ帰って本を読みました。これが私の伊能忠敬の研究の始まりです。

編集部から 石谷さんのレポートはA4判ヨコ野紙に手書き原稿で1000ページにも達する膨大なものです。すべてを掲載するのは紙面の都合で困難です。ここでは目次の項目を掲げてその研究の全体像を示し、主な項目について内容を紹介します。なお、写真や図版は原文に掲載されていたもののごく一部です。

目次

第一章 伊能忠敬の生涯

- 1 誕生
- 2 少年時代
- 3 小堤村での生活
- 4 結婚
- 5 伊能家の仕事
- 6 天明の大飢饉
- 7 天文暦学
- 8 江戸
- 9 出発
- 10 第一次測量
- 11 第二次測量
- 12 第三次測量
- 13 第四次測量
- 14 第五次測量
- 15 第六次測量
- 16 第七次測量
- 17 第八次測量
- 18 第九次測量
- 19 第十次測量
- 20 忠敬の最後
- 21 地図の作成
- 22 伊能忠敬家系図
- 23 伊能忠敬年譜

第二章 伊能忠敬を訪ねて

- 1 千葉県佐原
- 2 東京都台東区
- 3 千葉県九十九里
- 4 茨城県つくば
- 5 東京都芝公園
- 6 東京都高輪
- 7 もう一度千葉県佐原

第三章 伊能忠敬の測量

- 1 距離を測る
- 2 方向を測る
- 3 坂道を測る
- 4 天体観測

- 5 伊能隊の測量の様子
- 6 伊能隊の測量日数と距離

第四章 伊能忠敬の測量と私の実験

- 1 歩測
- 2 坂道
- 3 緯度一度
- 4 地図の作成

第五章 伊能忠敬の地図

- 1 それまでの日本地図
- 2 伊能図
- 3 地図の作り方
- 4 伊能図の地図記号
- 5 「くらしと測量・地図展」
- 6 変化する日本

第六章 伊能忠敬の第二次測量

- 1 第二次測量の旅
- 2 第二次測量の旅日記
- 3 神奈川県

第七章 地図

- 富岡八幡宮から川崎まで歩く！
- 1 一八〇一年五月十四日伊能忠敬の旅
- 2 二〇〇七年五月四日私の旅

第八章

伊能忠敬の見た風景

- 1 伊能忠敬への挑戦
- 2 神奈川県を調べる
- 3 事前準備
- 4 出発
- 5 湯河原町
- 6 真鶴町
- 7 小田原市
- 8 二宮町
- 9 大磯町
- 10 平塚市
- 11 茅ヶ崎市
- 12 藤沢市
- 13 鎌倉市
- 14 逗子市
- 15 葉山町
- 16 横須賀市西
- 17 三浦市
- 18 横須賀市東
- 19 横浜市金沢区
- 20 横浜市磯子区
- 21 横浜市中区
- 22 横浜西区
- 23 横浜市神奈川区
- 24 横浜市鶴見区
- 25 川崎市川崎区
- 26 川崎市幸区
- 27 川崎市中区
- 28 目的地！
- 29 湯河原から家までの地図

第九章

伊能忠敬の未来

- 1 伊能忠敬の死と地図の完成
- 2 シーボルト事件
- 3 伊能図をもとにした地図
- 4 記念碑の建立
- 現在まで
- 5 映画「伊能忠敬―子午線の夢―」
- 6 ドラマ「四千万歩の男―伊能忠敬―」
- 7 伊能忠敬の未来と私



地図のまち佐原 伊能忠敬の歩幅

2尺3寸 70cm

第二章 伊能忠敬を訪ねて

一 千葉県佐原

家から「新川崎駅」を出てJRに乗ります。成田駅で乗り換えて佐原駅で降ります。家から3時間近くかかりました。駅は、小さな駅ではなかったのですが、とても静かで改札を出るとすぐのところ「地図のまち佐原」と書かれたものが地面にあります。それから伊能忠敬の歩幅が70cmとかかれています。

① 伊能忠敬像（諏訪公園）

場所 千葉県香取市佐原イ七七一

公園は普通の公園です。その公園の中にありました。とても大きいです。高い台の上に伊能忠敬の像がのっています。手に彎剣羅織を持っています。そして測量の記録をつけているようです。



像の下で皆さんが変な笛をふいていました。見たことのない笛です。なんかヒューヒューふいています。私は写真を撮ろうと思ったので皆さんがどくまで待ちました。やっとだったので写真を撮ろうとしました。

その時！写真が撮れないのです。こわれたのかと思いました。そしてたらデジカメのメモリースティックが入っていないかったのです。えーです！ココまできて…なんとかしらないと……。

第一章 伊能忠敬の生涯（省略）

わたしはデジカメのメモリーだけを買うことにしました。お店が分らないのでさっき行った観光案内所に戻りました。さっきの女の人がいました。「カメラ屋さんはどこにありますか?」と聞きました。外に出てすぐそこでですよと教えてくれました。カメラ屋さんゆきメモリーを買おうとしたのですが、お店の人に「うちにはないよ」と言われてしまいました。……

お店のおじさんに聞きました。

「どこかで売ってないですか」すると親切に話してくれました。

この佐原は昔はにぎやかな町だったそうです。すぐ前に大きなスーパーがあつて、いろいろ売っていたそうです。

しかし町に人が少なくなつてきてスーパーはつぶれてしまったそうです。それから反対のほうにもデパートがあつたそうですが、やはりつぶれてしまったそうです。この佐原にはカメラ屋は一つしかないそうです。

すると「そうだ電気屋ならあるかも知れないな。」と言いました。

電気屋は町はずれの佐原高校の前にあるというのです。

でも今日は休みだそうです。「店は休みでも、横の入り口から聞いてみたら」と教えてくれました。

とにかく行ってみることにしました。空が曇ってきてなんだか雨が降るみたいです。自転車で思いっきり走っていきました。観光案内所でもらった地図を見つと行くと、ようやく高校に着きました。

高校の前には電気屋さんがありました、やはり休みでした。

横を見ると玄関があります。なんだか聞きづらいです……。

インターフォンを鳴らすと家の人が出てきました。

私は言いました。「デジカメのメモリーはありますか?」

すると「ごめんなさい……うちにはないです……」……。

せっかくなのに……。

私は考えました。どうするか……デジカメは使えない……。

写真とらないと……家に戻ったら時間がかかる……。

また別な日にくるか……でも、ここまで来るのは大変だし……。

デジカメは使えない……そうだ……使い捨てカメラ!

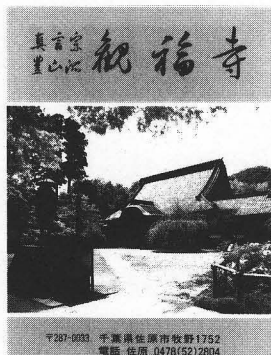
コンビニなら売っている! 自転車で行ってセブンイレブンを見た! 私は急いで来た道を少し戻りました。セブンイレブンに入るとありました! 使い捨てカメラ! これで写真はとれる。

よかったです。私は次に進むことにしました。

次に観福寺に向かいました。伊能忠敬の墓があります。なんだか雨が降つてきそうです。ちよつと急いで走りました。ずーと走っていきました。ようやく着きました。門がありました。ずーと走つてもこわい場所です。なんだかでてきそうです……なんだか行くのがいやです。門を入ると階段があります。大きな木がたくさんあつてとても暗いです。ずっと歩いていくとお寺に着きました。



佐原駅



観福寺

上のほうにお墓が見えたのでそっちに行ってみました。すると「伊能忠敬墓」と書かれた矢印があります。その方に行ってみるとありました。

② 伊能忠敬墓（観福寺）

場所 千葉県香取市牧野一七五二

伊能忠敬墓と書かれたものがあり階段を上るとお墓がたくさんあります。その一番奥に伊能忠敬墓と書かれたものがあり、それが忠敬の墓です。お墓には「有功院成裕種徳居士」と書かれています。



忠敬は亡くなる前に自分のお墓は高橋至時先生のお墓の横に作ってくださいと言ったので、このお墓には忠敬の髪と爪だけが納められています。

周りにはお墓がたくさんあります。ハチがとんできたので逃げました。お寺に寄って絵葉書を買って、パンフレットをもらいました。お寺は大きいです。

自転車に乗って今度は佐原小学校に行きました。小学校にも忠敬の像があります。

③ 伊能忠敬像（佐原小学校）

場所 千葉県香取市佐原一八七〇



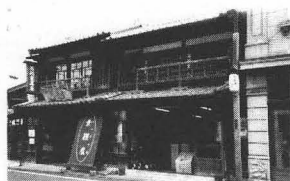
小学校には校庭から入りました。小学校の野球チームが野球をしていました。探してみると校庭の隅のほうにありました。ちよつと小さい像です。手にノートと測量に使うくさりを持っています。校庭が広くてうらやましいです。

次に山車会館に行きました。山車会館は八坂神社の中にあります。入場料は二〇〇円です。佐原の秋のお祭りは大きいそうです。山車会館にはそのお祭りの時使う山車が展示してあります。とても大きいです。すぐ近くにあった「おざわ」というお店に入りました。なんだか古いお店です。伊能忠敬の絵が書いてある「地図サブレ」を買いました。中は普通のおかしでした。

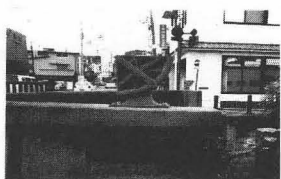
自転車で行くと「忠敬茶屋」というのがありました。入ってみるとおみやげ屋でした。伊能忠敬の本やおかし、地図など色々売っていました。私は絵はがき、本、地図などを買いました。

ちよつと休むことにしました。私はクリームソーダを飲みました。お店のおばさんとちよつと話しました。そしたら、ここは忠敬茶屋ですが、その読み方は「ただだかちやや」ではなく「チューケイちやや」だそうです。佐原では伊能忠敬のことを親しみをこめた「チューケイさん」というのだそうです。なんだか変です。少し休んだので出発しました。

このあたりには古い建物がたくさんあります。本当に昔の町のようです。少し行くと橋があります。忠敬橋といいますが、橋には小象限機がありました。



佐原の古い町並



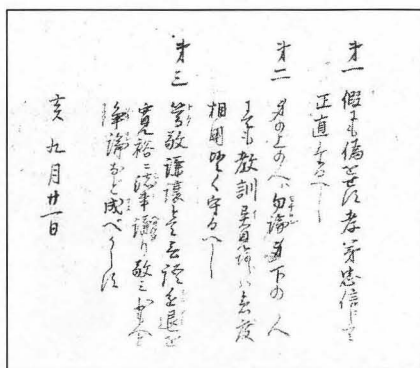
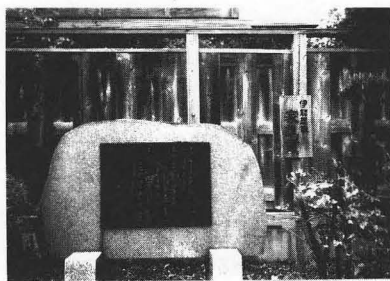
忠敬橋の小象限儀

小野川にそってすこし行くとありました。忠敬の家です。

④ 伊能忠敬旧宅

場所 千葉県香取市佐原イ一七二 二一

古い家です。入口に伊能旧宅と書いてあります。観光をしている人がたくさんいます。入口を入ると座敷があり、そこは店舗だったそうです。あがってはいけないようです。炊事場もありました。今のキッチンです。あたりまえですけど、古い家です。昼間なのに家の中は暗くてちょっとこわいです。庭に「伊能忠敬家訓書」の石碑がありました。



第一 仮に偽りをせず考弟忠信に

して正直たるへし

第二 身の上の人ハ勿論身の下の人にも教訓異見あらは急度相用

堅く守るへし。

第三 篤敬謙讓とて言語進退を寛裕に諸事譲り敬三少しも人を争論など成すべからず 亥九月廿一日

と書いてあります。これは……

第1 人をだましたりせず、親孝行をつくし、正直であれ。

第2 身分の上下にかかわらず、どんな人の意見であっても、役に立つことや正しいことであれば、必ず取り上げて実行せよ。

第3 立ち居ふるまいにゆとりを持ちできるだけ人に譲り、言い争いなどしてはならない。してはならない。寛政三年（一七九

一年）

ということですが。

庭の奥に行くと忠敬の像がありました。

⑤ 伊能忠敬像（伊能忠敬旧宅）

場所 千葉県香取市佐原イ一七二 二一

この像は佐原小学校にあった像とにっています。ただ佐原小学校にあった像は手にくさりを持っていたんですがこの像はもっていません。それから像の横に

「この一歩から

測量の日」

という碑があります。

すごく目立ちます。



見学している人の中には中国の人もありました。忠敬の家を出たところは船の乗り場になっています。かさをかぶった女の人が2人でごぐみたいです。見ているとお客さんを乗せてゆつくりと行きました。それから橋の上にいると橋の下から水が流れるみたいです。その音からこの橋は「ジャージャー橋」と呼ばれているそうです。橋を渡るとすぐに伊能忠敬記念館があります。

⑥ 伊能忠敬記念館

住所 千葉県香取市佐原一七二二—一
電話 〇四七八—五四—一一八



きれいな記念館です。入場料は中学生は二五〇円です。

中に入っているいろいろ見学しました。あたりまえですが伊能忠敬のものばかりです。映画もやっていました。それからパズルやクイズもありました。見学の人も多いです。団体の人もいました。にぎやかなおじさんもありました。いろいろ見てから受付の人にちよつと質問しました。そしたら中に入つてと言われました。先生みたいな人がいました。伊能忠敬を研究していると言ったら横にある大きな本棚から何冊かの本を持ってきてくれて、いろいろ教えてくれました。それからコピーもたくさんしてくれました。「がんばってね。」と言ってくれました。親切な先生です。あたしはありがとうと言いましたとお礼を言いました。受付の横にあったスタンプを押して行きました。また自転車ですっていききました。何軒かお土産を見ました。それから本屋さんにも寄りました。でも古いんです。ものすごく古い家に本があるのです。私がいままで見たことのないような古い家です。歩くとみしつみしつと音がします。本も少ししか置いてありません。ここで本を買う人がい

るのでしょいか？ 私はすぐに出ました。自転車で走って最初の案内所まで戻りました。自転車を返しておみやげを見ました。おみやげを見ていると値段が日本の円だけでなく、ドルでも書かれていました。この佐原は成田空港から近いことから外国の人も観光に来るそうです。そこでおみやげだけドルでも売っているそうです。

私は伊能忠敬の卵せんべいを買いました。おなががすいたので駅でそばを食べました。そばを食べたのですが、まだおなががすいたのでカレーも食べました。時間を見るとまだ電車は来ません。駅の裏に図書館があるので行ってみることにしました。図書館の入り口に伊能忠敬の像みたいのがありました。図書館は普通の図書館です。しかし中に伊能忠敬の本が展示してありました。それから本棚に伊能忠敬の本がたくさんあったので見ようと思ったのですがカギがかかっていました。図書館の人に言うのとあけてくれました。そうしたら2階にもありますよと教えてくれました。2階の奥にも本棚があり、伊能忠敬の本ばかりでした。いろいろな地図もありました。図書館の人はまたカギを開けてくれました。少し見ただけで行きました。

駅のうらもとても静かです。今日はなんだかいろいろなものを見たような気がします。



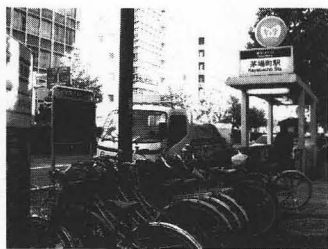
二 東京都台東区

地下鉄の日比谷線「茅場町駅」でおります。出かける前にデジカメのメモリーはちゃんとチェックしました。階段を上がるとすぐそこに「地図御用所跡」の看板があります。

⑦ 地図御用所跡

場所 東京都千代田区茅場町二丁目十二番地付近

一八一四年（文化四年）伊能忠敬は深川黒江町からここ八丁堀亀島町と呼ばれていたこの場所に引越しました。忠敬の家としてだけでなく地図を作成する地図御用所としても利用されていきました。そして忠敬が亡くなったのはこの場所で、後に大日本沿海輿地全図が完成したのもこの場所です。



看板はほんとうに駅の階段をのぼったらすぐのところにあります。看板の前には自転車が進んでいてちよつとじやまでした。

周りはビルばかりで昔の建物はありません。そこからタクシースに乗りました。次は忠敬が江戸に出てきて最初に住んだ場所です。

⑧ 伊能忠敬住居

場所 東京都江東区門前仲町一丁目十八番三号

道路のところに「伊能忠敬住居跡」と書かれた碑が建っています。

そろばん塾の前にあります。忠敬は1795年（寛政7年）5月江戸黒江町と呼ばれたこの場所に住みました。そろばん塾は休みみたいで誰もいませんでした。今度は歩いて近くの富岡八幡宮という神社に行きます。神社の近くにはおみやげ屋があります。神社では骨董市をやっていました。お皿とお茶碗などたくさん売っていました。神社を入ってすぐ左に伊能忠敬の銅像があります。

⑨ 伊能忠敬銅像（富岡八幡宮）

場所 東京都江東区富岡一丁目二〇番三号

伊能忠敬は測量のたびに出発する時、この富岡八幡宮に寄ってから出かけました。銅像は大きく後には日本地図があります。手に彎窠羅鍼を持っています。伊能忠敬が測量するときの第1歩の銅像のようです。骨董市を見ましたがいいのはありませんでした。神社で絵はぎを買いパンフレットをもらいました。

歩いて近くの「門前仲町駅」に行き、今度は忠敬のお墓に行きます。大江戸線の「新御徒町駅」で降りタクシースに乗ります。「源空寺」をお願いします。と言うと分からなかったのですが、タクシースの人は無線で聞きました。そしてわかったので出発です。少し行くと到着しました。源空寺です。お寺に入るとお寺は工事をしていました、お寺の横に行ってお寺の人に「伊能忠敬のお墓はどこですか？」と聞きました。「すぐそこです。」と教えてくれました。それからお寺のパンフレットもくれました。お墓は道の反対側にあります。

⑩ 伊能忠敬墓（源空寺）

場所 東京都台東区東上野六丁目十八番

入口に「史跡 伊能忠敬墓 史跡 高橋至時墓」とあります。中に入るとお墓がずつと並んでいます。しばらくさがすとちよつと大きなお墓がありました、ありました！看板があり伊能忠敬墓と書いてあります。お墓は「東河伊能先生墓」と書かれています。横とか後ろを見ると、漢字がたくさん書かれています。なんて書いてあるのかわかりませんが「測量」という字が読めます。それからへんな虫がついていました。忠敬は亡くなる前に自分が死んだら先生の隣にお墓を作ってくださいといいましたが、忠敬の隣には先生の高橋至時のお墓があります。看板もあります。お墓には「東岡高橋君之墓」と書かれています。それからその横には高橋至時の子供で、伊能図を完成させた高橋景保のお墓もあります。帰りに江戸東京博物館に行きました。そこはとても大きな博物館で入るのにもずつと並びました。入場料は無料です。中もとても広く、昔の日本橋がありました。おみやげを買って、お昼を食べようとしたのですが、こんでいてはいれませんでした。近くの「両国駅」から帰りました。今日は疲れました……。

三 千葉県九十九里

新川崎駅からJRで「八日市場駅」でおります。駅には人がけつこういました。もつといなかかなと思つたのですが、そうでもありません。タクシーが待つていたのでそれに乗りました。

「日本寺おねがいします」と言いました。これは「にほんでら」と読むのではなく、「にちほんじ」と読みます。なんだか変です。タクシーで走っていると、だんだんいなかのようになります。だんだん山の

中みたいになり、暗いところも走っていききました。

日本寺には、最近になって発見された伊能忠敬のお墓があります。伊能忠敬のお墓は佐原の観福寺と東京の源空寺と三か所あることになりました。相当タクシーでいきました。そしてタクシーの人が「着きましたよ」と言いました。

⑪ 伊能忠敬墓（日本寺）

場所 千葉県香取郡多古町南中一八二〇—
電話 〇四七九—七六—三七四五

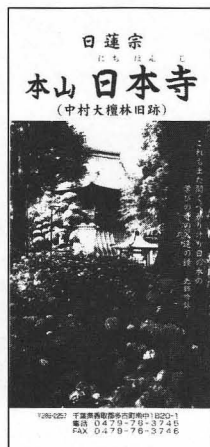
なんだか暗いところで
す。歩いてお寺のほうに行
きました。まっすぐな道で
門があります。だれもいま
せん。お寺に着くとすぐく
静かです。お寺のとなりの

家があるので行ってみました。「すみません」と言うとおばさんが出てきました。私は聞きました。

「伊能忠敬のお墓はどこですか？」するとおばさんは「えっ？伊能忠敬？・・・伊能忠敬は佐原でしょ。」私はびっくりしました。

「伊能忠敬のお墓はないんですか？」
「はい。」

お寺のおばさんは知らないようなので、近くで木の上で葉っぱを切っ



ているおじさんに聞きました。

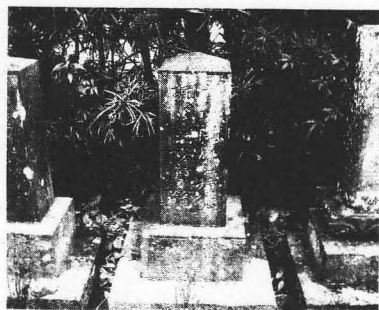
「伊能忠敬のお墓ってしっている？」おじさんは降りてきて言いました。「うちじゃないよ・・・」私は「でも、あるって調べてきたんです」と言いました。「そうだ！」私は持っている本を出しました。その本には「平山家の墓所にある忠敬夫妻の墓」と書かれていました。おじさんは、「平山家のお墓なら、まっすぐ行ったところにあるよ」と教えてくれました。

私は行ってみることにしました。少し歩いていると、さっきのタクシーのおじさんは「帰りはどうするの？もしよかったら待っていいか？」と言いました。私は待ってもらうことにしました。少し歩くとお墓ばかりです。困っていると、たき火をしているおばさんがいました。

「すいません。平山家のお墓はどこですか？」と聞きました。おばさんは「そこだよ」と教えてくれました。そのお墓を見ると、本にでているお墓の写真と同じお墓がありました。伊能忠敬の墓という案内はでていません。お墓には「有功院成裕種徳」と書かれています。

佐原にあったお墓と同じものが書かれています。伊能忠敬のお墓です。

いっしょに「研心院妙唱日鏡」と書かれています。奥さんの達（みち）のことです。でもなんで案内もなにもないんでしょうか？写真をとりました。



さっきのタクシーのところにきました。私は「小堤（おんづみ）に行ってもいいですか？」と言いました。タクシーの人はびくつきしていました。「どうして行くの？」と聞かれたので、伊能忠敬の話をしました。小堤には伊能忠敬が子供のころに住んでいたところがあるので。おじさんは「分かった！」と言ったのですが、道は分からなかったです。

携帯で会社に聞いていました。携帯で道をききながら、片手で運転していました。だいたいようぶかなと思いました。

家の裏の道や畑の細い道を行いました。ものすごくゆれました。携帯でずつと道を聞いていました。ずいぶん走っていたら、タクシーの人は「おかしいな・・・」と言いました。すると急にタクシーを止めて、歩いていたおばさんに聞きました。おばさんは「こっちはないよ」と言いました。「もつと向こうに行つてから聞いたほうがいいよ」と教えてくれました。タクシーの人は「間違えちゃったから、メーターをなおすね」と言いました。しばらく行つてだれかに道を聞こうと思つたのですが、今度はだれも歩いている人がいません。道路の横に碑がありました。

⑫ 伊能忠敬成長の処

場所 千葉県山武郡横芝町小堤七二番地

ここは忠敬が子供のころ、父親に連れられて父親の実家にもどつて生活したところです。「伊能忠敬成長の処」と書かれた碑があります。横に家に入る入口があります。ちよつとのおじさんとおじさんが仕事をしていました。わたしは聞きました。「すいません。あの・・・伊能

忠敬の・・・」なんか聞きづらいです。おじさんは「忠敬をしらべているの?」と言ってくれました。話を聞くと、ここにはもう昔のものはなにもないそうです。「ここは昔子供だった忠敬が住んでいて、すぐ近くに父親の本家があったんだよ。本家はすぐそこだよ」と教えてくれました。わたしは伊能忠敬の父親の本家にもいつてみることにしました。歩いてすぐでした。ありました。

⑬ 伊能忠敬父 神保貞恒の生活

場所 千葉県山武郡横芝町小堤

家の入口に「伊能忠敬父 神保貞恒生活の処」と書かれた碑が建っています。写真をとることにしました。写真をとっていたら、車が来たのでやめました。するとその車が家の中に入っていました。車の女の人ができました。私は「写真をとっていいですか?」と聞きました。女の人は「どうぞ」と言ってくれました。私はその人と話をしました。すると伊能忠敬を研究する人が時々来るそうです。でも中学生はあまりいないそうです。私は聞きました。「昔のものは何か残っていないのですか?」すると「忠敬がもっていた仏像がありますよ」と言いました。それから「特別に見せてあげますね。」と言ってくれました。家の玄関で見せてもらうことにしました。庭にいた犬がずつとほえていました。おくからおぼんにのせた仏像をもってきてくれました。



「これは伊能忠敬のもっていたものです。」小さな仏像です。私は写真をとりました。私はお礼を言って帰りました。

タクシーのほうに少し歩いていると、さっきの女の人が走ってきました。すると「これどうぞ」とビニールぶくろにいっぱいおかしが入っていました。私はびっくりしました。さつき会ったばかりなのに・・・私はうれしくなりました。おかしとかクッキーがいっぱい入っています。私は本当にお礼を言いました。「がんばってね!」と言ってくれました。

道路でタクシーが待っていてくれました。まわりには何もありません。タクシーで一番近いJRの「横芝駅」に行きました。来たときの駅の二つとなりになります。タクシーの人とはここで別れます。

駅はとても静かです。電車はなにか事故があったらしく遅れています。私はのんびり駅で待つことにしました。さつきもらったおかしを食べました。電車が来て「成東駅」まで行きました。駅にはタクシーがいっぱいならんでいました。タクシーで伊能忠敬記念公園をお願いしました。タクシーでずつといたのでお腹がすいてきたので「どこか食べるところはないですか?」と聞くと、コンビニにあるというのでちよつとよつてもらうことにしました。でもお店が一軒だけぽつんとあるのです。中に入ると売っているものは普通のコンビニと同じものでした。おにぎりやきそば、それからお茶を買いました。

タクシーでまた行きました。そして公園の駐車場につきました。タクシーの人が言いました。「もしよかったら待っていますよ」でもお昼を食べるからと言うと「一時間でも二時間でも待ってあげますよ」というのです。それから「もどつてきて私が寝ていたら起きて下さい」と言うのです。おもしろい人です。私は待っていてもらうことにしました。駐車場から少し歩きました。なんだかだれもいなくてこわい道

です。そして公園に着きました。

⑭ 伊能忠敬記念公園

場所 千葉県山武郡九十九里町小関二六八九

公園にはだれもいません。そんなに大きな公園ではありません。入口に「伊能忠敬記念公園」と書かれて、裏には「子午線一度の偉業」がかかれています。私はまずベンチでお昼を食べました。だれもいないのでよかったです。本当に静かなところです。公園のすみに伊能忠敬の像があります。

⑮ 伊能忠敬像（伊能忠敬記念公園）

場所 千葉県山武郡九十九里町小関二六八九

像は忠敬が天体観察しているところですよ。星をさしているのだと思います。なんだかカッコいいです。その横には地方測量の図の碑があります。像の反対側にはもう一つ碑があります。



⑯ 伊能忠敬先生出生之地

場所 千葉県山武郡九十九里町小関二六八九

伊能忠敬はここで生れたのです。碑の横には伊能忠敬生家の木もあ

ります。

公園はだれもいなくてずっと静かです。公園を出ようとすると、なぜか緑色のカエルがいました。なんでこんなところにいるのでしょうか？私はタクシーのところまでもどりました。タクシーの人は寝ていませんでした。

四 茨城県つくば

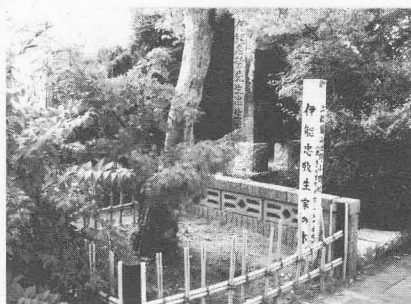
秋葉原から「つくばエクスプレス」という電車に乗ります。電車は新しくきれいです。三〇分ぐらいで「守谷駅」に着きました。駅も新しくきれいです。

そこからタクシーです。間宮林蔵記念館お願いしますという、タクシーの人は分かりませんでした。タクシーの人は後ろに並んでいたタクシーの人に聞きました。

場所がわかったので出発です。

二〇分ぐらいで着きました。タクシーをおりるとびっくりです。なにもありません。ずーっと遠くまで畑です。間宮林蔵記念館はほんとうにいなかの中にあります。タクシーが行ってしまうと帰りはだいいようぶかなとちょっと心配になりました。

記念館の入口には「間宮林蔵之生家」とかいてありました。中に入つてまず、間宮林蔵の生れた家を見ました。とても古くて小さいです。



伊能忠敬生家の木

それから何もなくて、外からまるみえです。冬とか寒い家だと思えます。伊能忠敬の家よりぜんぜん小さいです。

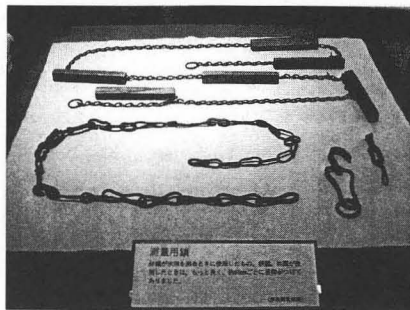
記念館の入口には間宮林蔵の銅像があります。測量で使ったくさりをもっています。記念館にはおじいさんとおばあさんが受付にいました。入場料は無料です。

中はとても小さいです。間宮林蔵が作った北海道の地図などが展示されていました。それから測量に使ったくさりもありました。伊能忠敬も少し展示されていました。とても小さい博物館です。

帰りに受付のおじいさんから「どこから来たのですか？」と聞かれました。私は答えました。それからスタンプを押そうと思った紙をくれました。あと間宮林蔵のお墓が近くにあると教えてくれました。とても親切な人でした。

せっかくなのでお墓に行くことにしました。お墓に行く途中、車がゆっくり近づいてきました。私の横に止まったら、運転していた人が「間宮林蔵記念館はどこですか？」と聞いてきました。びっくりしました。あんなところに行く人がいるんだ。私はすぐそこですと答えました。

少し歩くとお墓のある専称寺に着きました。だれもいません。門を入って左側にお墓があります。大きな階段を上がって顕彰碑の裏に小さなお墓が二つあります。左側が間宮林蔵のお墓で、お墓をよく見ると「間宮林蔵墓」と読めます。右側のお墓は両親のお墓です。身分の



低い武士にあった百姓並のお墓だそうです。

お墓の裏はすぐ土手になっていて小貝川が流れています。だれもいなくてとても静かです。とてものおんびりするけしきです。

祖父の家はすぐそこなのでちよつとよっていくことにしました。タクシーで行きました。とつぜん行ったので、祖父と祖母はおどろいていました。お昼だったのですぐにラーメンを作ってくれました。これからつくばの地図の科学館に行くと言ったら、祖父もいっしょに行くと言いました。

お昼を食べて、今度は関東鉄道の「戸頭駅」から、来たときの「守谷駅」まで行き、乗り換えて「つくば駅」まで行きました。つくば駅もきれいでいろいろなお店があります。そこからタクシーです。国土地理院の中にある地図と測量の科学館に行きました。

入口に入ると、日本全国地図があります。青と赤のめがねがあり、それで見ると立体に見えるとても大きな地図です。

横に地図記号あてクイズがあります。地図記号の裏に正解があります。授業でやったのでほとんどわかりました。

二階に上がり廊下に伊能忠敬の「江戸府内図」があります。北部と南部の二面があります。とても大きな地図です。

展示室にはいろいろなコーナーがあります。その中の古地図のコー



ナーに伊能忠敬の大日本沿海輿地全図の関東（中図）があります。地名が小さく書かれていて、測量した赤い線がたくさん書かれています。長久保赤水の改正日本輿地路程全図もあります。

展示室にはほかにもパソコンやいろいろなコーナーがあります。

科学館の外に出ると大きな日本列島の球体の模型があります。

祖父は疲れたようなのでおみやげの売ってるところでちよつと休みました。入り口のところでスタンプをおして帰りました。

五 東京都港区芝公園

一月二日のお正月。地下鉄の三田線に乗り「芝公園駅」でおります。芝公園に伊能忠敬の記念碑があります。

一八八九年（明治二十二年）に「伊能忠敬先生測地功績表」の碑が建立されました。しかし一九四四年（昭和十九年）第二次世界大戦の時、金属回収政策によって取り壊されてしまいました。その後、一九六五年（昭和四〇年）五月、新たに、「伊能忠敬測地遺功表」の碑が建立されました。

芝公園は地下鉄の駅を出るとすぐそこにあります。公園は大きいです。看板を見ると伊能忠敬記念碑とあります。森の中みたいで階段をのぼると広場みたいなところに出ます。そこに記念碑があります。

日本地図があり、「伊能忠敬測地遺功表」と書かれています。よく見ると日本地図の北海道の北側が点線になっています。そこは伊能忠敬が測量していないところです！

そこは間宮林蔵が測量したところです。それから沖縄県もあります。よくできています。

記念碑の裏のほうには東京タワーが見えます。

それからすぐ近くに東京プリンスホテルパークタワーがあります。行ってみるとロビーが上まで高くきれいです。家族でお茶をしようとしたのですが紅茶が一人一二〇円なのでやめました。

それから近くの増上寺ぞうじょうじに行き、コロッケとメンチカツをみんなで分

けました。

東京タワーにも行きましたが人が多くて入れませんでした。



北海道の北側が点線になっています

六 東京都高輪（省略） 七 もう一度千葉県佐原（省略）

（いしやはるか 文教大学付属中学校二年）

伊能忠敬測量隊が閲覧した

神社・寺院の縁起や宝物

佐久間 達夫

若年の頃から歴史や詩文に興味関心のあった伊能忠敬は、全国測量時にも測量先の神社や寺院に所蔵されていた「縁起」や「宝物」などを閲覧し、その内容をこまめに記述している。特に『日本東半部沿海全図』の將軍上覧によって、測量が幕府の直轄事業になってからは、

老中から諸藩の江戸詰に、領内村々の様子を記した「書上」^{かきあげ}の提出が義務づけられた。それによって、第五次の「測量日記」からは、測量地の村高、家数、人数、神社、寺院、名所旧跡、名産などが詳細に記されている。

○ 箱根権現で、源頼朝と曾我兄弟の所持していた品物を閲覧

老齢のため、参加を断念した伊能忠敬にかわって、第九次測量の隊長となった永井甚左衛門は、隊員十一人と共に、文化十二年四月二十七日に江戸を出立し、伊豆七島を測量した後、下田より熱海、三島へと測進し、富士の山麓を測量して、文化十三年三月二日、相模国宮城野村から箱根宿に至る。箱根では、箱根関所や芦ノ湖の周囲（一周、四里三十町五十九間三尺）などを測り、三月七日に箱根大権現を参詣し、神社保管の宝物を閲覧した。永井隊が閲覧した宝物は、左の通りである。

● 箱根大権現神前宝物・別当所持の宝物

文化十三年三月七日識。

・ 関東惣鎮守箱根大権現 相模国箱根宿（現神奈川県箱根町）

○ 神前宝物

- 一、文珠利剣、同御袈裟、嵯峨天皇御寄進。
- 一、法華勸持品、弘法大師御筆。
- 一、観音十二、一重。同櫛鏡、鎌倉尼將軍寄進。
- 一、一軸、全部法華。弘法大師御筆。
- 一、籠、数珠。^{かこ じゆず} 弘法大師御蹲来。
- 一、鈴、同上。
- 一、五銘、同上。
- 一、大随求陀羅尼、慈覚大師御筆。
- 一、天ノ羽衣 一、神戦之矢根
- 一、泡浮玉 一、牛玉
- 一、駒角 一、簫^{しょう}
- 一、生食台 一、九穴ノ貝

右頼朝公御寄進。

○ 別当所持之宝物

- 一、曾我十郎祐成太刀 備前長延作 名微塵丸
- 一、同 五郎時宗太刀 長三尺三寸 鐔赤銅
- 古鍛冶宗近作 名簿孫
- 長二尺七寸 鐔赤銅無地
- 切羽赤銅毛堀

右九郎判官義経、箱根権現神祇之太刀を取出。

祐成の太刀、鯉口より三寸許、刃表に太刀打痛二か所あり。

一、五郎時宗所持の赤木指柄は、銅金物、赤銅。

一、時宗詠歌。箱根を出る時。

・けふ出て 阿ひ見ん者能かた希越盤

名残りもおし支 志ら気乃累

(今日出でて あひ見ん者の仇おは

名残りもおしき しらきのる)

款詣の時、詠るか。

一、五郎時宗自筆書翰、夜前隣火忽消、貴寺穩感悦千万、委曲可申面詣。恐惶謹言。

二月十三日 時宗

寿福寺方丈

一、古釜ニツ。箱根権現参詣道側にあり。

里人、大釜と唱う。

●『第九次伊豆七島測量日記』 佐久間達夫校訂

文化十三年三月七日 曇天。同所(箱根宿) 滞留測。六時後乗船。

字護摩殿、④印始め、右水底、沖の護摩殿というあり。(中略) 字元正

面、即箱根宮正面上り口、昼休、別当金剛王院。是より権現参詣道添

となる。四ツ辻本道に出て四印を残す。湖辺三十五町四十七間。是よ

り本社打上、左別当金剛王院門前内、正面不動堂、右役の行者堂、左

曾我兄弟の社、石段を登り鳥居を入ると広前、右鐘楼、末に銘を記す。

左御供所、右駒形熊形合社、本社門を入り左右玉垣、左天神稻荷の社

二梁。右神明八幡社二梁。本社拜殿前に打止め一町九間。本社後山の

中腹一町許引上り本宮あり。御朱印二百石。山林竹木境内諸役免除。

関東惣鎮守箱根大権現は、地神五代下化現量乃尊神。合殿三座。天津瓊々杵尊、彦火々出見尊、木花開那姫命。別当金剛王院、元寿福寺、東福寺という。大祭六月十三日。

又、四辻に戻り四印始め、湖辺参詣道測量(中略) 七時頃帰宿。

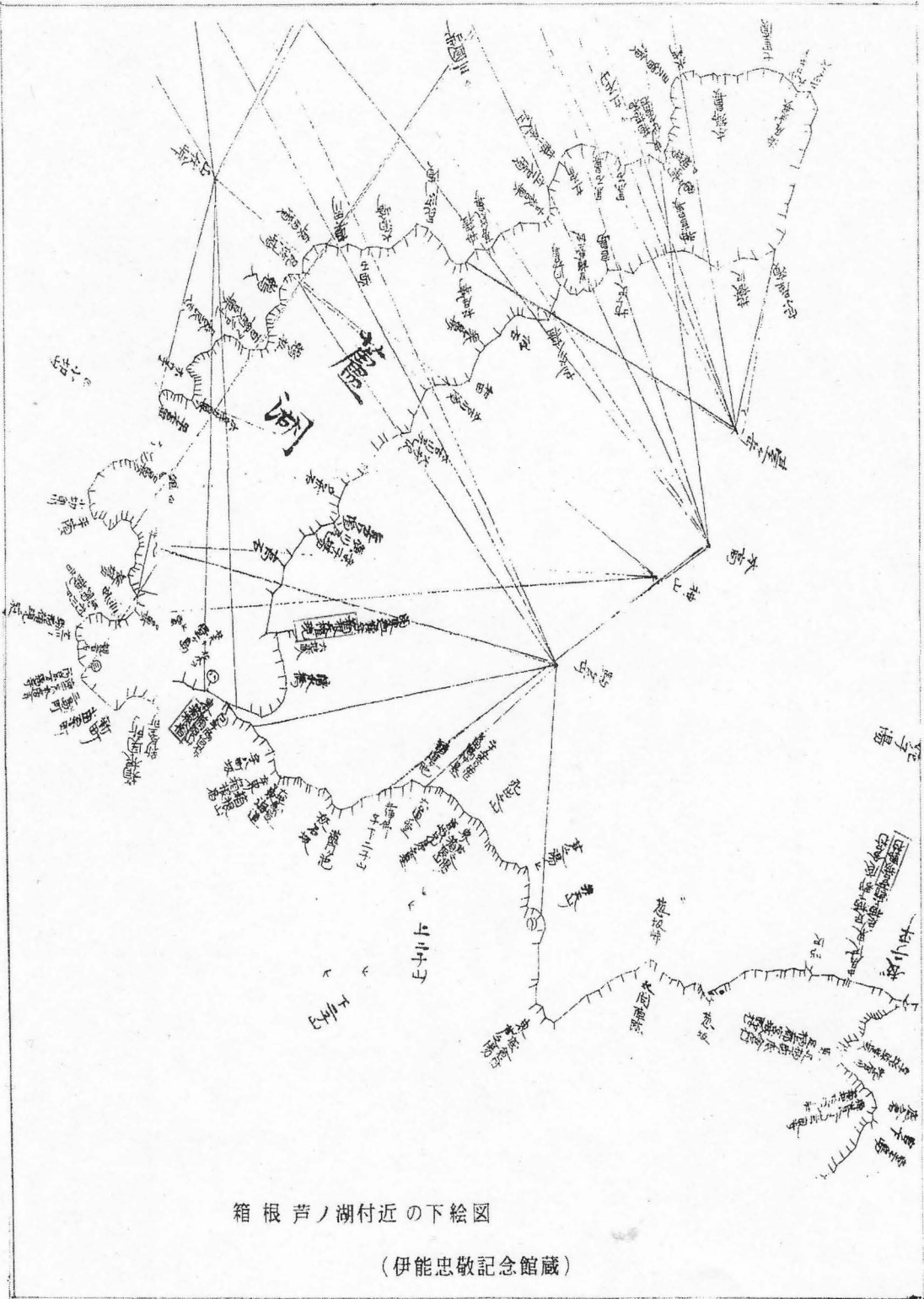
注釈

第九次の測量日記は、誰が記述したかは不明である。しかし、細かい文字で伊能忠敬記述の日記より詳細に記されている。これは測量出立前に忠敬より記述内容を明示されたのであろう。

Nテレビ局の朝の天気予報で、富士山を背に湖水に建立されている箱根神社の朱塗の大鳥居を見ると、今から百九十年程前に永井隊が、この湖の周囲を測量したことを想起し、『測量日記』に記述されていた「二子山の裾に曾我兄弟と虎御前の墓三ツ並べてあり。昔、箱根権現の別当、縁あるに依つて兄弟のもとどりを切り墓を建てるといふ」という文を口ずさみ、感慨無量となる。

(さくま たつお 伊能忠敬研究家)





「もうひとつの伊能図」はすぐ役立ついた

荻原 哲 夫

はじめに

私は「伊能忠敬研究」第43号に『もうひとつの伊能図——忠誨星図——』として投稿しましたが、タイトルの面白さのわりには殆んど反響はありませんでした。これは「地図」の「伊能図」ではなく、「星図・天文図」の話であつたからです。一時的な注目は集めても、案の定、「なあんだ、それだけのこと。」で片付けられてしまったのは仕方ないことでした。でも、大変に貴重な星図が見つかったことは確かなことなのです。

「伊能忠誨日記」から始まった近世天文学史の最重要「星図」発見の騒動を説明する責任を果たさないといけないと思い、続編を投稿いたします。

もうひとつの伊能図「忠誨星図」はすぐに役立つていた。何に役立つたのか？ それをこれから明らかにします。ただし、私の推測が多分に入っていますので注意してお読み下さるようお願いします。

「地図の伊能図」にしか興味がない方には又も、面白くないかもしれません、高橋景保と忠敬先生と孫の忠誨さん等からの遺言を聞くつもりで、お付き合ひ下さい。前回と同じように先ずは因縁めいた話題から入りましょう。

ゴロウニンの取調べと足立左内と馬場佐十郎の松前派遣

高橋景保は、文化九（一八一二）年に足立左内と馬場佐十郎の二人

を拘留中のディアナ号艦長ゴロウニンのいる松前に派遣させたことはよく知られています。足立と馬場は松前滞在中にゴロウニンからロシア語を学ぶなどしたのです。後に、ロシアに帰国したゴロウニンが書いた本が出版されたとき、評判が高かったとみえて、わずか六年後の文政四年には蘭語訳の本が日本の長崎に到着して、幕府は入手したその本を馬場佐十郎・杉田立卿・青地林宗ら蘭学者に翻訳させたのです。ここではロシア語から翻訳された徳力真太郎訳『日本俘虜実記（上下）』（講談社学術文庫）の記述で、必要な箇所のみ紹介します。下巻の四五四頁に次のように書かれています。

「彼（足立左内）はコペルニクスの太陽系説を真理と認めており、天王星（Uranus ユラヌスと発音）とその衛星の発見とそれらの運行を知っていたが、天王星以後に発見された（小）惑星についてはまだ聞いていなかった。……もちろん、暦を扱う天文方らしくロシアで使われている暦法についても質問しているが、ゴロウニンは足立左内から、日本の天文方は（ランデ暦書を読んでおり、）そうした知識は持っているぞという自慢をしたのを聞いたと思われる。さらにゴロウニンは天文方の知らない知識も持っていたのであるが、今は関係の無いことなのでこれ以上触れない。天文方は、天王星の知識は持っていたのだが、その星をまだ実際に見た訳ではなかったのである。そのユラヌス星を日本で最初に見つけることになるのが、なんと、足立左内の倅の足立重太郎信順なのである。

足立重太郎信順のユラヌス星（Uranus 天王星）検出一件

高橋景保は「星図」の作成を計画したとき、当時オランダ経由で入手された「イギリス航海暦」（英国暦）にはユラヌス星の予報暦が出ていることから、当時暗い星まで観測できる望遠鏡（星鏡子午線儀）を製作して実績を積んでいた足立信順に対して、搜索命令を出すことを考

えたようだ。ユラヌス星の概略の位置は英国曆に載っており、判っているの、あとは良い案内星図があれば簡単に見つかると思ったのである。後に「寛政曆書 卷二十三 儀象誌 星鏡子午線儀ノ条」に書かれた通り、「星鏡子午線儀ハ足立信順ガ創製スル所也。(中略) 文政七年四月十五日晨二初メテ新緯星由刺奴斯ヲ見ル、繼イテ毎歲連測ス。」とあって、足立信順が自ら考案して製作した観測儀器を使い、星図を参照しながら見つかったと思われるのである。しかし、信順が「繼イテ毎歲連測」していたという箇所についての確実で具体的な資料が見つかっていなかった。

そんなときに、『天文曆学諸家書簡集』（上原久・小野文雄・広瀬秀雄 編・講談社一九八一年・以下の書簡（番号）はこの書簡集のもの）の中に、書簡（六十四）という大坂の間重新の書簡（渋川景佑宛）が紹介されているのが見つかった。

「ユラヌス星之事、重太郎子丹精之趣珍重ニ御座候。連測軌蹟之圖も出来候由勉強之事ニ奉存候。台南御在日小拙へも右測量之事被仰下、其頃大分ニ連蜜之測量も相試、台南御役所へも遣し置申候。翌年出府見受候処、重太郎子殊之外刻苦丹精独立之体ニ御座候。其後試測も不仕相過申候。……」（ユラヌス星のこと、重太郎氏丹精の様子、結構なことを存じます。連測軌蹟之図も出来上がった由、努力の結果とします。景保先生御在世の頃、私へも右観測のこと命ぜられ、連続して試み、先生のお役所へも結果をお送りいたしました。翌年（文政一〇年）、出府して見受けましたところ、重太郎氏ことのほか刻苦丹精、独立してこれに専念の様子でした。その後は観測もいたさずに、打ち過ぎておりました。「以上は安藤由紀子さんの訳を使用させていただきました。ここに感謝する。」）間重新が、足立信順は重新より先行して連続観測とその軌跡図を作成していたことを証言していたのである。これにより、旧くは間重新が一番先に検出したと思われることがあるのだ

が、訂正されて、足立信順のユラヌス星の検出が日本最初のことであるとされたのである。間重新の書簡（六十四）と寛政曆書の記述が足立信順の名譽を回復してくれたのである。

足立信順の「周天度を過ぎ申したる」行動

しかしながら、書簡（六十四）には続きがあつて、
「是ハ何ニさまちと周天度を過キ申タル意味ニ……」（このやり方はちよつと常軌を逸している）という足立信順の秀才に似つかわしくない行動のことが書いてあるのだ。この箇所についてここで説明するにはかなり複雑で、書かれた時代背景も、高橋景保一件（シーボルト事件）の前と後に起きた事項を重ねて書かれているため、読者を混乱させることが必至なので取り止める。私が推測した事情を紹介して、お許し願いたい。

足立信順は、大変秀才なので、天王星の運動理論（ユラヌス細草）と位置推算の計算表（ユラヌス表）という二冊にまとめることを独自に研究して作成したのであろう。これは高橋至時先生の遺法なので、本来は景保・景佑に許可を得るのが筋である。それを勉強家の信順は、高橋御役所の蔵書、または、伊能忠敬による写本が伊能忠誨の元には存在していたから、信順が独自に読み、勉強することは十分に出来たのである。信順はユラヌス星の検出は命ぜられていたが、その後の連続観測までも進取の気性で先走り、自ら手がけてしまったのであろう。さらにその連続観測の結果を用いて、渋川景佑が着手する予定であつたと思われる運動理論にまで手をだしたことを景保（や景佑）が立腹していたらしいのだ。実際に、運動理論に相当する「ユラヌス細草」はまだ見つからないが、「ユラヌス表」は東大総合図書館に足立信順著の写本が存在している。図書カ

ードには、明時館図書印（渋川景佑蔵書印）と書かれているので、

渋川景佑の蔵書目録にある「ウラヌス細草」と「ウラヌス表」は足立信順の所持していたものを写本したものであるかもしれないのだ。足立信順は大変な勉強家で努力の人であつたようだ。その理由としては、努力せずには足立家を天文方にできない、という思いがあつたからであろう。シーボルト事件の後、景保の手附であつた足立左内と信順はその帰属・配属先を失つてしまう危機に直面したのである。折角、伊能忠誨を指導・援助して製作させた星図が、新たな筆頭天文方・山路家の下に移管されてしまうのを見て悔しかつたであろう。山路・吉田家に対して、信順・糸之助父子は、足立家が天文方に採用されるよう内願書を出したのである。信順のこの願いは、おそらく父である足立左内を飛び越したことになるので、聞き届けられることはなかつたのであるが。

間重新は、足立信順の行動を、「秀才の重太郎が何故そのような常軌を逸した振る舞いをするのだろうか？」と理解出来ずに心配するのである。信順の常軌を逸した行動は、足立家を早く天文方にしたい。ただその一念からの行動であつたと、私は確信している。

『星学手簡』編集のきっかけに

そして書簡の末尾部において、間重新が次のような行動をしたことを書いている。

「先頃、麻田立達の跡に残つた剛立翁の書簡の反古を取調させたところ、寛政中に梅軒公ならびに亡父（重富）が日々に往復させた書簡・返翰の下書二冊が出来てきましたので、一夜それを細覧いたし、誠に剛立翁はじめ梅軒公かつ亡父ノ篤志の厚きこと感激に堪えず、一卷読了する間に数回の落涙をしてしまい、読んでいる間は寛政年

中頃の心持になり、情景が臉に浮かんできました。寛政の頃にはだ
いぶ今まで知らないこともありました。そこで此れは春になったら
私が出来るなら写本を作つて差し上げたいと思います。：

天保二年十二月十八日夜

間重新 拜

渋川景佑先生

この最後の部分は、「涙無しに読めない」本と云われる『星学手簡』に関することである。私もまた同様の落涙の経験をしているが、その『星学手簡』の編集がどのように始まつたのか、その事情ときつかけについて示しているのである。

つまり、足立信順のウラヌス星の一件がきっかけで『星学手簡』の編集が始まつたと見ることが出来るのである。

その『星学手簡』は現在、有坂隆道編「日本洋学史の研究」V巻・I巻（創元社・昭和54年刊）に活字化されている。間重新が書簡に書いているのだが、元々この書は、麻田立達や間重富等、個人が所有していた書状から写本をつくり、当初は二冊本に編集されたものであつた。それが重新から江戸にいる渋川景佑に送付されたのである。さらに、景佑の手元でも、高橋至時や景保が所蔵していた書簡を景佑が、渋川家の手附等の人々を使い、写本の作成を行った、その結果が、国立天文台に所蔵される三冊本の最終版『星学手簡』となつたらしいのである。その意味でも「写本でしか存在し得ない」書であることは確実である。写本作業の過程で、かなりの誤字などが入り込んでしまつている。私たちにとり誤字で有名なものは、間重富から高橋至時宛（寛政八年十一月廿四日出）の伊能忠敬の逸話に関するものだ。「伊能も（曆象考成）後編推歩そろそろと出来申候。……間には彼の火ぼし（大ぼらが正しい）を尋ね被れ申し候。自笑いたされ候」という、忠敬が至時に入門して間もなく、測量で日本地図を作るといふ「大ぼら」を披露して自ら笑つていたといふもの

である。これは間重富がかなりのクセ字を書くので、それを読む人の技量で読み誤ることがあることを示しているのだ。事実、研究会の十周年記念行事（日大文理学部）の際にも、展示された重富の史料の釈文に間違いがあるのを安藤さんが指摘するという場面に遭遇して、「なるほど！また起こった！」と思っただけである。

じつは、『星学手簡』の寛政八年五月八日朝付の麻田剛立から高橋至時宛書簡に

…足立子も、四日の朝 内方 安産、…

とあるのだが、これが足立左内の奥方が長男・重太郎信順を産んだ当日の記述なのである。まさに足立信順は『星学手簡』に縁の深い人物であり、『星学手簡』の申し子なのである。「伊能忠誨日記」に見られる信順の誠実な人柄を知っている私たちにとっては、信順が常軌を逸した振る舞いをするのは、足立家を何とか、失脚した高橋家に代わる天文方にする事で、「伊能忠誨と共に苦勞して仕上げた『もうひとつの伊能図』（忠誨星図）を無にしたくない。」という一念からの行動であると思われるのだ。

天保年間には、シーボルト事件後のそうした動静に危機感をもった幕府上層部の要人の取り計らいもあり、足立左内を天保六年に天文方に抜擢するのであるが、それはなんと左内が数え年で六十七歳のときなのである。信順が天文方の内願を出したのは、万が一に左内が天文方になれぬ場合の二股作戦であるということも理解出来るのではなからうか。

書簡（六十九）「渋川景佑から間重新宛」

前の書簡（六十四）から二年後の、書簡（六十九）「渋川景佑から間重新宛」には、足立重太郎信順に関する記述は、

…曆事を談する者としては、重太ばかりに御座候。左内は兎角、逃げ

勝ちにて何の役にも立ち申さず候。さりながら小子の嘯が取るに足らぬとの事ならんか。

私の書いた「非正午五星測算法」（子午線外の任意の位置で惑星観測し位置を定める法）を差し上げたところ、お受け取りの由、いたってお恥ずかしいしろものです。重太郎氏の書いた方法「以彗星実測数求其経緯度法」（彗星の実測数から其の経緯度を求むる法）よりひどい点があり、加筆訂正して書き直しますので、それと差し替えてください。

と書かれている。

この足立信順の書『以彗星実測数求其経緯度法』は昨年、その存在を知ったのであるが、書簡（八十二）「文政六年十二月二十二日付」（伊能記念館蔵）に書かれている内容「此節工夫仕居候間、脱稿仕候はゞ御目に懸け申すべく候。…」にある書籍のことだったのである。またも信順との因縁であったのだ。渋川景佑の「非正午五星測算法」とは基本的には同じ内容であるが、景佑が説明しているように、信順の方法の方が計算方法において便利で優れているようである。これだけで、足立信順の方が景佑より優秀であると評価するのはやや早計ではあるが、信順が秀才であり、景佑がかなり頼りにしていることの根拠となっている。書簡（六十四）に見られた間重新の心配などの問題に関してもそこには書かれておらず、渋川景佑は足立重太郎信順を曆学の相談相手として頼りになる人物と考えている様子がよくわかり、信順に関するすべての問題は解決したように私には見えるのだが、どうであらうか。

伊能忠誨星図（大方星図）と間重新の「連測軌蹟之図」比較

二〇〇六年秋の大阪歴史博物館で開催されたの間重富生誕二五〇年記念展に展示された間重新の「連測軌蹟之図」を見て、「あれは伊能忠誨

星図の大方星図と似ている。」と直感し、写本ではないかと思った。その「連測軌蹟之図」と呼ばれる画像、間重新の「文政九年丙戌烏刺奴斯（ウラヌス）諸数並圖」の部分を図1に掲げる。

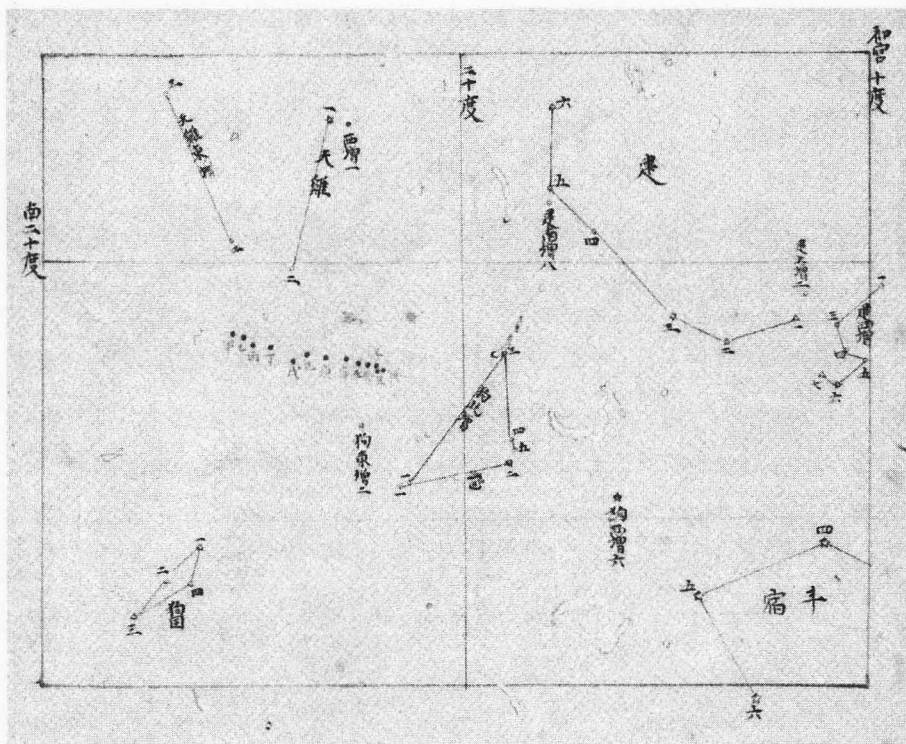


図1 間重新の「文政九年丙戌 烏刺奴斯（ウラヌス）諸数並圖」
(大阪歴史博物館 羽間文庫蔵)

ある。皆さんどうです。良く似ているとは思いませんか。

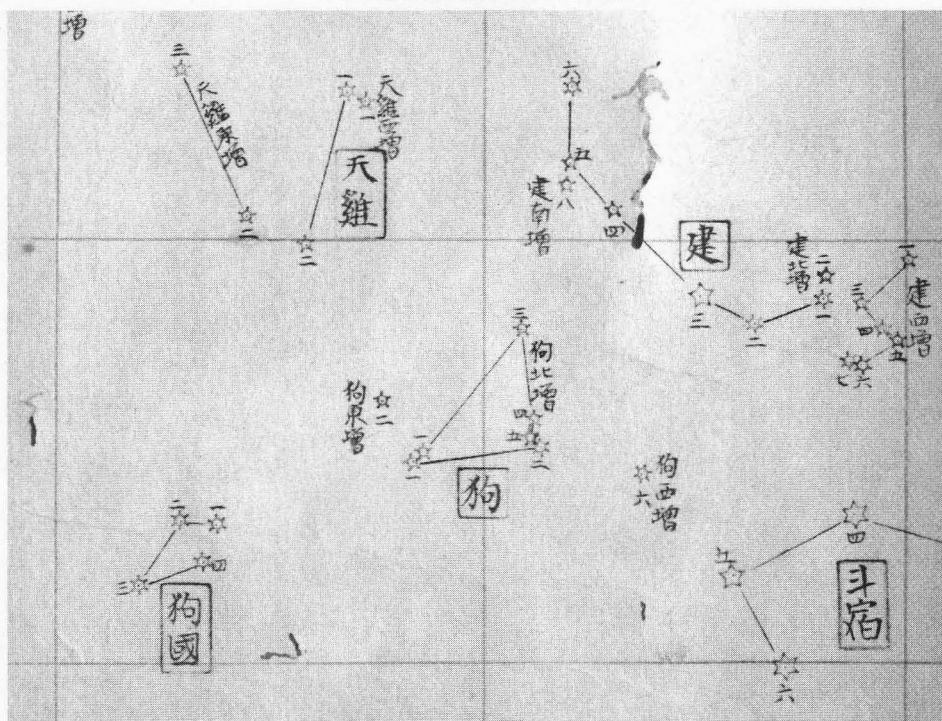


図2 伊能忠誨星図の「大方星図」(伊能忠敬記念館所蔵)

これに対して、伊能家から発見された5種類の伊能忠誨星図のうち、針穴が明瞭に残る「大方星図」の、対応する箇所を示したのが図2で

はじめは、原寸大の写本なのではないかという期待があったのだが、調べてみると、大きさは伊能星図の方が約0.5倍と小さく、原寸大で

の写本ではなかった。しかし、わずかに30度×15度の範囲で、星の数は三十三星しかないのも、新たにプロットするのは大変な手数ではない。それと、「狗国二」という星の位置が1度程南に誤ってプロットされているのを除いて、それ以外の、星名や星宿名の配置具合などの特徴は、極めて良く似ているように見える。

伊能忠誨星図の「大方星図」を見た人、つまり浅草天文台の関係者が作成したと思われるのである。足立信順と仲の良い関係者というところには、渋川景佑の名がすぐに思い浮かぶのであるが、渋川景佑は一八二八年のイギリス航海暦の翻訳である「暗厄利亜航海暦」（あんげりあこうかいれき）を文政一〇年刊で出している。その中で烏刺奴斯（ウラヌス）という表記をしているので、景佑が大坂の間重新へ資料を送付したことに間違いはないであろう。しかし、資料の作成のために、「大方星図」を渋川景佑に見せるなどの協力を足立信順が行っていたとしても不思議ではないのである。そして私は、信順も同様にしてユラヌス星（天王星）を星図にプロットしていた（狗北増の北の字の右側に見えた筈）と思うのである。（その星図は見つかっていないのであるが。）

忠誨星図がもうひとつ役立っていたことがある。それは余にも自明なことであるのでこれまで誰も指摘しないので、ここで先に指摘しておくとしよう。

足立信順が、忠誨星図の「赤道南恒星図」「赤道北恒星図」の2枚を約半分の大きさに縮小して41cm径の木製円盤の両面に貼り付け、表側である南天の南極部に時刻補正の計算図を取り付ける。すると地平線下がうまく隠されて都合が良くなる。真鍮の腕を表裏に取り付けると

図3のように『中星儀』（文政七年刊）が出来上がるのである。

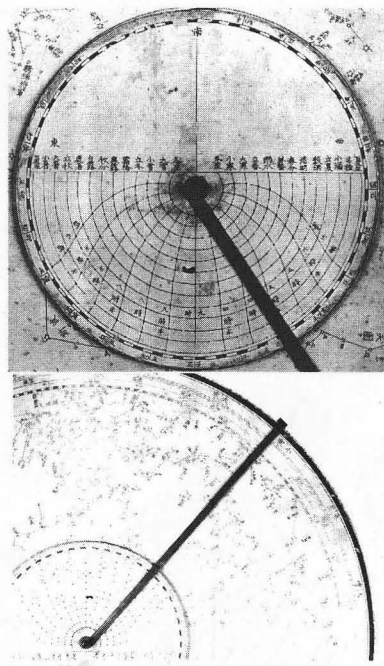


図3 足立信順『中星儀』の
計算図表部分
(伊能忠敬記念館所蔵)

この『中星儀』は（星座早見盤）という利用も可能であるが、箱裏に貼られた凡例の記述によれば、南中する星を知って、不定時法における夜間の時刻を知るための装置なのであって、一種の計算図表（ノモグラム）と呼んでも良いかと思う。これは良く考えてみると大変に頭の良い人が考案したものなのである。「伊能忠誨日記」にも登場する石坂碌平常堅は、忠誨星図の基本データである「儀象考成」の提供者であるのだが、その石坂が作成した星図「方円星図」には付録として「中星候辰表」というものが付いている。

私は、学士院蔵の遠藤利貞翁旧蔵のものと、筑波大学図書館所蔵の「増補分度星図方図」という2つのものを閲覧したのであるが内容は同じものであった。その「中星候辰表」とは、早く言えば、足立信順の「中星儀」の計算図表の元表のことである。つまり、石坂が単に表のままで提供したものを、足立は星図と一緒に図示して使うものに改良を加えて、扱い易く工夫して見せたのである。

足立信順がたいへんな秀才であることは、書簡（六十四）の中で間重新が言っているのであるが、このように伊能忠誨が作った星図を利

用して、別の装置を新たに仕立ててしまうところが、まさにたいへんな秀才であるゆえんであると思うのだ。渋川景佑と同じくらしいの秀才であると云つても良いのかもしれない。この「中星儀」が「工夫之測器」として幕府から褒章されたことは、中村士氏らの論文「高橋景保が描いた星図とその系統」国立天文台報、第8巻、85-110 (2005) にも、

『天文方代々記』の足立左内信頭の条には、「同(文政)九丙戌年七月二日工夫仕候測器差上候處、同八日工夫之測器差上候に付、拜領物被仰付旨、於躑躅之間京極周防守被仰渡、白銀三枚頂戴仕」とある。この「工夫之測器」が何だったのか、代々記の文面だけからでは分からない。しかし上の記述は、安藤由紀子氏によって最近明らかにされた信順から忠誨に宛てた書簡(文政九年七月二日、元伊能家所蔵)の内容、「兼ねて製造の中星儀、当朔日に献上に成り、同日八日に左内が御城へ召し出され御褒美の銀子を頂戴」と、日付と記述が一致するもので、これで「工夫之測器」が「中星儀」であつたことが判明するし、御城に献上に上がったのは父親の左内だつたことも分かる。献上は『中星儀』の出版から二年後に行われたのである。

と紹介されているように、足立信順は自分が製作した「中星儀」を父親・左内に御城へ献上させ、左内の名で褒章をもらうよう親孝行振りを發揮するのである。ただ当時はそれが当たり前の世の中ではある。

まとめと足立左内と重太郎信順の墓のこと

足立左内の倅の重太郎信順が「大方星図」によりユラヌス星(天王星)を本邦初見(検出)をしたことは事実である。さらに信順は忠誨星図を利用して、工夫之測器(の観測機器)である「星鏡子午線儀」

を用いて、天王星の連続観測と記録も残していた(文政十年当時)ことも明らかにした。また、もうひとつの工夫之測器(夜間の時刻を知るための器具)である「中星儀」を製作し、足立家代表の父親・左内に御城に献上させ、左内の評価を高めたことは、高橋景保が失脚した後、足立家を天文方に登用するのに役立ったと信じたい。足立左内は天保六年十一月に百表五人扶持で天文方を仰付けられ、翌月から高橋景保の後任の測量御用に付いた。倅・信順は天保八年十月廿一日に五人扶持で天文方見習を仰せ付けられ、左内を補佐し御用を勤めた。しかし、信順は父・左内に先立ち天保十二年十月廿一日に病死してしまふのである。

ああ、不運なるかな、足立信順。左内を助けて「天保壬寅元暦」の準備に携わっていたのに、天保暦への改暦の二年前に病死して、縁の下の影の功労者として終わってしまうとは！



右は現在、杉並区梅里一一の宗延寺墓地内にある足立左内信頭漢隣の墓碑である。明治期までは下谷(上野)の源空寺からは四〇〇m程度の近いところにあつたのである。そのときは足立家代々の墓石も

あり、その脇に左内が天文方として亡くなった際に、孫の衆之助信行

(重太郎信順の子)が建立したこの墓碑があったのだが、東京府の再開発で現在の地に引越しをした際に、その他墓石は整理され、左内・重太郎とも親交のある佐藤一斎が書いた碑文のあるこの墓碑だけが運ばれたと思われる。

それは最後の天文方であった、孫の信行が亡くなった後に足立家は無縁となってしまうからだ。同じ墓地にある馬場佐十郎殿里の墓は平成五年に杉並区の指定文化財史跡となっている。一方、足立左内(と重太郎信順の)墓碑は未だに指定登録はされていない。馬場に比べて、これまでは目だった業績の無かった左内と信順と思われるいたのであるが、今回書いたように、倅の足立信順は天王星をわが国で最初に見た人であり、大変な秀才で親孝行な努力家である。馬場に比べて品行方正であることなどは、もっと顕彰されて良い人物であると思うのであるが。

杉並区へ引越した宗延寺の足立左内信頭の墓碑は、明治後期の移転の際に失われてしまった足立家の墓石の下に埋められていた足立重太郎信順の分をも代表する、足立家を代表する墓碑である、と考慮されても良いのではないかと思う。それならば十分に指定登録される資格がある。馬場と足立の双方に詳しい、伊能忠敬研究会の安藤由紀子さんや伊藤栄子さんは、この件についてどうお考えであろうか？

おわりに

佐久間達夫さんの『伊能忠誨日記』の連載と『伊能忠敬関係文書目録』作成中に『足立重太郎信順書簡』の閲覧、さらに、伊能忠敬研究会創立十周年記念として、日大文理学部での伊能大図フロア展の特別展示で当時、伊能家に所蔵されていた「伊能忠誨星図」が一部ではあ

ったが一般公開されたことにより、未だにこのような、近世日本天文

学史上の国宝級の史料が眠っていたか、と思われるお宝の発見なのであったが、一般の人から見ると見方・事情は違うようである。私はちよつと肩透かしを食らった感じがしたのであった。

忠敬先生の孫・伊能忠誨と足立重太郎信順の指導・援助によって製作された「伊能忠誨星図」は、伊能洋・陽子御夫妻により、伊能忠敬記念館に御寄贈されて、めでたく無事に関係史料と一緒に収蔵されたので、ひと安心なのである。しかし、その星図と関係する写本類が日本各地に存在する。それについては今後、中村士先生等が専門的な調査結果を発表されるようなので、それに期待をしたい。

最後に、安藤由紀子さん、「伊能忠誨星図」を閲覧させていただいた伊能洋・陽子さんご夫妻に感謝いたします。この推測の多い、拙文を読んでいたいた読者の皆さんにも御礼申し上げます。

(おぎわら てつお・天文学史研究家)

追記

渋川景佑の「非正午五星測算法」や足立信順の「以彗星実測数求其経緯度法」について知りたい方は、『近世日本天文学史(下)』渡辺敏夫著・恒星社厚生閣(1987年1月発行)の「第11章 本朝彗星史」のpp.695-698の「3. 彗星観測法」を参照されたい。(735頁の文献8で足立信順の方法にも少し触れている。)なお、渡辺先生の本は、「伊能忠誨日記」の内容や「伊能忠誨星図」の存在を知らない時期に書かれている。

伊能家のおひなさま

■今年も『伊能家のおひなさま展』が伊能忠敬記念館で開催された。記念館のHPには、「伊能家には、伊能忠敬から数えて4代目の娘たちの2組（江戸時代と明治時代）の雛人形が伝わっています。五節句のひとつであるひな祭りの時期に合わせて展示します。」とあり、この時節恒例の行事として記念館の呼び物の一つとなっている。

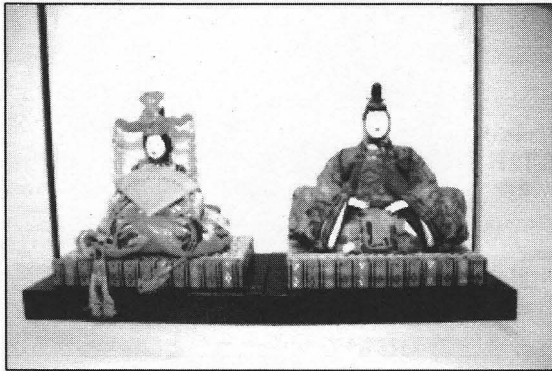
この雛人形については、会報三十一号「芳名録こぼれ話」（伊能陽子氏）に次のような記述が見える。

「芳名録に」揮毫をお願いしたのは、佐原の旧宅で忠敬の遺品を守り続けた祖母孝（こう）である。祖母は慶応三年生まれ、八八才で亡くなるまで毎日のように見える見学者に、地図を広げ測量器具を並べて丁寧に解説することを天職としていたという。五姉妹の長女が孝で、次女ます（藤岡）三女りつ（須賀田）四女かつ（猿田）五女えむ（桧垣）と、さぞ賑やかであったことだろう。祖母八八才のお祝いの写真には、セピア色の中に四人のおばあさまが、見事に並んでいる。

挑の節句が近づくと記念館に飾られるお

雛様は、このおばあさま方のものである。雛道具の箱の中には、手作りの小さな手習い帖や、人形の着物などが残されている。姉妹がお雛様を飾り、人形遊びをしている風景をあの旧宅に重ねると、ほのぼのとしてくる。」

伊能家に伝えられてきた2組の雛人形は今では佐原の伊能忠敬記念館で年一度、雛祭りに訪れる人々に、伊能家の娘たちの歴史を無言のうちに語りかけている。なお、佐原ではひな祭り期間中に各家々でもお雛さまを一般に公開する催しを行っている。



伊能家のおひなさま（伊能忠敬記念館HP）

「佐原のおかみさん会」が中心となっており、ひなさま展に協力し、ここ数年ですっかり定着。町の人々も喜んでいうという。この時期、佐原訪れる人々は風情ある街並みと併せて優雅なお雛様を楽しむことができる。

◇伊能忠敬記念館 ☎0478・54・1118

近刊紹介

◇関孝和三百年祭記念出版

『関孝和の人と業績』

関孝和三百年祭事業実行委員会監修

佐藤健一・真島秀行編

研成社 平成二〇年三月刊



◇記念展示「関孝和と和算の世界」

3月6日(木)～4月10日(木) 月曜休館

東京理科大学近代科学資料館 無料

代数・行列式・ベルヌイ数などの発見者、

関孝和の人生と業績、著書などから学ぶ

問合せ先 ☎03・5228・8224

『伊能図における経線のズレについて(2)』

グーグルアースを用いた伊能図の地球への投影

吉田 正人

一、はじめに

伊能忠敬研究第三二号では、伊能図に描かれている経線が、現代の地図の経線と比べてズレている原因について、大谷(一九一七)をはじめとする伊能図の研究者がどのように解釈したかを整理した。

その原因として、(1)伊能測量隊は天測によって正確な緯度を測定したが、経度の測定には成功しなかったこと、(2)伊能図(文政四年図)は、標準子午線が異なる地方図を接合したため、地方図総合化のズレが生じたこと、(3)伊能図は、地図投影法を考慮せずに作成された平面図の上に、地球が球面であるという知識に基づいた仮想の経線を引いたため実際の経度とズレが生じたことを明らかにした。

高橋至時は、地方図を総合化して全国図とすにあたり、地球を球体とみなし、経線だけでなく、緯線も円弧を描くようにする、いわゆる円錐図法に似た地図投影法を考えていたといわれる(大谷一九一七)。しかし平面図から円錐図法への変換は、高橋至時の病没によって実現せず、伊能忠敬は緯線を東西に引いた直線のままとし、経線が北極点に集中するように斜交させる方法を採用した。しかし、海岸線を経線にあわせて変形することはしなかったため、伊能図の海岸線と経線がズレるという問題が生まれてしまった。

そこで、伊能図を現代の地図投影法を使って地球の上に投影することができないものかと考えた。現代ならば、文政時代には考えもつかなかったコンピュータや地理情報システム(GIS)などによって、

高橋至時や伊能忠敬が実現しようとしてできなかった地図を一瞬にして作ることができる。今回利用したのは、インターネット上で最もよく利用されているグーグルアースである。

二、グーグルアースを使って伊能図を地球の上に投影する

(1) 前提条件

1、伊能図は天測によって緯度を測定しているため、緯線は信用できる。とくに北緯三五度付近は東海道往復途中に何度も天測しているため信頼性が高い。これに対して北海道の天測は一度きりだが、伊能忠敬が自ら天測した最北の緯線として、釧路・厚岸付近を通過する北緯四三度を基準にすることとした。

2、伊能図は地図投影法に基づいて作られたものではなく、平面図の上に地球が球面であるという知識に基づいて経線を引いたものである。そこで伊能図の経線は京都を基準とする標準子午線を除いてすべて消し去ることとした。

3、これに代えて、江戸、下関、長崎を通過し、北緯三五度線と直交する直線を引き、経線の基準とした。これは以下の理由によるものである。文化元年図では江戸を基準とする標準子午線が引かれ、地方図レベルでは衛星画像の海岸線とほぼ整合している(清水他二〇〇二)。また保柳(一九七四)が試したように、北緯三五度線に垂直に経線を引いてみると、現代の地図の経線とほぼ同じようになる(第三二号図2)。また廣瀬(一九七四)によれば、四国・九州の各地の経度は下関を通り北緯三五度線に垂直に引いた経線を基準に計算すると、現代の経度と大きくズレていない(第三二号図3)などから、江戸、京都、下関、長崎を通る子午線は信用できると考えたからである。

(2) 方法

1、文政四年の伊能小図三枚をスキヤナーで読み込み、アドビフォトショップのフォトマージュ機能を使って、地図総合化のズレを生じないように接合する。

2、二本の緯線（北緯三五度、北緯四三度）とそれに直交する四本の経線（江戸、京都、下関、長崎）を目立つ赤線で引きJPGファイルとして保存する（図1）。

3、グーグルアースのイメージオーバーレイ機能を使ってJPGファイルを読み込む。グーグルアースの日本列島の衛星画像と伊能図の両方が見えるように透過度を調整する。

4、グーグルアースの表示メニューからグリッドを選んで経緯線を表示させる。まず伊能図の二本の緯線（北緯三五度、北緯四三度）をグーグルアースの緯線に合わせ、次に伊能図の江戸、京都、下関、長崎を通る経線を、グーグルアースの位置と合わせる。

(3) 結果

この結果、平面図であった伊能図は、地球の上に正確に投影された（図2）。そればかりでなく、伊能図の海岸線は、一部を除いては、グーグルアース上のNASA（米国航空宇宙局）の衛星画像とピタリと重なったのである。例外は、知床から稚内にいたるオホーツクの海岸線であり、間宮林蔵による測量区間である。北海道南部から屋久島にかけては、ほとんどズレることなく重なった。

この結果から、伊能図のズレは、地図投影法を考慮せずに作成した平面図の上に、地球が球面であるという知識に基づいた経線を引いたことが、主たる原因であったと考えられる。

(4) 考察

地理情報システムに精通した方からは、二本の緯線と四本の経線をガイドにオーバーレイすれば、地図が重なるのは当たり前ではないか

というお叱りを受けそうだが、平面図としての伊能図の完成度が低ければ海岸線はこれほどにまでピタリとは重ならない。

また、江戸、京都、下関、長崎を通る経線を、グーグルアース上の位置と合わせたことについて、果たして江戸時代に経度の測定ができていたのかという疑問を抱く方もあるかと思うが、文政時代にはすでに、江戸、京都、長崎など主要な都市の経度は知られていた。これに関して面白いエピソードがある。

シーボルトは、欧州に持ち帰った伊能図の写しをロシアのクルーゼンシュテルンに送り評価を求めた。クルーゼンシュテルンは、伊能図における長崎と京都の経度差が、自分自身が文化元年に実測した長崎の経度とシーボルトが高橋景保から聞いた京都の経度の差と一致することから、伊能図は正確な緯度測定に基づいて作成されたものと信じた（大谷一九一七）。

これに関して、廣瀬（一九七四）は、東京天文台が所蔵する渋川景佑（高橋至時の子）の蔵書の付箋から、高橋景保がシーボルトに告げた京都の経度は、クルーゼンシュテルンが測定した長崎の経度に京都との経度差を足したものであると推測している。一方、金窪（一九九八）は、伊能忠敬の測量に先立つ一七七五年には、高橋至時は英国を基準とした京都の経度差の算出に成功していたと述べている。

このエピソードからも、当時すでに内外の研究者による観測によって、長崎、京都、江戸など主要な都市の経度は知られており、四本の経線を基準に文政四年の伊能図をオーバーレイすることには、それほど問題があるとは思われない。

三、伊能図の経線のズレとその後の展開

(1) シーボルトの日本帝国図

シーボルトは、文政九（一八二六）年に高橋景保から伊能図（文政四年図）を入手し、それをメルカトル図法に直した「日本人による原図および天体観測による日本帝国図」九州島、四国島及び日本島を一八四〇年の著書の中で発表している。シーボルトは伊能図の経線が正しいと信じ、伊能図の経線をメルカトル図法に直し、それにあわせて海岸線を書き直している（清水一九八八）。そのため、北東北はさらに東にズレ、それを補うため北陸（とくに佐渡・能登）が東西に延びた横長の形をしている。文政四年図の経線をもとに海岸線を書き直したため、ズレがさらに拡大してしまったのである。

なお、シーボルトの日本地図は、高橋景保が漢字が読めないシーボルトのためにカタカナ書きにした伊能小図を、幕府に押収される直前に書き写したものが元になっていると言われるが、筆者はこれには疑問を呈する。カタカナ書き小図には、銚子市の犬吠崎が、「イヌホウサキ」と書かれているにも関わらず、シーボルトの日本地図には「Daibosaki」と誤って記述され、漢字の「犬」を「大」と読み違えた可能性がある。おそらくシーボルトは漢字で書かれた文政四年図あるいはそのコピーを密かに持ち出すことに成功していたのではないかと思う。

（2）英国海軍の日本朝鮮近傍沿海図

英国海軍のアクティオン号は、文久元（一八六一）年に来日し、海図作成のため沿岸の測量を行おうとしたが、その際、幕府の通訳として乗船した荒木清三郎が地名等に関する質問に答えるためとりよせた伊能図を見て、ワード艦長がその価値を知り、オールコック公使を通じて伊能図を入手したといわれる。

明治一五年に佐野常民が東京地学協会で、また大正三年に長岡半太郎が東京地理学会で行った講演で紹介されて以来、この逸話はしばしば引用され、戦前の修身の教科書にも「英国海軍はその地図の精密さ

におどろき測量を中止して帰った」と誇張して喧伝された。

この地図が英国の国立海事博物館に現存することを渡辺一郎氏が一九九二年に確認し、一九九五年には日本古地図学会から「英国にあった伊能忠敬の日本全図」として出版され、一九九八年には江戸東京博物館で開かれた伊能忠敬展において実物が展示公開された。

筆者はこの地図をみて、津軽海峡、江戸湾、相模湾、駿河湾、伊勢湾など、主な航路に鉛筆で補助線が引かれ、伊能図の経線をもとに比例配分によってメルカトル図法の海図を作成しようとした作業工程がはっきりと残っていることに驚いた（第三二号写真1）。

「日本朝鮮近傍沿海図（一八六三）」は、伊能図をもとにメルカトル図法にしたものだが、もし英国海軍が伊能小図に残されている鉛筆の補助線に基づいてメルカトル図法の日本地図を作成したとすれば、シーボルトの日本帝国図のようになったはずである。しかし現実には、英国海軍は伊能図の経線の誤りに気づき、むしろ海岸線をそのまま生かして経線をメルカトル図法の経線に改めている。

英国海軍水路部の技術者がいつどのようにして伊能図の経線の誤りに気づいたのかはわからない。おそらく英国海軍は伊能図を入手した後も日本沿岸の測量を続け、伊能図の海岸線は正確であり、後から仮想の経線が書き入れられたことに気づいたのであろう。

なお幕府から英国海軍が伊能小図を入手したちょうどその頃、日本追放を解かれたシーボルトが再来日して幕府の顧問として江戸に滞在していた。金窪敏知（一九九八）は、幕府がイギリスに伊能図を与えたことと、シーボルトとの関係を次のように推測している。一八六一一年八月、アクティオン号が神奈川に投錨していたころ、シーボルトは病氣と称して休暇をとり横浜に行き、一ヶ月後に江戸に戻っている。

オールコックが幕府に伊能図を請求したのはシーボルトが休暇を申請した一週間後であり、翌月アクティオン号が出港するとシーボルトは江戸に戻っている。金窪は「七月五日のイギリス公使館襲撃事件直後のシーボルトの活躍から推しても、両者の時間と場所の一致に伊能図をめぐる単なる偶然ではない因縁めいたものを感じる」と述べている。

一八六三年、メルカトル図法に改められた英国海軍の日本朝鮮近傍沿海図は、勝海舟によって日本語に翻訳され「大日本国沿海略図（一八六七）」として逆輸入されている。また伊能図を非公開としてきた江戸幕府も、メルカトル図法に改めた伊能図に幕府外国掛が測量した小笠原諸島を加えた「官版実測日本地図（一八六七）」を印刷発行した。欧米系の住民が居住する小笠原諸島を日本の領土と主張するためには、小笠原諸島を含む日本地図の印刷発行が必要となったのであろう。

明治になって陸軍参謀局が作成した「大日本地図（一八七七）」、内務省地理局が作成した「大日本国全国（一八八三）」などの日本地図は、いずれもメルカトル図法に改められた伊能図をもとにして、樺太、千島列島、琉球諸島などを加えたものである。こう考えると、伊能図の経線のズレを修正した英国海軍水路部の功績は大であると言わざるを得ない。

四、おわりに

本稿では、伊能図は步測と天測に基づく平面図であるという原点に立ち戻って、後から記入された仮想の経線を取り去り、ある程度信用できる経線と緯線をもとに、グーグルアースを使って伊能図を地球に投影した。その結果、伊能図の海岸線は現代の衛星画像ともピタリと重なり、非常に正確なものであることが改めて明らかとなった。高橋至時がもう少し長生きをしていれば、このような伊能図ができていた

かもしれない。

ありのままの伊能図を評価する方々からは、このような方法をとることについて、批判的なご意見もあるかもしれない。しかし一四〇年以上前の英国海軍が伊能図の経線のズレの問題を解決しているのに、未だに伊能図がズレているという誤解を持っている日本人が多いことを残念に思い、このような方法によって高橋至時や伊能忠敬が、作ろうとして作れなかった地図を再現してみた。経度の測定や地図投影法などの技術が確立していない時代にあつて、伊能図は地球上における位置づけを意識した最初の日本地図であつた。本稿が伊能図の意義を理解する一助となれば幸いである。

引用文献（第三二号を含む）

大谷亮吉（一九一七）伊能忠敬、岩波書店

金窪敏知（一九九八）世界測量史における伊能図、伊能図に学ぶ（東京地学協会編）、朝倉書店

清水靖夫（一九八八）伊能図のゆがみ、忠敬と伊能図（伊能忠敬研究会編）、アワ・プランニング

清水靖夫・長岡正利・渡辺一郎編（二〇〇二）伊能図、武揚堂

羽田野正隆（一九九八）伊能図の評価と今後の課題、伊能図に学ぶ（東京地学協会編）、朝倉書店

廣瀬秀雄（一九七四）伊能忠敬の全国測量と経度問題、伊能忠敬の科学的業績、古今書院

保柳睦美（一九七四）伊能図の意義と特色、伊能忠敬の科学的業績、古今書院

（よしだ まさひと 江戸川大学社会学部教授）

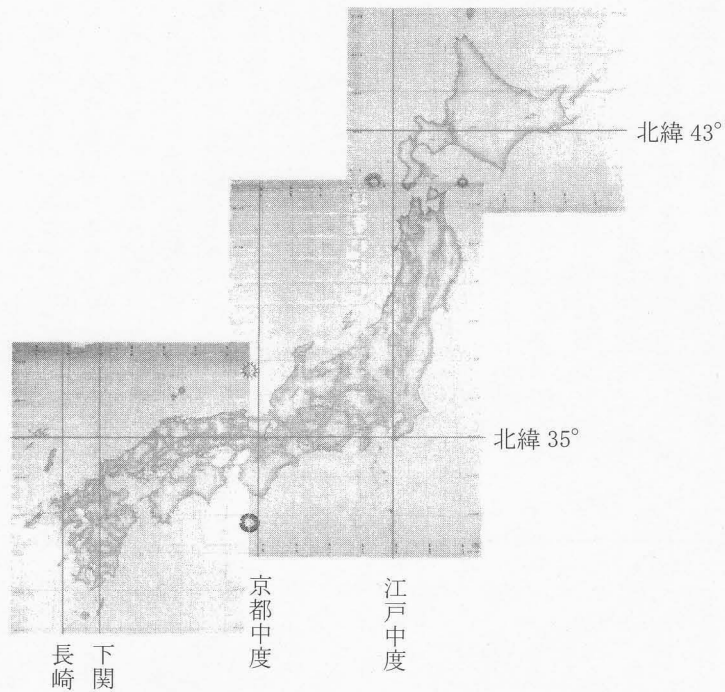


図 1. スキャナーで読みこみ接合した文化四年伊能小図（国立科学博物館蔵）

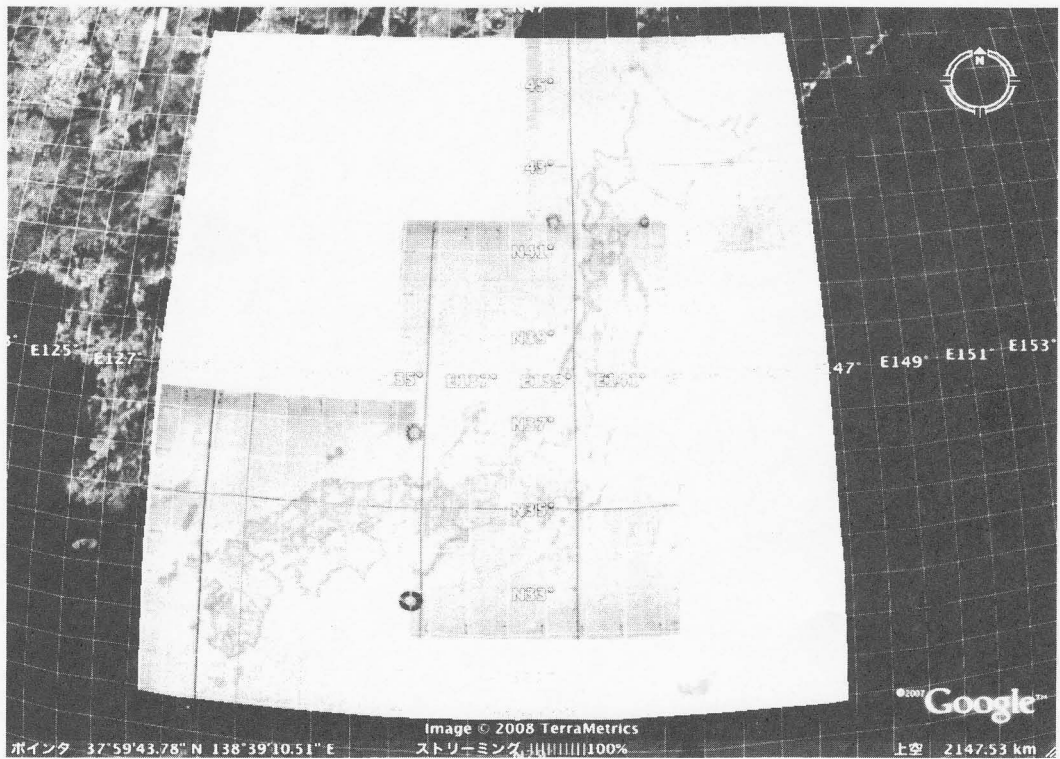


図 2. グーグルアースのイメージオーバーレイ機能を使って投影した伊能小図

新潟支部だより

歩測教頭先生と小伊能隊

垣見 壮一

「前略 村上市上海府小学校の大滝友和先生と
会いました。山北町の広報誌に先生の記事
がありましたので同封します。・・(略)」

新潟支部から編集部に届いたお便りと
数々の資料。忠敬ゆかりの地で伊能忠敬の
足跡を追う教頭先生をご紹介します。

村上市立上海府小学校の大滝友和先生は、
社会科の授業の一環として児童たちに測量
体験の学習を実施。それも「当時の様子に
基づいて」みずから紋付袴姿となり編笠を
かぶって伊能忠敬に扮するという熱心さ。
その様子は地元の新聞にたびたび掲載され
ています。また、児童たちの測量・地図作
り体験をまとめた「伊能忠敬新聞」を発行。
二百年前の測量隊の苦労を体験した児童た
ちの感想文を掲載しています。ユニークな
教頭先生と、児童たちのほほ笑ましい奮闘
をご覧ください。

(編集部)

(かきみ そういち 新潟市)

Long Long ago

ふるとの
歴史¹⁰

伊能忠敬の山北測量



大滝友和(北集 57歳)

1802年9月(新暦10
月)伊能忠敬の測量隊が山北
に現れます。忠敬が克明に記
した『測量日記』から、山北
での様子をいくつか紹介しま
す。

第一は測量隊の宿泊先。

山北一日目、温海を出発し
た忠敬は午後2時府屋に到
着。宿は「又左衛門」。現在
の府屋集落中央にある元新潟
県議会議長で今は亡き富樫又
太郎氏宅。翌日は終日府屋に
逗留。三日目、測量班は鶴泊
の難所を測量し、午後2時寒
川に到着。「市助」に宿泊。
四日目、笹川流れを山越えて
測量、午後2時浜新保着。宿
は「藤助」。五日目、鳥越山
を越えて村上へ。

宿にはどこも午後2時ごろ
と早く到着しています。これ

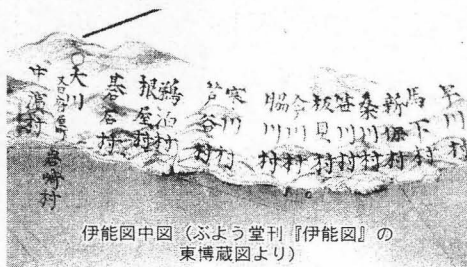
は、その日の測量の整理や夜
の天体観測などのためだと考
えられます。
第二は、山北の海岸線の測
量がいかに大変であったかと
いうこと。

『測量日記』によれば、寝
屋から芦谷までと、今川から
笹川までは舟で移動していま
す。弟子たちは測量のため、
山越えをしていることが伊能
図に朱線として表記されてい
ます。

山北に来たとき忠敬は56歳
でした。舟に乗った区間は険
路で、老齢の身では測量不可
能であったためでしょう。実
は、府屋に滞在していたと
き、塩野町にある米沢藩代官
所の栗原某が忠敬を訪ねてい
ます。そのとき府屋以南の海
岸線の様子、特に測量難所の

情報を受けていたのでしょ
う。乗舟はあくまでも予定の
行動だと考えられます。
第三は加藤儀助という人
物。

忠敬一行が碁石を過ぎた付
近で、八幡村の大庄屋でも
あった板屋沢の庄屋、加藤儀
助なる人物が送別に現れてい
ます。この人物が明治23年の
第1回衆議院議員選挙に当選
した加藤勝弥氏の縁者になる
のか否か。勝弥氏の後裔の人
などに聞きましたが分かりま
せんでした。しかし、興味は
深まるばかりです。



伊能図中図 (ふよう堂刊『伊能図』の
東博蔵図より)

「広報さんぽく」2007年12月号



12月号 (22)

開

毎週日曜日発行（ただし第5日曜日を除く） 2007年（平成19年）9月23日 第1,223号 4



村上市の上海府小学校 佐藤淳校長は20日、社会科授業の環として、同市柏尾とゆかりのある伊能忠敬の足跡

伊能忠敬になれたかな

上海府小児童らが海岸線を測量

を学ぼうと、当時の様子に基づいた測量体験を行った。社会科を担当している大滝友和教頭は、笠をかぶった袴姿の伊能忠敬に扮して登場。荒川町の測量会社、新潟巧測の佐藤巧社長が講師として招かれ、今日は、自分の足で地図と歴史を（とどろましよう）とあいさつ。大滝教頭の先導で「伊能隊」が校門をスタートした。

取り組んだら、6年生の児童15人は、コンパスを使って角度を測る「方位係」や、測量基点の目印となる「梵天係」などを担当し、同校から柏尾の海岸線約500メートルを11のポイントに分けて計測していった。方位係の佐藤祥樹くん5年生は、想像していたより、伊能忠敬がすごく大変な思いをして地図を作っていたことが分かった。みんなと協力し

伊能忠敬に扮する大滝教頭（左）と、時間半掛けて測量した約500メートルの海岸線

笠をかぶり袴姿で伊能忠敬に扮した大滝教頭（左）
梵天と方位計で測量する「伊能隊」の児童たち
「村上新聞」2007年9月23日

て楽しくできました」とこり。伊能忠敬が、測量の途中で宿泊したという「佐藤惣兵衛家」跡地の前でも計測を行った。

今後授業のまとめとして、今回の測量結果をもとに「2500分の1の地図」を作製する予定だ。



2007年（平成19年）
9月23日（日）

（発行所）

〒958-0842
村上市大町2番11号
株式会社 村上新聞社
TEL 0254 (53) 1409
FAX 0254 (53) 6088
URL <http://m-news.jp>
MAIL info@m-news.jp

伊能忠敬『測量日記』（柏尾村付近）

同二十日 朝より曇天。六ツ半頃 新保出立。海岸白砂。それより鳥越と云岩海へ出る。卑を上下す。それより又馬下の大峠を上下し、又岩石の上を通る。無類の大難所なり。（略）馬下村（御料所。米沢領。家数三十七軒）。早川村（右同断。家百十五軒）。此所休（宿市右衛門）。それより度々雨。吉浦村（同断。家百十八軒）。此所迄栗原清右衛門送来て別。柏尾村（村上領。新保より家七十軒）。九ツ頃に着。止宿。庄屋惣兵衛。里人云。根屋より新保迄を上海府と云。馬下より岩ヶ崎迄を下海府と云。旧榊原領なりと。村々の人品古風にして敦朴なり。（略）此御料所、御預の海府百姓の如き、貞実なるは、米沢領にはなしと栗原氏語られし。右村々嶮岨にて、馬の通路もなければ、人歩に而此嶮岨を送らんも歎かしと。（略）宿まで村継に相送り。（略）是は村々貞実の徳ならんと感じけり。

同二十一日 前夜風雨なり。朝曇る。六ツ半頃 柏尾出立。（略）太間島村（村上領。家六十二軒）。野湯村（御料所。此村藤十郎御代官所。家二十七軒）。大月村（同断。家四十二軒）。岩ヶ崎村（村上領。家十三軒）。瀬波村（村上領。小湊。家数百九十七軒。家作よし）休宿。近蔵。家作よし。（柏尾より瀬波迄二里十三丁五十七間）。それより岩船町（村上領。家数七百九十軒、内に寺十一軒、社家二軒）。以下略



発行所
新潟日報社

〒950-1189
本社 新潟市西区曾久772-2
郵便振替口座 00620-2-538

■購読申し込み 0120-0840-20

■読者応答 025-378-9448
(午前10時～午後5時 土、日曜、祝日は除く)

■写真サービス 025-378-9320
(午前9時～午後5時 土、日曜、祝日は除く)

■番号案内 025-378-9111

■日報ホームページ
<http://www.niigata-nippo.co.jp/>

©新潟日報社 2007年



伊能忠敬ゆかり 村上・上海府小

地図作成へ測量に汗

伊能忠敬が測量した上海府の海岸線で測量を体験する上海府小の児童ら。村上市柏尾

村上市の上海府小でこのほど、江戸時代に伊能忠敬の測量を体験する授業が行われた。忠敬は約二百年前に同校周辺を訪れ、近くの家で宿泊したことが分かっている。厳しい残暑の中、児童らは紋付きはかまで忠敬に扮した大滝友和教頭らの指導を受けながら、先人の足跡を学習した。

測量体験は五、六年生(複式学級)の社会科の授業として行われた。江戸時代の学習で取り上げ

先人の偉業体感

た伊能忠敬が、同校がある村上市柏尾でも測量したことから、体験授業をするようになった。

児童十五人は測量の目印になる梵天と呼ばれる竹製の棒やコンパス、巻き尺などを用意。計測方

法を教えてもらって、約一時間半かけて学校正門前から海沿いの約五百メートルを測量した。

最初は初めての測量に戸惑っていたが、すぐに慣れ、「巻き尺が曲がっているよ」「ちゃんと梵天を支えてよ」など声を掛け合っていた。児童らは計測結果を基に二千五百分の一の地図を作成するほか、学んだ内容を新聞にまとめる。

厳しい残暑の中、二百年前に伊能忠敬が測量した上海府の海岸線で測量を体験する児童たち。計測結果を基に2500分の1の地図を作成するほか、学んだ内容を新聞にまとめる。

「新潟日報」2007年9月26日

ト 越

六年の伊藤聖也君(三)は「測量は難しかった。暑くて大変だった」とバテた様子。同学年の本間京太君(二)は「暑い日も寒い日も測量を続けた伊能忠敬は大変だったと思う」と話していた。



発行所
新潟日報社
〒950-1189
本社 新潟市西区豊久772-2

伊能忠敬に変身!

村上・上海府小が測量体験

江戸時代、日本を初めて正確な地図を作った測量家、伊能忠敬について調べている村上・上海府小学校の児童11人が25日、学校近くの市道で測量体験した。児童は測量会社員から計測方法を知り、地元住民から忠敬にまつわる話を聞き、先達の偉大さを感じた。



真剣に測量体験に取り組んだ上海府小学校の児童たち。25日、村上市柏尾

地道な作業 理解深める

測量体験は社会科の授業で行われた。約三百年前に忠敬が上海府を測量した同様の方法を試した。当時の雰囲気になじむと児童は、三度がきつなを身に著して江戸時代にタイムスリップ。この日に向けて、測量時に目印として使う燈台と呼ばれる竹製のポールを用意した。

児童は記録や距離測定などに係を分担。岩船荒川町の測量会社社長、佐藤巧さん(左)からコンパスや巻尺の使い方などを指導を受け、約一時間、江戸時代風に測量した。

同市間島の本間嶋一さん(左)が「忠敬は同じ歩幅で歩き、足で測っていたそうです」となご当時の様子を話すと、児童は地図完成までの苦労や過程などの理解を深めた。

本間嶋一さん(左)は「地道な作業を何度も繰り返して地図を作った忠敬を尊敬します」と笑顔で話していた。

江戸時代さながらに三度笠とみの姿で測量体験する上海府小学校の児童たち。

「新潟日報」2004年10月27日

伊能忠敬新聞

児童は測量体験の感想を新聞にまとめました。

忠敬はこんな人

忠敬は全国を測量しましたが、最初天体観察をしていました。それは忠敬が小さいころからもっていた夢でした。あと測量をしなくてはしときという人にでし入りさしてもらいました。よしときは忠敬の天文学の力におどろいていました。その忠敬をみてよしときは「すいほ先生」とよびました。それから年がすぎて忠敬は日本全国の測量をしに1800年に江戸をでました。そして3年たち、1803年、江戸にまたもどってきました。その後も2年たつてからこんどは西日本にしゅつぱつしました。そういうふうな測量をしにいった忠敬忠敬の歩いたきよりは地球一周分あるいたそうです。

(S・Aさん)

(S・A さん)

測量・地図作り

測量のやり方

①まずぼんてんという目印になる物を計りたい所に立てる。

②小方儀という角度を計る道具でぼんてんまでのかくどを計る。

③ぼんてんまでのきよりをまきじやくで計る。

がっこうにもどったら地図作りをしました。

地図作りのやり方

①角度時計回りに計って印をつける。

② 1/2500の地図を作るから距離わる2500をする。

③紙に線を引く。このようにやりました。実際に地図を作りました。

忠敬が日本地図を作ったおかげでいまの地図があるんだと思います。

(I・M さん)

感想

伊能忠敬は全国をこんなに歩いてすごいなと思った。測量体験をして勉強になったし、伊能忠敬のことも分かった。地図作りも全国を書くのはむずかしいなと思った。ヨーロッパから伝わった学問や技術をもとにして測量が行われたことがびつくりした。(M・Nさん)

測量と地図作りをしてみても、私は柏尾の地図をつくるだけでも大変だったのに忠敬は日本中を歩いて地図をかいいたのですごいなと思いました。(K・Aさん)

(K
・
A
さん)

私は測量をして忠敬はあつい日も寒い日も測量しつづけていたの
で「すごいな。」と思いました。忠敬は地図が完成するのに何年間もか
かったので大変だったと思いました。

(I・Mさん)

(I・M さん)

※希望により児童の名前はイニシャルで表示しました

[illegible]

[illegible]

の日はすかし
ヨロヨロから伝わ、たゞ
や技術

[illegible]

思ひました。

中(心)地(區)
皇(帝)女
作(ら)れ
か(の)ま
い(る)
地(方)
あ(る)
た(く)

[illegible][illegible]

忠敬談話室だより

【お便りから】

■鈴木全一 元佐原市長 香取市

前略 このたび50号記念の会誌をお送り下さりありがとうございます。記念誌を読ませて頂きながらいろいろの事をなつかしく思い浮かべております。世紀越えの伊能ウオークに参加できたこと、加藤剛氏の国立劇場での舞台、映画等々、忠敬翁の偉大さを見直すイベントが日本中を駆け巡り、その日本の歴史的偉人 伊能忠敬翁を育てた、私たちの郷土、佐原を誇れる幸せを感じたこと・そう、もう足掛10年になるんですね！その節は伊能洋様・陽子様始め皆様方に大変お世話になりました。今尚渡辺一郎名誉代表を中心にさらに一歩一歩着実に翁のご遺徳・業績を顕彰し続けておられる研究会の活動に新めて敬意と感謝を申し上げます。寒さ厳しき折、お身体を大切になさって下さい。 敬具

鈴木全一 元佐原市長から伊能陽子さんあてに届いたお手紙です。研究会の皆様へのメッセージが含まれておりますので、ご本人の承諾を得てここに紹介させていただきます。鈴木元市長には二〇〇一年四月発行の会報第25号巻頭にも『伊能完歩に寄せて』と題しお嬢さんと歩いた塩尻―松本間のウオークの想い出などエッセイをお寄せいただいております。伊能ウオークでの大役本当にお疲れさまでした。また、このたびは素晴らしいお手紙をありがとうございます。

前略

この度50号記念の会誌をお送り下さりありがとうございます。記念誌を読ませて頂きながらいろいろの事をなつかしく思い浮かべております。世紀越えの伊能ウオークに参加できたこと、加藤剛氏の国立劇場での舞台、映画等々、忠敬翁の偉大さを見直すイベントが

日本中を駆け巡り、その日本の歴史的偉人 伊能忠敬翁を育てた、私たちの郷土、佐原を誇れる幸せを感じたこと・そう、もう足掛10年になるんですね！その節は伊能洋様・陽子様始め皆様方に大変お世話になりました。今尚渡辺一郎名誉代表を中心にさらに一歩一歩着実に翁のご遺徳・業績を顕彰し続けておられる研究会の活動に新めて敬意と感謝を申し上げます。寒さ厳しき折、お身体を大切になさって下さい。 敬具

一歩一歩着実に翁のご遺徳・業績を顕彰し続けておられる研究会の活動に新めて敬意と感謝を申し上げます。寒さ厳しき折、お身体を大切に召さて下さい。 敬具

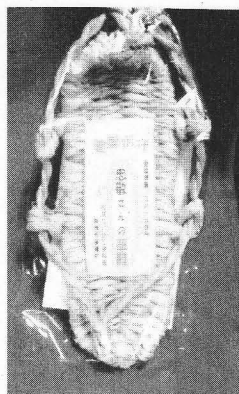
伊能陽子様

鈴木全一

日々の話題

■河崎倫代さん「忠敬さんの草鞋」

九年前に亡くなった河崎さんのお祖母さまが寝込む直前まで作っていた草鞋。実家に残っていた数十足に「健脚御守」と名づけ、「能登さいはて資料館」オリジナル土産として販売中。なお、発送はしていませんのでお求めは現地です。



「全国測量 この一歩から」
忠敬さんにちなんだ草鞋

お知らせ

■「伊能大図フロア展」福島県須賀川市虹の台100日程 平成20年3月19日(水)〜4月6日(日)会場「ムシテックワールド」(養老猛司館長)内容 松宮輝明氏(会員) 所有の資料展示などふくしま科学振興協会 ☎0248-89-1120

■「描かれた朝霞」絵図・地図に見る郷土の風景日程 平成20年3月15日(土)〜5月6日(火)会場 朝霞市博物館 ☎048-469-2285講演会 4月12日(土) 講師 清水靖夫氏

■国立歴史民俗博物館 ☎043-486-0123第3展示室リニューアルオープンミニ企画展『ものからみる近世』絵図・地図からみる近世

■八王子夢美術館 ☎042-621-67772・15・3・29 「静影の版画家」城所祥展

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

―予定―

発表誌 原則として年四回

第52号 締切 3月末 発行 5月

②例会・見学会の開催

第53号 締切 6月末 発行 8月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第54号 締切 9月末 発行 11月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9750

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

（07年8月よりアドレスが変更しました）

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿 規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。手書き、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。併せて、話題、情報、近況などのお便りお待ちしております。

伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadtaka.org/>

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

<http://www.tt.rim.or.jp/koko>

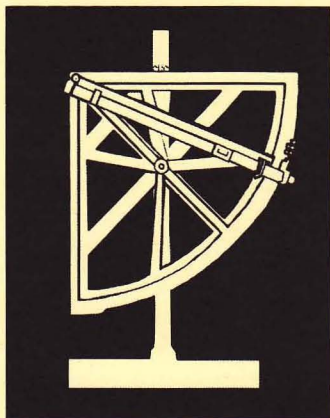
編集後記

◇近年、天文学が賑やかだ。冥王星が「惑星失格」で太陽系の惑星が「スイキンチカモクドツテンカイ」の八つになったのは一昨年のこと。最近では「海王星以遠の惑星X」や二五〇個もの「太陽系外惑星」の存在が話題に。系外惑星には有機化合物も確認され、生命体の存在に現実味が出てきた。◇木火土金水の五惑星は古代ギリシャや古代中国ではすでに知られていた。つぎの天王星は望遠鏡以後の一七八一年に英国人が発見。「ウラヌス」と命名されたこの星は、極東の国の天文学者たちを観測に駆り立てた。忠誨も土蔵の前の天文台でウラヌス星を観測したのだろうか。◇この惑星に発見者の名前をとって「ハーシェル」と名付けたのは『ランデ暦書』の著者ランド。『ランデ暦書』は高橋至時の寿命を縮めたが、作者ランドは至時の死後まで長生きし、一八〇七年に七十四歳で没した。◇「もし星空が千年に一夜だけ現れるなら、人々は驚愕し、その記憶を幾世代にもわたって語り継ぐだろう」とはエマソンの詩だが、現代人は夜空を見上げることもしなくなった。このごろ、世事に振り回されて視野が狭くなっている自分を感じる。春の宵、三鷹の天文台の公開観測会にでも出かけてみようか。

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.51 2008



TOPICS I

- Historic Spots about Inoh Tadataka (1)
- The Inoh Walk Project Part II is in the Planning Stage
- Walking along the Karatsu Highway
- A Problem in Mathematics made by Tadataka's son Shuzo
- Place Names Related to the Year of the Mouse

- Shinzawa Yoshihiro 1
- Watanabe Ichiro 2
- Nikkei Shimbun 3
- Niigata Nippo 4
- Saitoh Hitoshi 5
- Inoh Yoko 6

FROM VISITORS' REGESTERS

TOPICS II

- Report on Excavation of Inoh Tadataka's Former House
- Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (5)
- The Inohs' Old Graceful Dalls of the Girls' Festival

- Katori City 8
- Hoshino Yoshihisa 16
- Editorial Department 60

ARTICLES

- Mamiya Rinzo and Background of Siebold Affair (2)
- Egawa Hidetake's Letter to Inoh Tadataka
- A Report of Study Trips on Inoh Tadataka (1)
- Histories and Treasures of the Shrines Visited by Inoh Team
- Another Inoh Map Made by Inoh Tadanori
- Disparity of Meridians on Inoh Maps(2)

- Otani Tsunehiko 26
- Fujioka Takeo 33
- Ishiya Haruka 36
- Sakuma Tatsuo 49
- Ogiwara Tetsuo 52
- Yoshida Masahito 61

BRANCH REPORT

- A Vice-Principal and Little Survey Staffs in Kashio, Niigata

- Kakimi Souichi 66

MEETING ROOM

- Letters from Members
- Daily Topics and Informations

- Editorial Department 72

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY